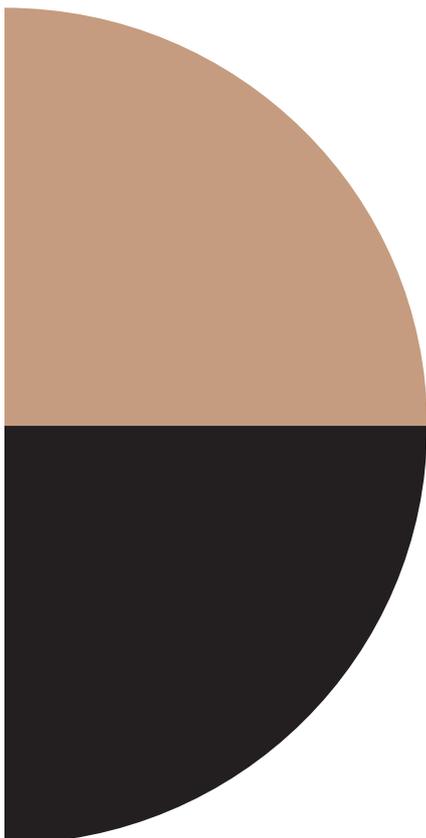
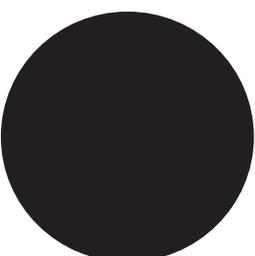
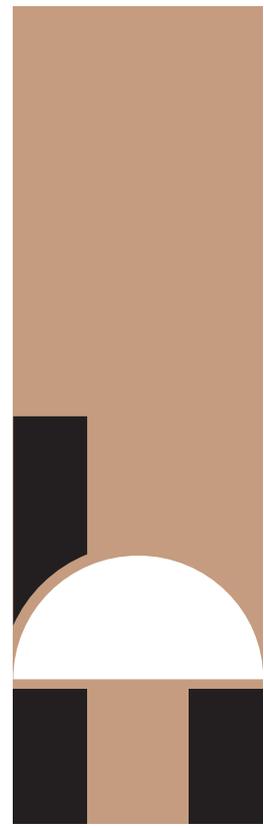
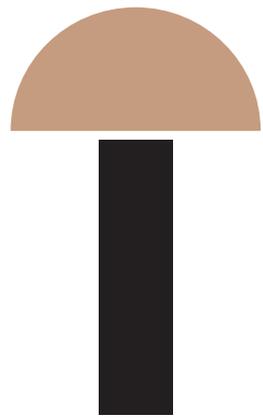


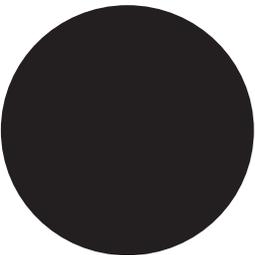
**THE SAISON
FOUNDATION**

ANNUAL
REPORT
2016

April 2016
to
March 2017



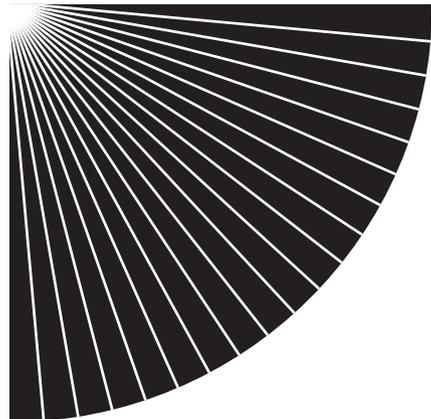
30th anniversary



公益財団法人 セゾン文化財団

2016年度 事業報告書

2016年4月 - 2017年3月



THE SAISON FOUNDATION

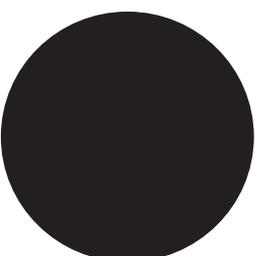
ANNUAL REPORT

2016

April 2016

to

March 2017



目次

4	ごあいさつ
8	鼎談I「創立者の精神とその継承をめぐって」
14	鼎談II「セゾン文化財団の舞台芸術界における役割」
22	セゾン文化財団30年に寄せて
27	データで見るセゾン文化財団の30年
50	事業概要
54	本年度の事業について
59	助成事業
60	I. 芸術家への直接支援
82	II. パートナーシップ・プログラム
96	III. フライト・グラント
101	自主製作事業・共催事業等
110	事業日誌
111	会計報告
114	評議員・理事・監事・顧問名簿

5	PREFACE
7	30th Anniversary Special Articles (in Japanese)
52	PROGRAM OUTLINE
56	ABOUT OUR PROGRAMS IN 2016
59	GRANT PROGRAMS
62	I. Direct Support to Artists
84	II. Partnership Programs
97	III. Flight Grant
101	SPONSORSHIP, CO-SPONSORSHIP AND OTHER PROGRAMS
110	REVIEW OF ACTIVITIES
111	FINANCIAL REPORT
114	TRUSTEES, DIRECTORS, AUDITORS AND ADVISER

当財団はお陰様をもちまして今年で30周年を迎えました。今回はこれを記念して、これまでの財団活動の歴史を振り返り、今後を展望する特別編集のアニヴァーサリー・レポートをお届けいたします。

私はつねづね、財団活動を特徴づけるものは、その時間軸にあると感じています。つまり財団は、長期的な視野で活動を構想し、長い時間をかけてそれを遂行していくことができる、社会に数少ない存在だということです。殊に、行政も企業も、短期的な成果が求められるあまり、ますます近視眼的になりつつある昨今、この特質は改めて強調されるべきでしょう。

私どもが取り組んで参りました芸術活動の支援においても、こうした財団の長い時間軸は大いに強みになるものだと思います。嬉しいことに30年も経ってみますと、当財団が支援させていただいた方々が今、現代演劇や舞踊の世界でそれぞれ重要な位置を占め、シーンを力強く牽引されていることに気付かされます。これらすべてを当財団の“成果”と謳うつもりはもとよりありませんが、私どもが行った支援活動の結果を俯瞰的に確認するにも、やはり相応の時間が必要だったのは確かだといえます。

もっとも、継続が命である財団の歴史からみれば、30年はそれほどの年月とはいえません。わが国でいえば、現存する助成財団の第一号といわれている角館感恩講などは、すでに130年を超える歴史をもちますし、民法で公益法人が制度化される前まで辿っていきますと、活動史を文化元年(1804年)まで遡れる助成財団もあります。これらに照らせば、当財団は未だ、せいぜい第一章を終えたといったところでしょうか。

私たちはこれからの30年を見据えつつ、芸術文化の振興に向けてなお一層の努力を重ねて参る所存です。皆様にはこれまで同様、暖かい励ましとご支援をお願いできれば幸いに存じます。

公益財団法人セゾン文化財団

理事長 伊東 勇

The Saison Foundation celebrated its 30th anniversary in 2017. In commemoration of the anniversary, this special edition of our annual report reflects on the history of the Foundation's activities and discusses its prospects for the future.

I have always thought that what characterizes a foundation's activity is its timeline. In other words, a foundation is a rare existence in society that is capable of planning an activity with a long-term perspective and executing it over a long period of time. Especially in our times, when both governments and corporations have become more and more shortsighted due to pressure on them to present immediate outcomes, we should draw attention again to this characteristic of a foundation as an advantage.

This temporal quality of a foundation's activity must be a great advantage also in support for the arts, which we have long been working on. To our delight, 30 years is an enough length of time to let us see our past grantees fill in current important positions in the fields of contemporary theater and dance as well as leadership. I would not dare to say that all that is the "outcome" of the Foundation's activities, but it is true that we needed a certain length of time to be able to comprehensively evaluate the results of our supporting activities.

However, for a foundation, of which essence is its continuation, 30 years is not a very long period of time. For instance, Kakunodate-Kanonko, which is said to be the oldest existing grant-making foundation in Japan, has a 130-year history. If we trace back to the times when the concept of public interest corporations had not yet been institutionalized by the civil law, there is a foundation whose activities can be traced back to 1804. In comparison to these foundations, I would say that The Saison Foundation has only completed its first chapter.

Looking ahead to another 30 years to come, we are determined to work even harder to promote the arts and culture. I would like to express our gratitude again to your generous encouragement and support.

Isamu Ito
President, The Saison Foundation

30周年を記念しておこなわれた【鼎談I】では、当財団の原点である創業者・堤清二(辻井喬)の精神を、生前堤と親交が深く、現在も当財団の評議員、理事としてお務めいただいている方々に回顧していただいた。【鼎談II】では、かつて当財団の助成を受け、現在も舞台芸術界の第一線でご活躍の方々に、演劇・舞踊を取り巻く状況や当財団への期待を語っていただいた。

さらに、助成財団としての当財団の特質について、また文化政策的視点からみた当財団の位置づけについて、それぞれご専門の立場からご寄稿いただいた。

■ 一柳 慧 (作曲家・ピアニスト・公益財団法人神奈川芸術文化財団芸術総監督・当財団評議員)

■ 小池 一子 (武蔵野美術大学名誉教授・十和田市現代美術館館長・当財団評議員)

■ 鍵岡正謹 (岡山県立美術館顧問・当財団理事)



©鈴木雅哉

鍵岡 財団設立30周年を迎えるにあたって、今日は、創立者である堤清二(辻井喬)、あるいはセゾングループとのかかわりが長いお二人に、少し昔のことから伺いたいと思います。一柳さんは西武美術館ができたころに「ミュージック・イン・ミュージアム」※1をおやりになって、のちにオペラ『愛の白夜』もおつくりになりましたね。

のびのびと自由にやらせてくれた

一柳 私は60年代にニューヨークに二度行っていましたので、堤さんとお会いしてお近づきになったのは70年代に入ってからです。ニューヨークの60年代は芸術の黄金時代でした。MoMA(ニューヨーク近代美術館)やグッゲンハイム美術館、メトロポリタン美術館などでは、どこも美術館のなかにコンサートホールがあって、私もジョン・ケージらと何度かコンサートを開かせてもらいました。こういうことが日本でもできたら、と思っていたところ、本当に70年代の初頭に堤さんがそういう機会をつくってくれたのです。非常に開放的な、お人柄をそのまま反映したような場になりましたね。ただ、私にそれをやらせてくれたのは有難かったのですが、私がやるとなるとどうしても前衛音楽とか現代

音楽になってしまう。ですから多少躊躇というか、おっかなびっくりでしたが、堤さんは予算をつけてくれただけで、口はまったく挟みませんでした。とてもやりやすい環境をつくっていただいた。その後いろんなところで始めましたが、日本ではあれが、美術館で音楽をやった最初ですね。そのころ堤さんは、西武劇場(現・パルコ劇場)やスタジオ200※2、あるいは軽井沢の高輪美術館(現・セゾン現代美術館)などをどんどん手掛けていきましたね。軽井沢のオープンにはマルセル・デュシャン夫人とジョン・ケージと一緒に来られましたが、そのときも私は催し物をやらせてもらいました。本当にいろいろな機会をもらって有難かったですね。

小池 あの時バリ、ニューヨークのアーティストのお仲間が誘い合って軽井沢へ、という感じでした。彫刻のダニ・カラヴァン、美術評論のピエール・レストानीも来ていたのです。

一柳 そうでしたね。西武美術館のほうでは、アメリカの作曲家・フレデリック・ジェフスキーとか、アフリカの超絶技巧の打楽器奏者・カクラバ・ロビとか、色んな人を招いて、本当にのびのびと自由にやらせてもらいました。

鍵岡 ニューヨークでご覧になって「いいな」と思われて

いたことと合致したわけですね。

一柳 そう、ぴったりとね。あと、スタジオ200で観世栄夫さんとやったイエーツの『鷹の井戸』…

鍵岡 あれは素晴らしかったですね。

一柳 堤さんはいろんな面で先見の明があって、文化施設もつくられたし、美術では当時最先端だったジャスパー・ジョーンズ、リキテンスタイン、サム・フランシスや、日本で活発に活動していた作家の作品をどんどん蒐集していた。木が育って環境ができていくような感じがしましたね。

鍵岡 なるほど…そのずっとあとになりますがおペラ『愛の白夜』をおつくりになった。あれはどういう経緯で？

一柳 あれは私にとって3作目のグランドオペラで、私が関係している神奈川芸術文化財団からの委嘱でした。ユダヤ難民が日本を通過する際のビザの発給を6000人に対して行い命を救った杉原千畝の話で、以前から構想を温めていたのです。それで、戦争を体験している堤さんにその脚本を依頼しようと思って、打ち合わせの日程を決めて伺ったのですが、なんとその前日にアメリカで9・11が起きた。私は「こういう状況だから少し様子を見ましょうか」と言ったのですが、堤さんはすぐに「いや、いまは確かに状況が良くないかもしれないけれど、世の中というものは2、3年もすれば変わります。オペラが完成するころには違う世界になっているでしょうから、ここで躊躇する必要はないです」と前向きにおっしゃった。ですから計画を止めることはしませんでした。杉原千畝がビザを発給してユダヤ人を救うことについて、日本の政府はかつて反対していたわけですから、この話はまだまだ日本では“市民権”をもっていない時期だったのです。「先見の明がある」と私が言ったのは、たとえばこういうところですよ。

鍵岡 堤さんは(杉原がビザを発給した場所である)リトアニアにも行かれたんでしたよね。

一柳 とても行動が早くて、この話が出てすぐに行かれたらしいです(笑)

フラットで、分け隔てのない人

鍵岡 小池さんの、堤さんやセゾングループとのかかわりを少しお話いただけますか？

小池 個人史ともかかわってくるのですが、私が駆け出しのコピーライターだったころ、西武百貨店の仕事がしたいと思い、デザインの仲間に紹介してもらって宣伝部に伺いました。当時堤さんは、宣伝部に気軽にヒョイと顔を出したりしていらっしゃいましたが、ある時私に「高輪会のカタログをやりませんか?」と言わ

れたのです。高輪会という催事では、アール・ヌーヴォーのガラス器などの高級品を販売していたのですが、私はそういうものの価値をちゃんと表現できるようなアート・ディレクターと一緒に仕事をしたいと思って、田中一光さんにご相談しました。写真も安齋吉三郎さんという素晴らしい写真家に撮っていただいて、“たかが”美術の頒布会なのに、非常に重厚なカタログができた。その時に堤さんは、田中一光さんの力を見抜かれたのでしょうか、その後、次々と田中さんに相談したいというお話がありました。最終的に田中さんはセゾングループのアート・ディレクターになれるわけですが、すべてあの時がきっかけだったのです。私は海外研修を経て西武美術館のアソシエート・キュレーターとなっていたのですが、セゾン文化財団をつくられたときに、私に声を掛けてくれたことに実はハッとしました。一方に美術の財団=セゾン現代美術館があるのに何故(舞台芸術を主領域とする)こちらの財団を手伝うように言われたのかと考えたとき、人の話を本当によく聞いてくれていたのだということに気付いたのです。なぜなら私は、早稲田の学生時代、演劇しかしなかったですから。堤さんに、すぐれた演劇仲間と共に過ごした時間のことをお話したりしていたので…、演劇を主体とするこの財団の評議員にと言われた時は、すごいキャストिंगのディレクターだと思いました。演劇の財団に参画するという事は自分にとっても重要なモメントになりましたね。デザインとアートの両方の道を私は走り始めたのですが、西武美術館ができるころに欧米をよく旅行していましたので、新しい美術の動きについてよく堤さんと話をしていました。ジャスパー・ジョーンズの初期のコレクションは、ロサンゼルス私の友人からの情報が基になっています。そのころ京都国立近代美術館で、メトロポリタン美術館の衣装研究所と仕事をしたんですけど、そのときに“キュレーター”という存在を目の当たりにして、日本の“学芸員”とはずいぶん違うという話を堤さんにしたことがあります。展示までしっかりと監修する仕事なので、これはとても重要だと。そうしたらいろんな機会でお話をしたわけですが、堤さんはものすごい数の人と会っていたでしょうから、いろいろなチャネルからの情報を蓄えた大きな器だったと思います。引き合いに出すのも恐縮ですが安部公房さん、武満徹さんのような大きな存在の場合は、そのお話が西武劇場、Music Today※3などへの展開となっています。堤さんとお話が弾むとき、デザインの仕事とかアートの仕事とか、そういう分類はないのです。広告であそこま

での仕事を田中さん、浅葉(克己)さん、糸井(重里)さんたちができたのは、大きな目で見てくれたからでしょう。田中さんの事務所は青山にありましたが、セゾンの仕事を夜中までやっていて“青山の灯台”と言われていたんですよ(笑)。当時、青山に次々と、デザイン事務所とか、写真家の事務所とか、小さなクリエイティブスタジオができ始めて、そういうところの人たちが田中さんを中心に集まってしょっちゅうパーティーをやっていましたね。そうしたパーティーにはいろんな人が来るものですから、堤さんも面白がってよくいらしましたよ。美術館の構想、そしてセゾン文化財団につながる演劇の柱をつくっていくということも、広告や商品開発の部分も、堤さんにとっては“フラット”な関係で、つまり“ハイ”も“ロー”もなくて、見ていて気持ちのいいほどでした。広告作りの会議での発言も、美術についてくれた場で話す時も、創作するという点においては違いがない。いわゆるセゾナルチャーは、そういうなかで育っていったのだと思いますね。

いつも何か新しいことを考えている

鍵岡 私自身は出版社での編集者を経て、セゾン美術館の学芸員として入ったのですが、堤さんと話す機会が増えたのは、小池さん、一柳さんにもかかわっていただいたモスクワでの「日本のデザイン」展のときで、入社してすぐにその担当責任者になりました。考えてみるとあれは一私企業が、旧ソビエト連邦の、あの官僚的な文化省と、五カ年計画を立てて文化交流をやるうというのですから、もう発想そのものにびっくりしてしましますが、その最大の成果ともいえる「芸術と革命」展(西武美術館)などは非常に画期的で、もう二度とはできないだろうと思われるものでした。その後、今度は日本から、ソ連に何か持ってきてほしい、そして第二期五カ年計画も作ろうという話になったときに担当

一柳 慧氏 ©鈴木雅哉



になったわけです。小池さんと田中一光さんからは、日本のデザインを「衣」「食」「住」「遊」という切り口でやってはどうかという面白いアイデアをいただきましたね。モスクワの展覧会場は、約1000坪もある大変に広い所でした。この展覧会の副題は「伝統と現代」で、歴史的なものもありますが、軸はむしろ“いまの日本”にあって、BGMは一柳さんに監修していただいた現代日本音楽ばかり流しました。あれは面白かったですね。そのときに、展覧会の挨拶文を書く必要があったので、書いて堤さんに見せたところ、大変認めてくれて一言も直さずロシア語に翻訳するよう指示されました。それ以来、堤さんとはいろいろなことを話せるようになったのです。私が企画をもっていった説明したり、堤さんのほうからも新しい企画があるときに、相談されるようになりました。「こんな建築展を美術館でやれるかね?」といった具合で、何か試されているような感じもしました。でもこちらが話すと、とてもよくわかってくれました。田中一光さんにグラフィックをつくってもらうにも、われわれは中身を理解して説明しなければならぬわけですが、そういうことが展覧会ではとても大切だと堤さんは言っていました。そのうち私が詩を書くことが知れて、以来、“辻井喬さん”との会話のほうが多くなったように思います。私が高知県立美術館に初代の館長として迎えられるときも、当時の高知県知事・橋本大二郎と会い、「自由にやらせてやってください」と言ってくださり、とても助かった。その後も辻井喬としての著作物はいつも送ってくださるので、それに返信したり、1年に一度くらいは会って話をしたりしていましたが、そのたびにいつも現在を見て新しいことを考えていることに驚かされ、こちらのほうが何かコンサバになっていくような感覚にとらわれました。私としては辻井喬という優れた詩人と会っていたという思いが強いですね。

一柳 小池さんがおっしゃるように、堤さんはあらゆるものに、そしてあらゆる人に対して、分け隔てなく接していらっしゃいましたね。いまでいう“上から目線”では全くないところがすばらしかった。いろいろな面で支援していただきましたが、おつきあいは本当に対等でした。そういえば一番印象に残っているのは、たとえばロックフェラー財団や、英国のロイヤル・アカデミー・オブ・アーツなどに一緒させてもらったとき、向こうのお偉方が皆、堤さんに、まるで大統領か首相が来たみたい在最敬礼しているわけです。そんなことされる日本人はなかなかいないんじゃないでしょうか。われわれの音楽活動は必ずしも先方からの招待ではなく、堤さんの方から自主的に海外へ日本の文化を紹介するという形

だったので、その際に経済的な支援をしたということもあったのですが、それにしても驚きましたね。一度あれはご覧になっておくとよかったですよ(笑)

鍵岡 文化や芸術に対する尊敬があるということですね。

一柳 そう。それと、芸術活動と社会や時代との関係は、決してきれいごとだけでは成り立たちませんね。芸術家はいつもパトロンに頼っているだけでは自ずと限界がありますし、甘えも出てきます。われわれのころは、最初は貧しいところから始まっても、ある路線に乗れば、そのうち東京文化会館やサントリーホールのような大きなところでやれるという、ある“道筋”があったのですが、いまはそういうものはほとんどありません。ただ、われわれが若かったころと違うと感じるのは、最近の、とくに30歳前後の人たちは、お金も場所もないにもかかわらず、“大人”を頼らないで自立して立ち上がっている。こういう状況がいまあるのは、堤さんが、スポンサーとしてもパトロンとしても、ひとつのモデルケースを見せてくれたこととつながっていると思いますね。

鍵岡 さきほど小池さんがフラットとおっしゃったのは、とてもよく理解できました。かつては美術でも、「純粹美術」「商業美術」と序列をつける傾向がありましたが、いまや逆転しているような状態で…

小池 そうですね。西武美術館でも、三宅一生さんのデザインの展覧会をしましたね。広告デザインの展覧会も初期にしています。堤さんはそういう点でも新しい価値を創る意志をもっていらっしゃったのだらうと思いますね。それまでの美術館の常識からいえば、美術館でやるようなジャンルでないものを入れるということ、その潔さというか…そういうことを不思議に思わずに自然にやってしまうのです。いまでこそ全ての美術館でそうしたことは普通におこなわれているわけですが、先見の明でしょうね。一緒に働く人たちも、新しい価値づくりを共有できるという喜びがあったからこそ、いろいろな提案もできたのです。堤さんは、根っからの、生まれつきのクリエイターでした。いまはクリエイターという言葉はちょっと使われ過ぎています。真の意味で、クリエイションがなければ生きられない人だった。遅くまで一緒に、新宿2丁目のゲイバーにも行っちゃうんですよ(笑)。そのときもう小説は書いていらしたから、「いつ書くんですか」って聞いたら「出物腫れ物所嫌わず」って(笑)。その言葉は忘れられないですね。そうやって遊んだあとでも、書齋での創作がなければ一日が終わらないという方だった。だから、広告やデザインの小さな仕事に対しても、思いやりがあったのではないかなと思います。



鍵岡正謹氏 ©鈴木雅康

鍵岡 自分も詩を書く立場からいうと、辻井喬は“根っからの詩人”ですね。最初叙情的な詩を書いていましたが、堤さんはそれをどんどん変えていきました。変化するというのを全然懼れない。よく「変革」という言葉を使っていましたが、「変革」とはこういうことをいうのかと思うくらい恐ろしいジャンプをするんですよ、詩においても。あらゆる現実をしっかりと真正面から見て、なおかつ非常に誠実にひとつひとつ取り組んでいく態度が、そのまま詩にあらわれる。だから、変わっていくのは当然のことなのです。詩人にとって詩法を変えるというのは大変なことで、ふつうは一度つかんだら一生離さない。なのに、それをあえて変えていくという凄さは、あらゆる芸術も、あるいは企業活動も、現実をしっかりと見ていけば変革はできるのだといわんばかりでした。当時は前衛—いまはこういう言い方も気恥ずかしいような時代ですが—をとりあげていくということはリスクで難しいことだったですね。それをあえてやってしまうという精神はどういうものだったのでしょうか。それは終生変わらなかつたような気がします。

一柳 鈴木大拙の言葉に「絶対に一点に留まるな」というのがあります。留まったら終わりだと。私の師匠であったジョン・ケージが鈴木大拙の弟子だったので、私は孫弟子なのです(笑)。私が直接お目にかかったのは一度だけですが、ケージが最初に日本に来た時、鎌倉の東慶寺にお連れしました。なにかそれと似ていますね。堤さんのなかの深いところで大拙の言葉が生きていた気がします。

民間財団ならではのユニークさ

鍵岡 お二人はセゾン文化財団の設立当初から評議員をお務めになっていますが、いま振り返ってどのような感想をお持ちになりますか？



小池一子氏 ©鈴木雅蔵

小池 セゾン文化財団が支援対象をパフォーミングアートに絞っていったというのは、日本の文化のなかでは非常に画期的な方向でしたね。そしてプログラム・オフィサーがいて、実際にこのグラントで何ができるかを考えていく。これは日本の文化史に残るくらい見事な仕事だったと思います。演劇やダンスの領域で、若い人たちに目指してもらえらる財団になりました。この財団からの長期にわたる助成を受けて伸びた人たちの仕事を、私たちはいま享受しています。セゾン文化財団のプログラムがなかったらどうなっていたかと思うくらいですね。他の財団の仕事をしていても、この財団がいかに特化したものであるかを感じます。それはトップの強い意志と、それを着地させるスタッフの働きによってできたのでしょね。

一柳 評議員会などの在り方にしても、セゾン文化財団はずいぶん他と違いますよね。民間財団で行政とは違うということもあるのでしょうか、それだけの問題じゃないと思います。私もいくつかの財団にかかわっていますが、あんな評議員会はないですよ。堤さんはいろんな方の話を本当に謙虚に聴き、それを自分でよく考え自分なりの発言をしながら、ほかの人につなげていく。出席された方は、みんな名指しされて、なんか言わなくちゃいけない(笑)。あれはわれわれにとっても、他のいろいろな分野の方のやり方や意見を聴いて参考にもなったし、刺激にもなったのですが、それを堤さんが仕切りながらうまくまとめていった。だから話が活性化するんですね。

小池 私も他の財団に関係しているので、それはよくわかります。セゾン文化財団の評議員は、学識経験者、役職などということだけではなく、価値を創造しているかが問われているような気がしましたね。

鍵岡 西武百貨店の文化事業部にいたとき、同じ部屋には音楽や演劇の学芸担当の方がいました。そのように

多ジャンルであったことは、いまにして思えば大変役に立ったのですが、この財団も最初は支援対象を特定分野に限っていなかったんでしょう？

— 堤さんは、当初は演劇を中心におくけれど、将来的には他の領域も支援対象に加えていく考えでした。実際最初のころ、美術分野に少し助成していたこともあります。残念ながら、経済環境の悪化や低金利によって、領域の拡大は実現しませんでした。

鍵岡 セゾン文化財団は、パフォーミングアートの分野で新しい才能を支援しているわけですが、いまの国内外の状況をご覧になってどうお感じになりますか？

一柳 弦楽器の世界では、世界から一番参加者の多いコンクールが大阪にあるのですよ。3年ごとに5月に行われていますが。

鍵岡 それは、レベルが高いから？

一柳 そうではなくて、賞金が一番高いからです(笑)。実は神奈川芸術文化財団で、「ユリシーズ」という若い弦楽四重奏団を6月にアメリカから呼んでいるのですが、驚いたことに彼らもそのコンクールを受けたのです。結果は2位でしたが、世界から強豪が集まるわけですから落ちるかもしれないわけですよ。6月に招聘が決まっているにもかかわらず、5月にコンクールを受けにくる、そういうファイトがあるのですね、彼らには。日本人はどうもこういうファイトが枯渇してしまっている気がして残念です。80年代くらいまでは、われわれにもあったと思うのですけどね…でもそれはともかく、こうした世界から目指されるようなものをぜひ考えてほしいですね。

鍵岡 日本の芸術家はいまパイタリティを欠いているのでしょうか？

一柳 中国や韓国にも押されていますよね。

鍵岡 原因はどこにあるのでしょうか。

一柳 中国などは、なにかをやるときの金額が違います。私は卓球をやりますが、これはスポーツでも同じで、20代も中ごろになると食べられなくなる。これが中国や韓国だともっとお金が出ますからプロとして食べられる。

小池 実はいまテルモ生命科学芸術財団で芸術支援のお手伝いをしています。この財団ではセゾン文化財団のプログラムも参考にしながら、“アーティストに寄り添う支援”というのはどういうものかを研究して、作品を“創る”ところに助成するプログラムを開始したのですが、応募してくる若い人たちの企画の水準はとても高いですよ。ただ、今年が2年目ですが、今回はベテランの応募が増えて競争率も高くなった。これもこれからの日本の問題ですね。アート・マーケットでもそうで

すが、青田買いというか、若い人にはいくらでもチャンスがあるし、投資する人もいる。でもその後プロとして作品制作で生活していけるかという、何の支援もない。世代で区切ってしまうのではなく、本当に価値ある仕事に対する支援ができていくといいと思います。

「30年」を機に初心に立ち返る

鍵岡 堤さんが亡くなられて3年半たち、この財団もその精神を継承していくことが大きな課題です。堤さんを知る人も少なくなっていく。何か新しいことも考えていかなければならない。

一柳 情報時代になってものの捉え方が10年、20年前とはずいぶん変わってきました。いまはすべてがデジタルに還元されていますね。新聞なら開くと色々な見出しがあります。そうするとあっちにもこっちにも目が行き、一つの“空間”として全体をとらえることができます。ですが、デジタルの世界だと、すべてが“時間”であって、いつも一点だけ追い求めてしまいます。そうした閉鎖的な感覚からは抜け出さないといけないですね。

小池 日本は海外への留学生が減るなど“内向き”になっているという話を聞きますが、芸術支援の財団は海外とのネットワークを積極的につくっていくべきです。セゾン文化財団は日本の誇る財団なので、ぜひその辺も期待したいですね。それと、海外にはいろいろなグラントがあるんですよ。たとえば、ポロック・クラスナー財団の話だったと思いますが、ニューヨークのアーティスト・スタジオがビルの火災の余波で水浸しになったときに、緊急申請をして即刻改修支援金を出してくれたという話を聞きました。芸術支援の仕事は現場がわかっていて、何がいつ必要かを理解していることが大事です。

一柳 私としては演劇・舞踊に、ぜひ音楽も加えていただきたいですね(笑)

小池 そしてもちろん、創立者の理念は大事に継承して行ってほしいですね。ロックフェラー財団などにしても、時代は変わってもミッションは変わらないでしょう。堤さんのミッションを常に点検していただきたいと思います。

一柳 何でもそうですが、30年くらいたつと元に戻ってくるということがあります。ファッションもそうですよね。セゾン文化財団も、初心に一度戻る時期になってきていると思います。ぜひ初心を忘れずに活動を続けてください。

- ※1 西武美術館において1975年から86年まで14回開催された。
- ※2 1979年から91年まで西武百貨店池袋店8階にあったオルタナティブ・スペース。音楽、舞踊、映像、演劇から落語まで、先鋭的で幅広いプログラムが日替わりでかけられた。
- ※3 武満徹企画・構成による現代音楽のコンサート。1973年に西武劇場で開始。87年より銀座セゾン劇場に会場を移し、1991年まで続いた。毎年5日間にわたり、国内外の最先端の音楽が約30曲演奏された。



一柳 慧氏と談笑する堤 清二氏(左)

(2007年12月、東京・ホテル西洋銀座で開催された
当財団の創立20周年パーティーにて)

(2017年5月31日 東京・如水会館)

- 佐東範一 (NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク〔JCDN〕代表、三陸国際芸術祭プロデューサー)
- 平田オリザ (劇作家・演出家・青年団主宰、こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督)
- 米屋尚子 (公益社団法人日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕実演芸術振興部部长)



©鈴木雅哉

セゾン文化財団との出会い

米屋 私が仕事で演劇にかかわるようになったのは、86年1月からでした。87年3月にピーター・ブルックの『カルメンの悲劇』のこけら落とし公演で銀座セゾン劇場が開場し、88年5月の『マハーバーラタ』で主催者のひとつであったセゾン文化財団の存在を知りました。

当時私は、演劇雑誌「新劇」の編集部でアルバイトを始め、その後フリージャーナリストとして演劇の支え方を取材していました。その中で、現在の職場である日本芸能実演家団体協議会(芸団協)を知りました。その頃、電通総研やコンテンポラリー・アート・ネットワーク(CAN)など色々なところがアーツマネジメントのセミナーや勉強会を実施していました。そこでは、電通総研にいらした伊藤裕夫さんや芸団協の大和滋さん、そしてセゾン文化財団の片山正夫さんによくお目にかかりました。その内に、89年から90年にかけて連続的に友人と二人でセミナーを実施することになり、最後の回で実施したシンポジウム「芸術のサバイバル」では、演出家の佐藤信さんや慶應義塾大学の美山良夫先生をお呼びした記憶があります。そういう中で、関係者の間で芸術サポートの在り方に関する共通認識が育っていったと思います。そこにセゾン文化財団の支援の意味があったということと、資金のみでなくあちらこちらにセゾン文化財団の職員の方が参加していたことも、とても大きかったと思います。

その後、自費で英国留学したのですが、留学を延長するのに際して資金が必要になったときに、セゾン文化財団に調査研究支援のプログラム枠の中で留学を支援するという柔軟な対応をしてもらい、不安なく二年目の勉強をすることができました。ちょうどそのとき、セゾン文化財団でもコロンビア大学の留学プログラムを立ち上げる準備をなさっていました。私がロンドンに

いるときに、現在東京芸術劇場副館長の高萩宏さんが留学することになっていました。

平田 たまたま昨夜、大学の授業ための資料づくりで91年発行の「別冊太陽 特集現代演劇—60's~90's」で、米屋さんの「現代演劇の新しい動き」という原稿を読みました。最後に「劇団制はこれからちょっと厳しくなる」というような事が書いてありました。そこには、燐光群、キャラメルボックス、善人会議までが掲載されていて青年団はまだ紹介されていません。私は、89年に『ソウル市民』を書きましたが、当時はネットもない時代なので全く無名の存在でした。93年くらいから若い批評家や太田省吾さんが推して下さるようになり、実感としては急速に有名になって、95年にセゾン文化財団から助成をいただき、96年には文化庁の芸術創造特別支援事業が始まります。そのときは、「こんなことになるとは思っていなかった。どうしよう」という感じでした。セゾン文化財団からの助成金と国からの大きな助成金が重なったのです。その後、2000年からは大学の教員にもなりました。

90年代前半、私たち演劇人にとっての最大の課題は、第二国立劇場(新国立劇場)問題でした。このとき、行政の態度もひどかったけれども、演劇人の対応に若手が失望して、坂手洋二さんたちと勉強会をし、そうする中で日本劇作家協会も立ち上がりました。演劇界の中でも「アーツマネジメント」という言葉がいよいよ一般的な語彙として広まっていきました。そこに、平田オリザというやたら理屈を言う変な奴がいるという話と相まって、自分の作品が評判になってきたのもその頃です。それが93年から95年くらいですね。

当時のセゾン文化財団の助成金の金額は大きく、年間1千万円程度をいただいていたと思います。私たちは、助

成金を貰うことに対してもある程度、理論付けができていたので、3年間助成金を継続していただくことに対して、社会実験的な要素が必要だろうと考えました。それで、当時は演劇ではまだ珍しかったアーティスト・イン・レジデンスを実施しました。沖縄県と那国での合宿、青森県弘前市の弘前劇場と組んでの合同公演、そして助成の最終年度に『月の岬』という作品をつくりました。それが読売演劇大賞をいただいた。優等生的な助成対象者だったと思います。

それまでは、助成をもらう側もなんでもらうのかよく分からなかったり、どう使っているのか理論付けがなされていない状況でした。アートマネジメントの理論構築が始まった時代に、いまでは当たり前となっている政策提言型の助成金利用を行った最初の劇団だったかと思います。あるいは、セゾン文化財団の助成金を元にして成果を上げ、それを公的な大きな助成金獲得につなげていく、そういうはっきりとしたステップアップを示した最初の例にもなったかと思います。いろいろな幸運が重なって、ロケットの初速がつくような感じで、演劇界の中での劇団の地位も確立でき、大変タイミングよく助成していただいたなという思いがしています。

佐東 昨日、『セゾン文化財団の挑戦—誕生から堤清二の死まで』を最後まで読みました。JCDNの場合は、セゾン文化財団がなかったら生まれていなかっただろうなと、本を拝読して思いました。ほかの助成対象者は、みなさん活動をしていたり、事業の明確な目的があって申請していますが、私の場合はそこが少し異なっていました。舞踏カンパニーの白虎社が活動を終え、その先のことを迷っていた時に、ニューヨークのダンス専門の小劇場「ダンス・シアター・ワークショップ(DTW)」のデヴィット・ホワイト氏に出会い、セゾン文化財団とアジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)の助成を得て一年間留学しました。あの時は、何をやるのかということ、全く見えていない状況でした。たまたま研修をした部署が、DTWがつくった全米のダンスや演劇のネットワーク「ナショナル・パフォーマンス・ネットワーク(NPN)」のセクションでした。留学に引き続き、セゾン文化財団とACCなどが共催で実施した「トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)」という、アメリカ、インドネシア、日本の振付家と制作者が一人ずつ、計6人がそれぞれの場所に旅をしながら交流するというプロジェクトに参加しました。その経験もJCDNの活動の基盤になっています。デヴィッド・ホワイトというアメリカのダンス界のボスに「三人仲間を集めたら物事はできるんだよ、ノリ」と言われたことが、日本でのネットワーク組織を立ち上げるきっかけになりました。アメリカ全土のプロデューサーやディレクターたちと出会った一年間、TAPで舞踊家の山崎広太さんと一緒に旅をした時間、NY滞在とTAPを通して、日本の従来の形とは別の回路でダンスと社会をつなげる方法があることを知

ると共に、とことん体験できたことが大きかったです。その経験がなければ日本で以前と同じ動きになっていたと思います。そして、あの白虎社解散の後、セゾン文化財団がなければ、多分ニューヨークに行っていなかったと思うんです。

帰国して、日本のダンス界はないない尽くしだという話を聞いて、それだったら折角NPNというネットワークの事務局にいたわけだから、日本でダンスのネットワークを立ち上げようと思いました。セゾン文化財団に相談をして、それは創造環境整備に繋がるという話になって三年間助成していただきました。おこがましいですけど、セゾン文化財団と一緒にJCDNを立ち上げたという気持ちが僕の中にあります。一年間で150万円の助成が、その時期本当に大きかった。それで全国のコンテンポラリーダンスの関係者に出会う旅に出られて、準備に三年間をかけ、森下スタジオで日本全国からダンス関係者を一堂に集めたミーティングをさせてもらいました。いまのJCDNはセゾン文化財団なしではあり得なかったものなんです。だからサポートを受けたというよりも、勝手に共同体という意識を持っていきます。まったくのゼロからのスタートでした。

芸術団体を強くする支援とは？

米屋 アメリカではダンスの活性化をフォード財団が仕掛けたと言われてますから、セゾン文化財団の役割もそういうことと近いのかもしれませんが。

私は、ロンドンでの留学が終わってから、一時期、慶應義塾大学がアートセンターを立ち上げるということで、留学での成果を活かして演劇制作者のためのセミナーをやらせていただきました。テストケースということで、色々な方に参加をお願いして、レクチャーをした覚えがあります。非営利といっても、公演をしたけれど儲けなかったの赤字でしたということ、活動して利益がでてでもそれを出資者に分けないのでは意味が違うという話をしました。非営利とはなんだろうということが徐々に理解され始めた頃です。そういう黎明期のころから、セゾン文化財団は、創造環境整備や劇団の運営助成を始め、力を尽くしてこられました。でも、この30年振り返ってみて、残念ながらカンパニーを強くする支援は、結局できていないのではないかという気がします。特に、芸術文化振興基金の仕組みはカンパニーを弱くすると思います。公演事業以外の収入のない団体があれを続けていたら、蝸が自分の足を食うような形になるしかないという支援のスキームなのに、誰もそのことに文句を言わない。文化庁が直接支援する別の枠組みの方では、スキームは変化しているんですけど、担当者は未だに、事業の赤字補填というところから離れていないので、結果的に状況はあまり変わっていないんです。

平田 それは、アーティストの側から言っても基本的な問



米屋尚子氏 ©鈴木雅藏

題です。文化芸術振興基本法成立のときに中核を担った公明党の斉藤鉄夫衆議院議員が、色々なアーティストにヒアリングをしたのだそうです。でも結局、なぜ、基本法を作らなければいけないのかよくわからなかった。科学技術振興基本法はわかる。それはあきらかに、日本の国益に寄与するから。しかし、アートは人間の心の中の問題だし、国が支援することに意味があるのかわからない。ヒアリング先のアーティストはみな「こんな

に貧乏なんだから」としか言わないし、ちょっと理論家風な人でも「欧米はこうです、だから日本は劣っているんです」としか言わない。それで僕の話聞いて初めてちょっと腑に落ちた、法律を作る推進力になったということ、を、いまでもよく、いろいろなところで言ってます。

要するに私たちはアーティストなので、そもそも、国の支援がなくても誰の支援がなくてもやるんですね。アーティストは、ないなりにやるんです。日本がダメなら、他の国に行ってもいい。だけど、もし助成金が出ればもっとやれることがあって、多分そこが社会に還元できる部分になるということなのです。その理屈をまだ日本のアーティストが理解していないということだと思います。

第二国立劇場問題はまさにそうでした。新劇界はとにかく、貧乏だからという理屈しか言わなかった。92年くらいのことです。これには本当に失望した。私は86年に大学を卒業して、家業が小劇場だったという特殊な環境にあり、しかも父が一億円くらいの借金を持っていました。これは返せないわけですよ。一億の借金なんて。内田百閒の大変有名な言葉に、「借金は現実ではなくて、現象である」というのがあります。当時は金利も高く、毎年1000万円くらい返すわけですけど、その内半分くらいは金利です。そんなものは返せないから900万をどこから借りてきて元本の100万円を返せば、それで銀行は何も言わないです。でも、一億円の借金を毎年100万返していたら、これは100年かかる。返していないのも同然なのです。だから、まさに現象なのです。

三年四年すると小口で借りていた借金を、また一本化して、ちょっと金利の安めなものに切り替える。これが中小企業の経営者が普通にやっている「資金繰り」というものです。それを20代の時に徹底的に経験できたことによって僕が一番学んだのは、銀行はお金を持っていない人には貸さないということ。「うちの会社はだいじょうぶですよ」と言っていなければならない。だめでもだいじょうぶなふりをしなくてはだめ。「え、銀行さん、貸したい？ 借りれば、もっと事業を増やして、銀行さんに利子つけて返しますよ」というのが経営なんです。僕はアートも同じだと思っていて、アーティストは表現活動を勝手にやるんですね。だけど、助成金をもらったら、その分は利息として社会に還元しますよというのが大義なんです。そういうことを、当時30歳そこそこの奴が急に言い出したので、僕はすごく生意気に思われた。

いま、四国の大学でも教えていますが、四国の方々のお遍路さんに対する「お接待」というのは、「私の代わりにお参りをして下さいるので、当然、お接待いたします」、ということなのです。ヨーロッパのメセナの基本というのも、あんな変なアーティストたちは社会生活を営めなくて大変だろう、でも、私たちの代わりに人間や世界について考えて、そういうことに悩んで、さらにそれを色や形や音や言葉にしてくれている。だったら、その分は社会全体で補償しよう、という社会的なコンセンサスがある。日本のアーティストは、もっと誇りを持つべきだと思うんですね。そこところは、どうでしょう。米屋さんからみてもどかしいところもあるかもしれないけど。

米屋 アーティストや団体を一方的に支援するということであって、それが社会に還元されるという感覚では受け止められていないんですよ。

平田 大阪大学のアートマネジメントの授業で、素粒子研究が専攻の学生がレポートに「平田先生の話はよくわかったし、アートの大切さもわかった。でも、そんなにムキになってその必要性や社会性を説明する必要はないと思う。私たちの方が社会に役に立たないのにすごく研究費を使っているから。どうみても、平田先生のやっていることの方が社会の役に立つ。もっと堂々と、やってください」と書いてきました。でもやはり、科学研究費は、世界中でシステムが構築されていて、善し悪しは別として、ノーベル賞などもあり、世間的な認知も得ている、ということですよ。

佐東 まさにいまの話ですが、JCDNは銀行の融資を受け始めたのが8年前くらいで、段々、事業規模が大きくなり、おとし辺りからは年間の事業費が一億を越えるようになりました。そうなったときに、本当にお金が回らなくなってきた。それまでは、プロジェクトベースで京

都銀行から上限を決めてそこまではいつでも貸します、ということで借りていたのが、今度はプロジェクトだけではなくて、運営資金まで借りの必要が出てきました。アートNPOの場合、お金の大変さにどこまで堪えられるかというのが、残れるか、つぶれるかの分かれ目になってくると思いました。まあ、なんでもそうでしょうけれど。

JCDNの場合は、京都銀行が「初めてNPOに貸します」と、良心的に貸してくれて、最初から1000万を超える額を借りました。ただ、助成金の後払いでこれくらい入金がありますということで借りることが出来たのですが、保証人はすべて私自身です。いまの日本の助成金の制度だと、普通の中小企業のようにお金を借りることができるかどうか、大きな分かれ目になる。JCDNの「踊りにいくぜ!!」の事業は、始めは文化庁から二分の一助成だったのが、100%委託事業に変わりました。そして100%概算払いになったのでそれで実施出来ているけれども、他の国際交流支援事業などとまだ精算払いです。例えば、JCDNが主催している三陸国際芸術祭の場合は、3000万円を立て替えなければなりません。今の時代に数千万円を立て替えられる人や団体がどこにどれだけいるのだろうかということです。それは、数十万でも数百万でも同じことです。

平田 そのことと団体を育てていないということは繋がっていて、創造普及活動や創造活性化事業の申請をできる助成団体の基準は、年間に数本の作品をつくること、それを助成期間中は続けるとなっています。ところがもう、時代状況が変わってきていて、うちの演出部の連中、多田淳之介とか、柴幸男とかは、アゴラ劇場から始めて、キラリ☆ふじみや三鷹市芸術文化センター、東京芸術劇場に招かれてという風に、一度も劇場費を払わずに、柴くんの場合は岸田戯曲賞まで行くわけです。そんなことは、20年前は想定されていなかった。がんばってタイニイアリス、ザ・スズナリ、紀伊國屋ホールを借りて出世していくという状況だった。いまは公共ホールが整備されてきました。ただ、そうすると、三鷹市芸術文化センターは三鷹市の財団の主催ですから、これは、芸術文化振興基金の申請条件である劇団の「自主事業」のカウントにはならないんです。まさに理想的にも具体的にも団体を育てる助成になっていない、ということです。

佐東 以前は自分でまかなえるくらいの公演の規模だったけど、助成金をもらってアーティストが当座のお金を立て替えて払うなんて無理だし、助成金をもらえるのはうれしいけど、首が回らなくなる苦しさを経験するわけです。JCDNの場合、中間支援団体としての意地と覚悟があるからなんとかやっていくけれど、個人のダンスのアーティストが、一公演を全部手打ちでやろうと

思ってもリスクが多すぎる気がします。助成金が取れたことによって泥沼にはまるケースもある。補助対象経費の二分の一の助成を受けてその時は嬉しいのですが、実際にやっていく中で「もうどうするねん」みたいな話になる場合もあります。

平田 だから「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律(劇場法)」ができて、創造環境がゆっくりとはいえ整備されていくなかで、これが良い過渡期だったらいいのだけど、ある程度の混乱は仕方がないと思うんですね。国家の政策というのは常に後追いになりがちです。もし、良い過渡期であるならば、そこのブリッジ役として、セゾン文化財団とかアゴラ劇場みたいな民間が機能していくのだと思うんです。

公共劇場をとりまく課題

佐東 例外はありますが、全体的に言うと公共ホールや地方自治体の文化財団の体力の差がどんどん広がっているという気がします。JCDNを始めたころは、ある財団から毎年500万円位の予算で、ダンスのプログラムを10年ほど作っていました。いまは、それが逆転して、JCDNがお金を集めてきて、その財団に委託するようなことが起きています。多くの地方の文化財団自体が、助成金を受ける体力もなくなっている。思ったより早く、その時期が来ているような感じがします。

米屋 昨年度、芸団協で、公共劇場のスタッフの調査をしました。労働環境についての意識調査を中心に実施したのですが、アンケートから悲鳴が聞こえてくるというのが実感でした。特に技術スタッフの方々は、12時間労働が前提で勤務体制が組まれていることも少なくない。世間は働き方改革とか言っていますので、公共劇場に働き方改革は可能かということで取り組んでみたものの、これは、人件費と事業費の割合を変えない限り無理というのが実感です。その要因は一つではないと思いますが、公共劇場パイオニア世代は、何が何でも演劇、舞台だという24時間戦える人たちでした。それで、無理することを前提に最初の仕組みをつくってしまったのではないかと。ところが、いま就職した若者は、ぜんぜんそうじゃなくて、技術の仕事は募集していたから就職してきているんですよね。仕事観が違う。そのギャップが大きいのです。20代の人からしんどいと言われるケースがいっぱいでできて、これはまずいなと思いました。

そういう中で、劇場のみなさんは工夫されているわけですけど、一方では作品をゼロから作り始めようとするのです。これだけ多様なカンパニーがあってジャンルも様々あるので、できあがっているものをブラッシュアップするための公共劇場があってもいいと思います。うまくタイアップすれば、公共劇場の方もそれほどリスクを負わずに、ブラック労働にならずに済むか

しれないのに、頭角を現したあの劇作家が良いと言うと、その作家の評判になった作品をブラッシュアップするのではなくて、新たに書き下ろしを依頼する繰り返しです。良い作品をより多くの人に見せるのが公共劇場の使命であるはずなのに、新作じゃないと価値がないという「新作神話」のような傾向があると思います。カンパニーや劇場は、作品を多くの人に届ける仕組みとして強くならなければならない、アーティスト個人を強くしようという事ではなくて、そこに支援が必要なのです。

平田 劇場というのはレパートリーがあってこそ劇場です。僕がずっと言ってきたのは、日本の芸術界の場合、経営学で最初に習うフローとストックの概念、つまり、レパートリーというストックの概念がなく、フローしっぱなしです。これを止めてストックにしないと、それはいつまでたっても疲弊します。若い才能もどんどん消費されるだけになってしまいます。ダンスで言えば、ほとんど唯一、新潟市民芸術文化会館(りゅーとぴあ)所属舞踊団のNoismがどうにかレパートリーを作ろうということをやっていますね。

労働環境の問題は、公共ホールだから、働く人をきちんと守らないとまずいよという雰囲気さえできれば変わる可能性はあると思います。実際、大学にはたくさんの方が雇用されているわけですし。大学もブラック企業化してはいますが、それでも、劇場ほどには劣悪ではない。去年、仕事をしたハンブルク州立歌劇場は700人くらい雇用しています。ミュンヘンは多分1000人くらい雇用しているはず。地方には、雇用の場が必要なわけです。一人当たりに出す賃金は、職員が若いからそれほど高額でもなく、きちんとそれを雇用の場として位置づければ、そんなに難しいことではないと思う。演劇界の側にも、いままでは、技術スタッフには徒弟制度みたいな雰囲気があって、その絡みの方が実は大きな問題だったりするんですよね。

舞台芸術の拡がり

佐東 地域ごとのアーツカウンシルが誕生するなど、30年の間に舞台芸術を取り巻く環境はかなり変わったと思います。同時に、演劇やダンスが、舞台芸術という枠の中だけに収まらなくなってきたということを感じます。自分のやっていることを例にとれば、コンテンポラリーダンスを軸に舞台芸術というものをいかに極めていくかということをやっとやってきましたけれども、いまは、郷土芸能や、関連してまちづくりにも活動が広がって来ています。ダンスのアーティストも10年前までだったら、ダンスだけで食べていくななんて想像もできなかった。けれどもいまはもう、舞台だけではなくて、ワークショップとか色々な活動で、スケジュールが入りきらないアーティストが出てきました。日本中からリクエストをもらっていて受けきれなくなったりしている。周囲

に与える影響力は、従来の舞台だけの活動よりも大きくなってきています。

オリザさんとは、豊岡で一緒に仕事をさせていただいていますが、演劇の演出家としてだけの仕事をしているのではないですね。

平田 豊岡では市の参与をしています。今年度から、小中学校39校全校で、演劇教育を実施することになって、小学校6年生と中学1年生は一学期に3時間ずつ演劇の授業を受けます。2020年には、パフォーマンスアーツを中心とした大学を作る目標もあります。

佐東 大学を作ろうなんて話さえなかったところから、城崎国際アートセンターができて、オリザさんが芸術監督になって、そこで市長さんとの話の中で、次どうしようかとなったとき、市の政策としてそれらを行うことになった。

平田 そうですね。地方創生がひとつの大きな理由で、人口減少対策でUターン、Iターン者を呼び込むためには、広い意味での文化政策と教育政策がきちんとしていないと、若い女性が戻ってきてくれないということが分かってきた。特に意識の高いお母さんたちは、子どもが文化に触れられるような環境のある町にしか戻ってこないことが、結構はっきりしてきました。そこに気づいた自治体は、もう舵を切って、広い意味での文化政策をやっています。それは、食文化やスポーツも併せてですけどね。

佐東 いつの間にか舞台芸術が舞台というところからはみ出してきていて、だけど、もしかしたら、そちらの方が日本の中では本来の役割なのかもしれないと感じます。欧米から見ると日本は大分遅れているというけれども、スタートが違うのです。戦後30年くらい国を立て直していたわけですから、欧米と日本のやり方は違うような気がします。だから、そういう意味では、90年代以降の30年は、ある種の幼年期というか、ここから何かが始まっていくはじまりのような気がすごしましたね。演劇とかダンスにしても社会に出て行く拡がりみたいなものはかなりあります。

米屋 そうしたときに、社会とアートと繋ぐ結節点になるようなところが、あまり世間からは見えていないというのはありますよね。

セゾン文化財団ですら、パフォーマンスアーツ界から言えば、セゾン文化財団あればこそという思うのですが、じゃあそれが普通の人にとってどういう財団なのと言ったときに、堤清二さんが芸術関係をやっている財団という以上のことは、どこまで理解してもらっているのでしょうか。その訴求力は、まだまだだだと思います。演劇、ダンスと言ったとき、趣味の問題でしょうと

言われてしまう、舞台芸術の社会での位置づけ、その弱さはまだ克服されていないという気がします。

私が不勉強なのかもしれませんが、毎年アニュアルレポートを送っていただいて、こういう人がフェローになったんだなああと見るんですけど、生の舞台を拝見したことがある人の割合はそんなに高くありません。主催公演が頻繁にないとか、公演期間が短いので、よほど意識していないと全部見るということはまず不可能になってきている。それは、セゾン文化財団の方針としてはぜんぜんぶれていないのだと思いますが、世の中全体が商業化の傾向が強まって、エンタテインメントの種類が広がっている中で、相対的に位置づけみたいなものが埋没してきているのではないかということに、すごく危機を感じています。それは演劇一般をみても、商業化して派手な演出をやっているところとそうじゃないところの差が、どんどん開いているように思うんです。いま、佐東さんがおっしゃったことであるとか、どの辺を照準にしてサポートしていくのかということとか、岐路にたたさされているのかなと思います。

佐東 もうひとつ岐路にあると思うことがあります。東北の震災の後に芸術祭を立ち上げて郷土芸能の人たちと仕事をしています。震災がなかったら、郷土芸能の人たちと出会うことはなかったと思うんですけど、非常に面白いんです。実は、初めて舞踏に出会った時と同じようなカルチャーショックを受けています。こんなに熱い人たちの団体が、東北に2000団体以上各地区にあって、その人たちは脈々と子供のときから踊り、唄、太鼓、音楽の腕を鍛えているわけです。それは、自分たちの地域を守ること、神様に奉納すること、鎮魂することであると、目的がはっきりしているんです。でも、若い人たちは格好いいと思ってずっと憧れていた。自分はこれがないと生きていけないというくらい熱心な若者がいっぱいいます。戦争で一時途絶えたものを、いまの70代の人が20代のときに、青年団で復活させて、それから40年、50年やっているというのが、伝統芸能として生きています。芸能が地域を繋ぐひとつの装置のように見えてきました。それを脈々と繋げて行くということを考え、コンテンポラリーダンスの人たちがその芸能を習いに行く「習いに行くぜ!東北へ!!」というプロジェクトを始めました。そうしたら、「もし自分が20代のときに芸能に出会っていたら、わざわざ外国にダンスを学びに行く必要はなかった」と言うくらいすごく衝撃を受けた人や移住する人も出てきました。イギリスのコンテンポラリーダンスの人も、鹿踊りという芸能を学んでいて何十年もそこに住んでいましたという顔で踊っています。海外と交流することよりも、日本の地域や芸能と交流する方に次の時代を感じます。芸能をやっている人のエネルギーがすごいのです。

堤清二さんの「日本の中で伝統と現代が分かれてしまったのが創造力をなくしているのではないか」という

文章を読んだときに、それをすごく感じました。ヨーロッパやアメリカから影響を受けたダンスというのは、個人というものを尊重してダンスをたちあげようとしていて、何かしようとしたときにそこに根っこがないと思いました。インドネシアの人は伝統のうえに現代が繋がっているから根っ

こがあります。日本の場合は、なんかちょっと弱いなあという感じがするのは、伝統と現代が繋がっていないから。日本で生まれたコンテンポラリーダンスなのに、そのアイデンティティがないように見えるのです。舞踏があったから日本のコンテンポラリーダンスはその影響を強く受けていて、何か特別のこのような言われ方をするけれども、伝統と現代が繋がっていないという点で、欧米の方がよくて日本の文化はちょっとね、と思われている。こんなすごいエネルギーの人たちが、同じ国の中にいて、ずっと踊りをおどって、もっと良い踊り、もっと良い音楽を、もっと良い芸能になるといって、切磋琢磨している。芸能の人たちと仕事をしていて、日本はすごい文化大国なのかと思えてきました。

コンテンポラリーダンスの人たちが、伝統芸能に違和感を持つかなと思ったのですが、全然そうではありませんでした。昨年、ダンサー／振付家のしげやんこと北村成美さんなど何組かが来て、コンテンポラリーと郷土芸能と一緒に上演しました。梯子虎舞という傾斜で立てた梯子の上で踊る芸能があって、普通はご神体に触れることはできないのですが、虎舞の人が「ねえちゃん、あがりや」って言って、しげやんを梯子に誘ってくれたんですよ。あ、心意気は一緒なんや、って思いました。だから、その出会いは、伝統とか地域とか言っているけど、マインドは一緒だという部分が次の大きな始まりのきっかけになるような気がしました。

米屋 それはそうだと思います。欧米のパフォーミングアーツは支配層の文化です。政治家や教養のある階層とか社会的ポジションの高い人たちがやっているも



平田オリザ氏 ©鈴木穰蔵

のです。文化政策だってパターンリズムが背後にあるみたいな感じです。でも、日本の芸能は庶民が支えてきたということがあって、一部お能や雅楽などは違いますけど、庶民が生活の中で、繰り返しなじみ中で何かを発見して自分のオリジナリティを発見していく、そういうものが日本の芸能なのかなと思います。

現代舞踊のかなり年配の方にお会いした時に、現代舞踊は殆ど武道と一緒だというようなことをおっしゃっていて、生活そのものが舞踊なのです。日頃見ること聞くことそれらは全部舞踊に繋がりますとおっしゃっていて、西洋ルーツの舞踊でも、なんとか「道」みたいな感じなのです。日本の芸に、向かい方としてそういう風にしてしまうところは、すごく普遍的にある。そういう土壌はとても豊かなものとしてあるのではないかな。舞台の上のプロフェッショナルに木戸銭はらって見に行くことだけがパフォーマンスアートではないところで、違うものがもともとあったと思います。

平田 僕はいま、東京芸術大学と大阪大学で公共文化政策を教えています。授業の始めの方で、各国の文化予算を示して、まず、文化予算がどれくらいあると思うかと聞くのですが、もちろん学生は知らない。それで日本でいうとGDP比で韓国やフランスの六分の一、七分の一くらいで、韓国はついにフランスを抜いて世界一になりました。なんでこんなに違うと思いますかと、ディスカッションさせます。自国のマーケットが狭いとか、日本の失敗に学んでクリエイティブ産業を先に育てているとか、いろんな答えがあって、それは全部正しいんですけど、僕の求めている答えは、韓国は、日本に一度国が奪われて植民地にされたことがあるという点です。韓国の大学の映画演劇科の人たちは、伝統の太鼓と踊りも必ず習う。ずっと昔からそうなんです。それは完全に文化を根絶やしにされたので回復しなくてはならなかったからです。日本というのは、言葉と文化を奪われたことのない、大変おめでたい国です。奪われてみないと文化の価値というのはわからない。その地域の人たちには何となく大切なものであっても、自明の

佐東範一氏 ©鈴木椋蔵



ものとしてあるので公的な性格はもたないですよ。だから、世界遺産の文楽の助成金をカットするなんてことを言い出す人間が公的なポジションにつく。そんな政治家、韓国だったら選挙に落ちますよ。日本の文化を海外に発信できるものにするためにははですね、私たちがもうちょっと意識的になったり言語化することがどうしても必要になる。

米屋 お稽古事文化があるから日本はいいんですよ、以前なら議論は終わっていたんですけど、少子高齢化でこれが危くなっている。伝統芸能だけではなくて、ピアノとかヴァイオリンとかも含めて、生徒さんがどんどん減っている。習い事をする余裕がある家庭も減っている。人口だけではなくて、格差社会で減っているのです。世代から世代に受け継がれていく仕組みが弱まっているのではないかと感じます。

平田 岡山県奈義町という人口6000人の町で文化、教育、まちづくりのお手伝いをしています。ここはおとし特殊出生率2.81を記録して、日本で一番になりました。これは断トツで高い率です。隣の津山市で働いている若い夫婦が、子どもが生まれる時、家を建てる時に、みんな雪崩をうって奈義に移住するという事が起きています。住みやすく、教育と文化政策がしっかりしていて、どんどん、若者向け住宅を建てているのです。都会の人間は職場の沿線に住みますけど、向こうは車社会なので、津山を中心に車で30分圏内だったら、どこに住んでも同じです。引越の際は、だいたいお母さんの意見が強いので、子育てと教育政策がちゃんとしているところに住みます。豊岡もそれで人口減少に歯止めをかけようとしている。

その奈義町は、子ども歌舞伎をずっと守っていて、小学校3年生は全員が学校で歌舞伎をやるんです。それから80人の村役場なんですけど、二人の歌舞伎専門官を雇用しています。その二人は、普段は公民館の貸し出し業務などをしているのですが、歌舞伎のシーズンになると歌舞伎に専念してよくて、松竹に研修に行ったりもします。その二人がいるので通年で歌舞伎教室が開かれていて、幼稚園から高校まで無償で歌舞伎が習えるんです。だから奈義町のこどもたちって、普通子どもが車の中でしりとりをするようなときに、歌舞伎の白波五人男のせりふとかをみんなで言う。小学校に義務化したのはまだ十数年前で、今年か来年、その子たちが初めて成人式を迎えるので、そこで演じようということも検討しています。小学3年生でやったことを全員覚えているんですよ。

奈義町は自衛隊があるので財政が豊かです。だから無償でできる。ただ、自衛隊がある市でも、無駄な建物を建てる市もある中で、ソフトに10年くらいお金をかけると、特殊出生率にはっきりとした差ができていて、いま、人口減少が止まりそうな状況です。小さい自

治体の方が変わり易いですね。奈義町も、小学校と中学校一校ずつしかないので、僕がはいて、歌舞伎の伝統があるのでそれを活かしながら普通の現代的な演劇教育もやる。小豆島も中学校一校、小学校三校で去年から演劇を使ったコミュニケーション教育を全校実施しています。小さくて、ある程度、財政が健全な自治体はすぐに実施できます。

セゾン文化財団への期待

佐東 舞台芸術の価値が、自分たちが思っているよりも広がっているのかもしれない。これまでは劇場で上演をするためのアーティストサポートだったけれども、現代演劇、ダンスにしても、もっと他の分野とどう結んでいくかということがあると思います。セゾン文化財団が、いままでやってきたことは各地のーツカウンスルや文化庁にお任せして、転換になるためのもう少し違う役割、次の手をセゾン文化財団はやるべきではないか、と思います。あと、『セゾン文化財団の挑戦』に片山さんが書かれていた、アイデアも人材もないがお金を持っている財団はある。お金だけはあるところと、お金がないが企画は作れる、やる気があるアートNPOやアーティストとマッチングさせる方法論を作っていたら、もう少し日本は繁栄するかなと思います。セゾン文化財団に舞台芸術という枠に収まらないところへのサポートのスタートを切っていただけると、画期的に変わると思います。

米屋 私は、アーツマネジメントを学ぶことをきっかけにセゾン文化財団に出会って、それから現職者研修ということにずっとこだわってきました。まささらに近い人たちに概念を考えてもらうことはもちろん大事なのですが、現状を支えている人たちが、どれだけいまに即した対応をしていけるかと考えると、やはり現職者研修が大事だと思います。はたと気づいてみると、いま、舞台芸術に関わろうとしている人たちは、1990年のメセナ元年を、伝聞でしか知らない人たちなのです。だから、どういう経緯でこうなってきたかということあまり知らされないまま、芸術サポートはあって当然というところから始まっている人たちがかなりの数になってきています。どうやったら助成金を獲れるかというところばかりに関心が行って、いやになってしまったこともありましたが、まだ十分ではない、これをどう変えていこうかなと思っています。ACCでアメリカに行かせていただいたときに、アソシエーション・オブ・パフォーマンス・アーツ・プロフェッショナル(APAP)の会議に何度か出席しました。色々な話をしているときに、Let's make a changeとみんなで言って盛り上がって終わる会議があり、ああ、アメリカ人って前向きだなと思ったことがあります。そのマインドが、日本ではいま弱まっているような気がしていて、それをいつまでも刺激し続けていただくのが、セゾン文化財団であって欲しいなと思

ます。地域版アーツカウンスルを作りましょうという動きが各地に出てきていますが、セゾン文化財団の真似をしてはいけないと思います。地域の状況はそれぞれ異なります。地域の中に民俗芸能があったりとか、平田さんがおっしゃったような、ちょっとした文化政策が地域をすごく豊かにするということが起きているのです。ですので、地域のアートの支え方は、セゾン文化財団とは異なる方向を目指して欲しいと思っています。真似するなよと言っていたらよいと思います。それでまた次に行っていただきたいという気がします。

平田 今日は、あまり触れませんでした。うちの劇団の連中の多くがセゾン文化財団に支援をしていただいています。多分それは企画書を書くのが上手いなどの理由があると思いますが、まずは、内容があるのが前提だから、とよく言っています。それは先ほどの話とも繋がって、いま無隣館という私塾をやっている、今年三期目の募集がありました。俳優部とそれ以外で、制作とドラマターグ、演出などが対象です。ここは渾然一体としていて、劇場で働きたいとか芸術監督になりたいという希望者がいます。そこに演出部だけで90人の受験志願者がきました。90人の志願者の多くが「助成金を獲得方法を知りたい」、「有名になる方法を知りたい」とか志願票に書くけれども、そういう人たちは全員落ちます。そんなものはないでしょう。要するに、アーティストだから、まず、良い作品をつくること、それを一年かけて教えます。良い作品をつくることを前提としながら、100年後くらいに評価されるアートが、アートマネジメントやドラマターグの力で、アーティストの不遇の時代を30年に縮められるかもしれない。あるいは、地球の裏側にもっていったら、それがいま評価されるかもしれない。そういうことをやるのがプロデューサーとかアートマネジメントとか支援団体の仕事だということを一一年かけて理解してもらいます。その根本のところを、日本では誰も教えないし、大学でもアートマネジメントの技術の切り売りしかしない。理念がない。日本は、文化行政はあるけど文化政策はないと言ってきましたが、それは芸術に関する教育の世界でもまったく同じような現象になっています。理念がないと、ここから先には行けないと思っています。

色々なお金の出し方がありますよね。応用科学に出すところがあってもいいのですが、それならば、その成果をすぐに見せて下さいとなる。僕もみなさんと結論は同じで、セゾン文化財団には、応用科学や短期的成果には目をつむって、尖って、先端研究と基礎研究に特化していただきたいと思っています。

(2017年5月23日 当財団応接室)

〈こだわり〉の30年がもたらしたもの —パトロンとしてでもなく、スポンサーとしてでもなく

公益財団法人助成財団センター理事長
山岡義典



1. 背景としての日本の助成財団界の30年

セゾン文化財団は、日本の助成財団界の波瀾の歩みを背景に、30年を生きてきた。まず、右のグラフを見ていただきたい。1970年から2014年までの主だった助成団体の設立年の推移とその累計を示しており※1、この間の日本の助成財団界の歩みを象徴的に表現している。

1986～1990年の5年間は、いわばバブル経済の最盛期だ。好景気が金余りを生み、金余りが地価の高騰をもたらし、金利も6～7%と高い時代であった。設立数は5年間で290を超える。そして高金利の豊かな財産収入で、華やかな活動を開始した。夢多き時代で、助成財団の世界にとっては、春を過ぎて真夏を迎えた時代だ。バブル期は後の日本社会に大きな傷跡を残したが、この間の多彩な助成財団の設立は「良質な遺産」となった。

1991～1995年の5年間は、バブル崩壊直後の時代である。しかし財団設立がすぐに止まったわけではなく、急な下り坂に向かいつつもバブル期の余韻を残しながら260を超える財団が設立された。先の290と合わせて10年で550の「良質な遺産」が積み上げられたことになる。真夏から次第に秋へと向かった時代である。

1996～2000年の5年間は、設立数の減少が続く秋の時代だ。しかも金利の低下によって、それ以前から存在する財団も含めて活動原資は急減し、助成活動は苦しくなる。こうして、短い秋はやがて長い冬へと向かう。

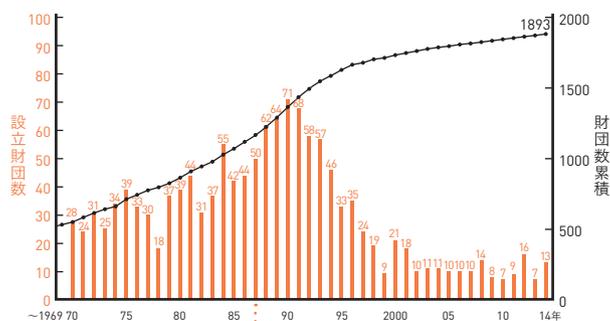
2001～2010年の10年間は、まさにその長い冬の時代だ。それでも志は続き、新しい財団設立も平均年10を維持した。金利の低下は落ち着くところまで落ち着き、自前の助成原資はバブル期の1/3から1/5くらいまで下がる。その減少を何とか出捐者(主に企業)からの寄附に頼りながら、多くの財団はやっとのことで、それまでの助成活動を維持する。新しい夢を追うとか何かに挑戦するなど、出来る余裕もない。次々に発生する新しい社会的課題に対応する助成財団の力は、次第に弱くならざるを得なかった。

そこに2008年12月には、110年続いた主務官庁制による公益法人制度が、新しい公益法人制度に切り替わる。従来の助成財団は、施行5年後の2013年11月末までに新制度へ移行すべく手続き作業に奔走、併せて財団設立のハードルが著しく下がった新制度のもとでの新しい助成財団も誕生する。

2011年からは、本格的な新制度による助成財団の時代が始まる。既存の助成財団の新公益法人への移行は比較的早

く進み、この頃には殆どの財団が公益認定を受けた。また新制度による新しい助成財団の誕生も増えてきた。低金利による財団運営の厳しさは相変わらず続くが、寄付金控除を頼りに、ようやく春の気配が感じられるようになったところだ。

図 日本の助成団体の設立年の推移 出典:脚注参照



1987年 セゾン文化財団設立

2. セゾン文化財団の〈こだわり〉の30年

以上のような四季(セゾン)の激しい変化の波を乗り越えて、セゾン文化財団は30年を〈こだわり〉をもって歩んできた。※2 設立は真夏に向かう1987年7月。堤清二氏の「芸術文化の向上」への熱い思いによるもので、26億7000万円の個人寄附が基本財産になる。

模索と試行の数年を経て財団は思い切った絞り込みを行い、1990年には本格的な「現代演劇(92年度には舞踊も並記)」を対象とした助成活動を始める。この時、寄附による基本財産は100億を超えた。この年は、政府と企業の資金による芸術文化振興基金が設立されたという点で、芸術文化支援の分野で大きな環境変化があった。この助成との棲み分けや差別化、あるいは関係性をどうつくっていくかが真剣に考えられた。セゾングループ自体の文化事業との関係性についても、思い切った整理がなされた。演劇や舞踊にとっての稽古場の重要性を認識し、その建設計画を検討をしたのも、この頃だ。

しかし多くの財団同様、運用収益の減収が進む。稽古場建設のための投資による運用資金の減少も加わり、その収益は1990年度の5億7000万円から下降の一途をたどる。1995年には3億円台、2000年には2億円を割り込む。10年で半分以下になり、当然、助成金額も減少せざるを得ない。このような秋から冬に向かう歴史の中で、恐らく何度かは、資金面から

苦渋の決断を迫られたことであろう。にもかかわらず、助成活動は毎年のように見直しや微修正を加え、内容面での充実化を図っていく。

1994年2月には稽古場としての森下スタジオが竣工、4月1日にオープニング、翌日にはアートマネジメントに関するシンポが開かれ、これには私も聴衆として参加した。スタジオも見学した覚えがある。1996年度には事業の骨格が完成、①現代性をもった作品の創造活動を支援する、②長期的視点に立ち継続的な支援をおこなう、③資金提供のみでない総合的な支援をおこなう、という方針を確立、助成プログラムは「芸術創造」、「創造環境整備」、「国際交流」の3本柱に集約された。国内の公演助成は廃止し、スタジオ使用は各プログラムの中に入れて含めることにした。

2000年度には、芸術家や芸術団体だけでなく、それを支える中間支援組織(NPO)や劇場(小スペース)への助成も試行。また5年にわたりセゾングループ各社からの寄附を受け入れて「セゾンシアタープログラム」による自主事業や共催事業も展開する。2005年度には「サバティカル助成」を開始、2008年度には「芸術創造」を衣替えして助成対象を個人に絞った「セゾン・フェロー」を開始、2009年度には森下スタジオを増築してゲストルームを併設、この活用で2011年度からは「ヴィジティング・フェロー」を開始する。こうして、ほぼ現在に至る助成プログラム体系が完成する。

先にも見たように2008年12月には新公益法人制度が施行され、既存の公益法人はその後5年以内に新しい公益法人か一般法人に移行することになった。セゾン文化財団は早くから新しい公益法人への移行を決め、これまでの「寄附行為」を新制度の「定款」に改める。新しい定款では、その目的について、「助成」を「支援」に変更、「普及」を削除、「国際交流」を「相互理解」にかえた。事業内容については、「寄附行為」にありながら一度も実施されることのない「顕彰事業」を削除した。これまでの活動を通じた<こだわり>を、法的文書にも表現したものだ。こうして2010年3月には内閣府に公益認定を申請し、7月には認定を得て公益財団法人セゾン文化財団として再スタートする。

3. 「助成プログラム」への視点

助成財団の活動は、助成した個々のプロジェクトで語られることが多い。しかし本当は、その個々のプロジェクト群を生み出したシステムにこそ財団にとっての意味や価値がある。そのシステムを「助成プログラム」と呼ぶが、セゾン文化財団は、「新しいプログラムを世に問う」という姿勢でその開発に努めてきた。セゾン文化財団のいのちは、この助成プログラムに宿っている。※3

これらの仕事を担う専門職がプログラム・オフィサー(PO)であるが、セゾン文化財団は設立間もない1991年には2人のPOを置き、やがて4人に増員する。そしてそのPOを指導・統括するプログラム・ディレクター(PD)としての重要な役割は、若き事務局長(2003年から常務理事)の片山正夫氏が担って

きた。日本芸術文化振興会に音楽・舞踊の分野で先行的にPOやPDが配置されたのは2011年度というから、20年は先を行っている。

30年を経て成熟した最新の助成プログラムの姿は、この2016年度のアニュアル・レポート(P50~51)を見ていただくとよく分かる。「現代演劇・舞踊」に的を絞り、若手・中堅を含めた個人の「変化」を重視し、森下スタジオやゲストルームなどの「場」の提供を可能にし、2~3年の「複数年助成」や別のプログラムによる再助成もするなど、独自の特徴をもつ。これらの助成プログラムは、アーティストとの対話によるニーズ(希望)を何よりも重視したものだ。昨年度と比べると、IIパートナーシップ・プログラムの(1)が、長年親しまれてきた「創造環境整備」から「創造環境イノベーション[課題解決支援、スタートアップ支援]」に変身した。それはなぜか。続く頁(P.54)の「本年度の事業について」の中に、片山正夫常務理事がちゃんと解説している。ここでは割愛するが、常に新しいプログラムに挑戦している姿をぜひ読みとっていただきたい。成熟したとはいえ、助成プログラムは生き物である。微妙な表現についても常に変化し、成長する。

なお「本年度の事業について」を最近5年のアニュアル・レポートで読んでみると、社会的な動きの中での助成の考え方や、過去の助成も含めての助成プログラム間の相互作用や相互関連性の効果なども実例を通して語られ、興味深い読み物になっている。

パトロンとしてでもなく、スポンサーとしてでもなく、グラント・メイカー(助成を行う者)としての役割認識が、ここにはある。先に私は、「(バブル期における)多彩な助成財団の設立は「良質な遺産」になった」と述べたが、以上のような助成プログラムの充実によって、セゾン文化財団はそれを代表する卓越した「良質な遺産」となって今日に至っている。

※1 このグラフは『助成団体要覧—民間助成金ガイド—2016』公益財団法人助成財団センター編集・発行、2016.1による。データは2015.1現在の3,588団体を対象とした調査で回答の1893団体(これをここでは「主だった」と表記)の設立年別分析。

※2 この歩みの内容は『セゾン文化財団の挑戦—誕生から堤清二の死まで』片山正夫著・書籍工房早山、2016.2に詳しい。財団設立から第一線で活躍してきた著者が、実体験をもとに事業の成立を詳細に記録したもので、筆者のこの項目の多くは、この著作による。

※3 筆者は最近、助成財団センターのオピニオン誌(JFC views No.88 2017.4)で「助成財団」のいのちは「助成プログラム」に宿るのテーマで執筆したが、まさにセゾン文化財団はその最適の事例といえる。

山岡義典

都市計画の実務についた後、トヨタ財団にてプログラム・オフィサーに。1996年、日本NPOセンター設立、常務理事に。後に代表理事、現在は顧問。2001年、法政大学現代福祉学部教授、退職後は名誉教授。2002年、市民社会創造ファンド設立、運営委員長に就任、現在に至る。2014年、助成財団センター理事長に就任、現在に至る。共編著に『日本の財団』『NPO基礎講座』『NPO実践講座』など。

もしセゾン文化財団がなかったら

プロジェクト・コーディネーター
若林 朋子



©山本尚明

民間の個人助成財団だから成し得たのか？

セゾン文化財団の助成プログラムや評価の取り組みの先駆性、専門性は、芸術・文化関係者の誰もが認めるところである。しかし、「民間の個人財団だからできることで、公的財団や行政にはとても同じことはできない」という声もよく聞く。果たして本当にそうなのだろうか。以下、セゾン文化財団の芸術助成の特徴を概観し、考えてみたい。

対話を核とした助成サイクル

セゾン文化財団の助成の核は、助成対象者(グランティー)との「対話」である。助成プログラムとしては珍しく、申請者との面談を申請書類の提出締切前に行う。書類ではわかりにくい企画の意図を把握し、助成プログラムの目的に沿うか判断するには、直接確認できる面談は確かに有効である。申請者の側に立てば、申請前に直接質問できる機会がありたく、対象外だとわかれば意味のない申請を回避できる。

助成期間中も、折に触れて助成先とやりとりがある。企画本番にはプログラム・オフィサーが足を運び、どのように企画が形になったのかを見届ける。事業終了後には、助成先から提出される自己評価と一緒に確認する対話の機会を持ち、財団側の評価や助言をフィードバックする。根底にあるのは「評価は対話のツールである」という考えだ。

対話は手間がかかるが、ニーズや課題を確実にすくい上げ、助成先の変化や成長を捉えるためには不可欠である。対話によって助成者とグランティー相互の信頼関係が醸成され、性善説に基づく制度運用も可能になる。対話を核に、よき助成サイクルが構築されていることが、セゾン文化財団の特徴の一つである。

プログラム開発

セゾン文化財団の真骨頂は、助成プログラムの独自性である。現代演劇・舞踊界が抱える課題やニーズに寄り添う、痒いところに確実に手が届いた内容である。団体ではなく芸術家の創造活動に対する直接支援。用途を厳密に規定せず、年間活動経費全般が助成対象であること。稽古場不足に一石を投じる稽古専用施設「森下スタジオ」の貸与。短期的成果を求めるプロジェクト型助成ではない、運営助成型の複数年支援スキーム。実績とともにステップ・アップできる2段階助成枠(ジュニア・フェロー:35歳以下、100万円助成×2年⇒シニア・フェロー:45歳以下、250~300万円助成×3年)。現代演劇・

舞踊が抱える問題の解決を促す「創造環境イノベーション」助成。新規事業の立上げを応援する「スタートアップ支援」など。これらは、日本の芸術助成コミュニティが必要性を認識しつつも着手できずにいたことを、逸早く実践に移した助成である。

芸術家や制作者が海外から急な招聘を受けた際、貴重な機会を逃さないよう渡航費を助成する「フライト・grant」や、絶え間なく作品を発表し続けてきた芸術家に休暇・充電の時間を提供する「サバティカル」助成、国際的な活動に備える英語ワークショップ「リアル・アーティスト・カンパセーション・ワークショップ」などは、助成先と密に対話して、切実な課題を把握しているからこそ生まれた助成プログラム、事業といえる。

“もうひとつの支援”としての評価

1995年に評価に取り組み始めたセゾン文化財団は、芸術評価の第一人者として知られている。しかし、特別な定量評価指標を用いたり、セオリー・オブ・チェンジ(社会変革理論)を導入してロジックモデルで厳密に検証したりすることはない。むしろ評価の方法はシンプルで、各助成プログラムの「目的」、あるいはグランティーの「当初目的や目標」に照らして結果はどうだったか、助成によって何が変化したかを把握する。

「プログラム評価」と「grant評価」があり、前者は、助成プログラムそのものの見直しで3~5年に一度行う。個別助成先の成果をまとめて検証し、舞台芸術界の課題やニーズの変化、他団体の助成プログラムとの重複等を確認して、必要に応じてプログラムを修正する。後者は、個々の助成先の評価で、プログラム・オフィサーによるサイト・ビジット、外部評価員による公演レポート、グランティーの成果報告(事業報告書)をもとにした助成終了時の面談、外部のインタビュアーによる訪問調査など、複数の方法を組み合わせる。

注目したいのは、助成事業終了時に提出する「成果報告書」の内容である。グランティーは、①当初目的・目標に照らした事業の成果(効果測定の数値:目標/結果、方法、新聞記事等参考資料)、②成果における不満、障害、③当初は意図していなかった成果、④事業を行う中で学んだこと。どのように今後の事業に生かしたいか、⑤今後1年間の活動目標、具体的活動予定、の5点を記述する。シンプルながら、評価の本質を捉えた問いかけである。とりわけ、「当初は意図していなかった成果」にも価値を置く評価がセゾン文化財団らしい。芸

術活動は、設定したロジックモデルの通りにゴールすることだけが成功ではないので、この評価視点は大変心強い。

すべての助成活動の自己レビュー(①~④)は「事務局コメント」(財団による評価、今後の期待)とともに、財団ウェブサイト上のデータベースで公開されている。活動終了時の当事者の考察が記録に残り、グランティの信用強化につながる財団の評価とともに広く情報公開され、社会(=他者の評価や検証)に接続する機会がつくられる。こうした評価の仕組みは、セゾン文化財団が「評価は、助成先への“もうひとつの支援”」と位置付けているから構築できたのだろう。グランティの定性的な自己評価から大事なポイントを読み解く評価のリテラシーを当事者が有していることも大きい。

「助成」の専門集団であること

セゾン文化財団では、助成の選考にあたって「アドバイザーボード」の助言を受けるものの、採否の決定を完全に委ねてはいない。アドバイザーと財団担当者は対等に意見交換し助成先を検討する。これを可能にするのは、国内外の現代演劇・舞踊事情に通じている財団担当者の専門性である。しかし、同財団の最大の強みは「助成の専門家」であることだ。日本には、個別の芸術ジャンルに詳しい専門家や評論家はたくさんいるが、芸術助成について、セゾン文化財団ほどに理論と実践の両輪で考えてきた助成の専門家はいないだろう。財団は、アート領域では他に先駆けて助成の専門的職能である「プログラム・オフィサー」を導入した。当該芸術領域に精通し、かつ、助成の施策立案からプログラム開発、審査、評価、改善、アフターフォローまで総合的に担える真のプログラム・オフィサーは、日本の芸術助成団体にはほとんどいない。

セゾン文化財団は、不採択にした申請活動にも目配りしている。自らの採否の判断が妥当だったのかを考えるのだという。採択した助成活動すら観ない助成者も多いなか、不採択活動も視界に入れている助成者は稀だろう。判断の目を鍛えるには、採択団体だけを追ってはい不十分という姿勢は、まさに助成の専門家である。こうした積み重ねが、実験的な取り組みや評価が確立していない芸術家にも助成する方針につながっていくのだろう。

当初はセゾン文化財団以外にどこも取り組んでいなかった助成の方法が、何年も経っていつの間にか「取り組むべき助成」となり、公的助成が追随することも散見されるようになってきた。セゾン文化財団は、常に他の先を行き、政策提言的助成を展開する使命を帯びているのかもしれない。

使い方の工夫で何倍もの価値を生んだ助成

セゾン文化財団の片山正夫常務理事に教えていただいた、M.E.ポーターとM.R.クラマーの「助成の価値を高める4つの方法」という考え方がある※1。まずはよい助成先を選ぶ(価値=1)。それが助成や寄付をしようとしている他の人々に「これはよいプロジェクト/団体だ」というシグナルとなり、助成の価値が3~5倍に増す。さらに、助成先の能力の習得につ

ながる助言を行うことで、助成先の活動全体のコストパフォーマンスがあがり、使われる助成金の価値が50~100倍に高まる。結果として、セクター全体の知識や技術水準が向上し、業界全体の助成価値が1000倍になる、というものだ。実際に何倍になるかはさておき、ポーターとクラマーは「助成金は使い次第で何倍にもなる」と説いた。

セゾン文化財団の助成は、この理論を地でやっている。明確なコンセプトと経験知で助成先を選ぶ目利きである(=1倍)。セゾン文化財団が助成しているということが、グランティの信用強化につながっている(=3~5倍)。助成先の全体的な活動基盤の強化を目的に、資金助成に加え、知識や情報、スキル、ネットワーク、出会いの機会も提供。運営助成型プログラムである(=50~100倍)。助成後もグランティが長年活躍。助成のあり方が政策提言として作用し、運営助成やプログラム・オフィサー制度、評価制度が徐々に普及、芸術助成領域全体の知識や技術水準を向上させる牽引力となっている(=1000倍)。

長引く超低金利で助成財団にはつらい時代が続くが、助成金は使い次第で何倍もの価値を持たせることができるのだと、セゾン文化財団の実践が証明している。

助成財団としての誇り

セゾン文化財団の特徴を総合してみると、何か特別の条件を備えていたから成果が生まれたのではなく、地道な挑戦が現在につながったといえる。できない理由を探すのではなく、どうしたらできるのかを考える。どこよりも芸術助成に真剣に向き合ってきた結果である。助成者は、さまざまな制約のなかで助成プログラムを回す。しかし例えば公的助成だから、まったくセゾン文化財団のようにできないというわけでもない。わたしたちは、芸術助成の可能性をセゾン文化財団ほどに深く追求せず、さっと無理だと最初から諦め、挑戦してみてもいいのではないだろうか。

芸術助成に携わる人々がセゾン文化財団の30年から学べるとは山ほどある。何よりも、「助成は、取り組み方によっては世の中を変えることができる大きな可能性を秘めている」という一貫した考え方である。芸術助成をどこよりも考えてきたセゾン文化財団の30年。もし、セゾン文化財団がなかったら、日本の現代演劇・舞踊環境も、人材も、日本の芸術助成も、今ほどには育っていなかっただろう。

※1 「Philanthropy's New Agenda: Creating Value」(M.E.ポーター、M.R.クラマー、1999、Harvard Business Review)

若林朋子

1999年~2013年、(公社)企業メセナ協議会にてプログラム・オフィサーとして企業が行う文化活動の推進と芸術・文化支援の環境整備に従事。現在はフリーランスで、事業コーディネーター、執筆、編集、調査研究、評価、自治体文化政策やNPO運営支援等を行う。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授。



データで見るセゾン文化財団の30年

セゾン文化財団 年表 1987年-2016年

年	1987	1988	1989	1990
セゾン文化財団		方針 基本方針: ①現代性 ②若手世代育成 ③国際性		
		活動・出来事 ●プログラム・オフィサー制を導入		
	堤清二氏の出捐により設立（7月13日文化庁より設立許可）	助成事業 助成事業を本格的に開始（演劇〈美術〉〈特別〉の3部門でスタート）	演劇界の状況調査を開始、以下の重点課題に焦点を絞る	資金提供のみでない複合的な支援体制へ プロフェッショナル教育への支援強化
	自主製作・共催事業 パートナーシップ		コラボレーションの重視	海外招聘公演の主催事業を開始【別表①】
芸術文化支援状況	公演協賛型支援、施設建設型支援への偏り		メセナブーム	
	<ul style="list-style-type: none"> ■銀座セゾン劇場(2000年に「ル テアトル銀座」と改称)開場 ■STスポット横浜開館 ■カザルスホール開館(東京) 	<ul style="list-style-type: none"> ■芸術文化助成財団協議会設立 ■助成財団センター、財団化 ■東京グローブ座開設 ■東京国際演劇祭開催(95年に「東京国際舞台芸術フェスティバル」、2002年に「東京国際芸術祭」に改称) ■文化庁「我が国の文化と文化行政」刊行 	<ul style="list-style-type: none"> ■Bunkamura開設 	<ul style="list-style-type: none"> ■企業メセナ協議会発足 ■芸術文化振興基金設立(文化庁) ■国際舞台芸術交流センター(PARC)設立 ■東京芸術劇場開場 ■水戸芸術館開館 ■経団連1%クラブ設立
社会情勢	<ul style="list-style-type: none"> ●利根川進(マサチューセッツ工科大学教授)、日本人初のノーベル医学生理学賞受賞 ●ブラックマンデー、全世界で株式市場大暴落 ●中曽根首相の指名で竹下内閣成立 	<ul style="list-style-type: none"> ●青函トンネル、瀬戸大橋開通 ●東京ドーム完成 ●ソ連軍、アフガニスタンから撤退開始 ●イラン・イラク戦争停戦 ●米大統領選、ブッシュ(父)副大統領当選 ●リクルート事件表面化 ●バンナム機爆破事件 	<ul style="list-style-type: none"> ●元号、平成へ ●消費税導入 ●宇野内閣を経て海部内閣成立 ●ベルリンの壁崩壊 ●ワールド・ワイド・ウェブ(WWW)開発される 	<ul style="list-style-type: none"> ●バブル経済崩壊が始まる ●イラク軍、クウェートに侵攻 ●日銀が公定歩合を6.00%に引き上げる ●ドイツ再統一

1991	1992	1993	1994
1回限りの助成から中長期的な取り組みへの移行			
<ul style="list-style-type: none"> ●演劇助成を中心とした活動へ ※美術部門を(財)セゾン現代美術館へ移管 	<ul style="list-style-type: none"> ●「現代演劇・舞踊助成」「特別助成」の2部門制へ ※現代舞踊の申請急増を受け、「現代演劇・舞踊助成」プログラムに 	<ul style="list-style-type: none"> ●関西に申請窓口を設置(～1999年) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">東京・江東区に森下スタジオ開館</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 20px;">スタジオ助成プログラム開始</div>
<p>ワークショップに対する助成の増加</p>	<p>「演劇・舞踊助成の評価と課題」調査およびアンケートとインタビューによる活動レビュー実施</p> <p>優れた芸術団体の創造環境の改善と運営基盤の強化が急務と判明</p>	<p>「創造環境整備プログラム」開始</p> <p>コロンビア大学奨学生による留学報告①開催</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">アーツマネジメント留学研修プログラム開始</div>
<p>チャーターの整備の重点化</p>	<p>米・コロンビア大学奨学生派遣制度開始</p> <p>編入</p>	<p>「共同創造活動プログラム」へ</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">演劇制作者研修セミナー開催 慶應義塾大学アートセンターとの共催</div>
	<p>芸術団体への運営助成「年間助成プログラム」を試験的に開始【別表②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●芸術団体の運営を各団体3年間にわたり支援 ●演劇分野では日本で初の試み 		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">森下スタジオ開館記念事業</div> <ul style="list-style-type: none"> ●セミナー「日本型アートマネジメントの展望と21世紀の劇団経営」 ●ワークショップ「演劇体験～演劇を身近に感じるために～」 ●セゾン文化財団ワークショップ KARASとの共同企画
<p>ダムタイプ『pH』特別公演を主催(大阪)</p>	<p>シンポジウム「内なる国際化をめざして」を主催(京都)</p>	<p>シンガポールでの「日本映画鑑賞会」を星日文化協会と共催</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクトイン ダンスI</div> <ul style="list-style-type: none"> ●アジア・カルチュラル・カウンシルとの共催事業 ●日本・米国・インドネシアを結ぶ集中的な個人交流プログラム ●振付家、ダンサー、マネジャー、批評家らが参加 【別表③】
公共ホール建設ラッシュ			
<ul style="list-style-type: none"> ■経団連社会貢献部設置 ■慶應義塾大学、アートマネジメント講座、アートプロデュース講座開講 ■セッションハウス開館(東京) 	<ul style="list-style-type: none"> ■文化庁在外研修制度にアーツマネジメント部門の派遣が加わる ■芸術文化振興基金に対する民間からの寄附が100億円に達する ■文化経済学会発足 ■アジア女性演劇会議が東京と京都で開催 ■愛知県芸術文化センター開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■文化経済学会(日本)初の年次大会を開催 ■第1回「世界劇場会議」、名古屋で開催 ■慶應義塾大学アート・センター設立 	<ul style="list-style-type: none"> ■日本劇作家協会発足 ■関西演劇人会議(のちの「大阪現代舞台芸術協会」の前身)発足 ■(財)地域創造設立(自治省) ■(財)国際文化交流推進協会設立(外務省)
<ul style="list-style-type: none"> ●湾岸戦争勃発 ●南アフリカ、人種差別法全廃 ●宮沢内閣成立 ●ソビエト連邦消滅 	<ul style="list-style-type: none"> ●ボスニア・ヘルツェゴビナ内戦開戦 ●毛利衛、米スペースシャトル計画において初の日本人宇宙飛行士となる ●米大統領選、民主党クリントン候補当選 	<ul style="list-style-type: none"> ●世界貿易センター爆破事件 ●細川連立内閣成立 ●サッカー日本代表、ワールドカップへの出場を逃す(ドーハの悲劇) 	<ul style="list-style-type: none"> ●ルワンダ・ジェノサイド事件 ●羽田内閣成立 ●松本サリン事件 ●村山内閣成立 ●大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 ●「プレイステーション」(ソニー・コンピュータエンタテインメント)発売

年	1995	1996	1997
方針	1回限りの助成から 中長期的な取り組みへの移行		
活動・出来事	●「年間助成プログラム」を中心に 評価活動を開始		●財団設立10周年を迎える
助成事業	場所の提供	助成対象者との 懇親会を定例化	
	情報・ノウハウの提供		
	機会の提供		
	コロンビア大学奨学生による 留学報告②開催	研究助成を開始 政策提言など指定テーマに 沿った調査研究	創造環境整備
		「年間助成プログラム」を拡充 した「芸術創造プログラム」を 開始、団体の運営助成を強化	芸術創造
		●最長6年間の助成を可能に ●事業評価をシステム化	
		「共同創造活動」と「国際交流 公演活動」を「国際交流 プログラム」に統合	国際交流
			●国際交流公演活動 ●国際共同創造活動
自主製作・共催事業 ／ パートナーシップ	シンポジウム 「創造のための場づくりとは」開催 セゾン文化財団ワークショップ KARASとの共同企画	ニュースレターviewpoint創刊 芸術支援政策、舞台芸術教育、アーツ マネジメント、国際的な活動を巡る議 論の場を提供 【別表④】 制作実践セミナー実施(5回) 若手演劇・舞踊制作者を対象に実務 面での共通の問題を議論 【別表⑤】	トライアングル・アーツ・プログラム (TAP)プロジェクトイン ダンスII ●アジア・カルチュラル・カウンシル、 ニューイングランド・ファンデーション・ フォー・ジ・アーツとの共催事業 【別表③】
芸術文化 支援状況	アーティスト・イン・レジデンスがさかに		
	自治体中心にワークショップブーム、自治体による稽古場開設がさかに		
	<ul style="list-style-type: none"> ■第1回芸術見本市開催 ■日本芸能実演家団体協議会(芸団協)「芸術文化情報センター」発足 ■演劇・舞踊・音楽・美術等の創作・練習専用施設「富山市民芸術創造センター」開館 ■名古屋市演劇練習館(アクテノン)開館 ■北九州市立大手町練習場開場 ■アートのスペース「コンカリーニョ」開館(札幌) 	<ul style="list-style-type: none"> ■アーツプラン21開始(文化庁) ■利用者による自主管理方式を採り入れた金沢市民芸術村開設 ■稽古場としても利用が可能なスタジオを有する長岡リリックホール開館 ■日本NPOセンター発足 ■TORII HALL(大阪)内にDANCE BOX実行委員会設立、関西でのコンテンポラリーダンスの拠点として活動を開始 	<ul style="list-style-type: none"> ■静岡県舞台芸術センター開場 ■新国立劇場開場 ■世田谷パブリックシアター開設 ■特定非営利活動促進法(NPO法)案提出 ■「演劇人会議」発足 ■大阪現代舞台芸術協会(通称「DIVE」)設立 ■日本NPOセンター、初の全国フォーラム開催
社会情勢	<ul style="list-style-type: none"> ●WTO(世界貿易機関)発足 ●阪神淡路大震災 ●野茂英雄、ドジャースと契約 ●地下鉄サリン事件 ●日銀、公定歩合を0.5%に引き下げる ●「Windows 95」(マイクロソフト社)発売 	<ul style="list-style-type: none"> ●橋本内閣成立 ●世界初のクローン羊誕生 ●民主党結成 ●米クリントン大統領再選 ●ペルー日本大使館占拠事件 ●DVDプレイヤー製品化 	<ul style="list-style-type: none"> ●香港返還 ●アジア通貨危機 ●地球温暖化防止京都会議にて「京都議定書」議決 ●今村昌平(『うなぎ』)、市川準(『東京夜曲』)、北野武(『HANA-BI』)が相次いで海外の映画祭で受賞

1998	1999	2000
各プログラムの意図・目的を明確化		
国内プログラムと国際交流プログラムを分離		<ul style="list-style-type: none"> ●(株)西武百貨店、(株)西友、(株)クレディセゾン、(株)西洋フードシステムズ、(株)吉野家ディー・アンド・シーより寄附金を受入
国際交流プログラムに「知的交流プログラム」を新設するなど改編する(右記参照)		
Japan Contemporary Dance Network (JCDN)をはじめとする「サービス提供型NPO(サービスオーガナイゼーション)」の起業に対する支援を開始	俳優教育の問題に取り組むプロジェクトへの支援を強化し始める	<p>小スペースによる若手舞踊家の発掘・育成事業への助成を開始</p> <p>●劇団解体社(「芸術創造活動II」助成対象団体)によるオーストラリアの芸術団体との公開ワークショップ、およびワーク・イン・プログレス公演を森下スタジオで開催、同スタジオの利用方法の新機軸を試行</p>
<p>[知的交流プログラム]</p> <ul style="list-style-type: none"> ●知的交流活動 ●翻訳出版(非公募) <p>[芸術交流プログラム]</p> <ul style="list-style-type: none"> ●現代演劇・舞踊助成 ●共同創造・公演活動 ●芸術交流活動(非公募) <p>中国社会科学院・日本市場経済研究センターによる翻訳出版事業に対して継続助成を開始</p>	日本の人文・社会科学分野の文献をドイツ語に翻訳出版する5ヶ年事業をミュンヘンの出版社、ユディツィウム社と開始	<p>日中現代詩交流プログラムへの継続助成開始(03年まで)</p> <p>3年間にわたる継続事業「ペイツ・ダンスフェスティバル(米)舞踊派遣事業」を開始 【別表⑦】</p>
<p>ニュースレターviewpoint、季刊化制作実践セミナー第二期実施(4回) 【別表⑤】</p> <p>5年間にわたって継続的に日本の現代演劇を北米に紹介するニューヨークのジャパン・ソサエティーの主催事業「Japanese Theater NOW」への助成を開始</p>	<p>トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクト イン ダンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ●TAPIとIIの評価作業とTAPIIIIに関する計画立案を実施 【別表③】 	<p>制作実践セミナー法律編、およびマーケティング勉強会を開催</p> <p>若手舞踊家育成プログラム「ネクスト・ネクスト」【別表⑧】をはじめとする共催事業「セゾンシアタープログラム」を開始</p>
既存の劇場、美術館の閉館が相次ぐ一方、新規の文化施設がオープン(廃校などの旧来の施設の再利用による芸術文化拠点開設)		
アート系NPOの誕生		
<ul style="list-style-type: none"> ■特定非営利活動促進法(NPO法)成立、施行 ●非営利セクターが社会の関心を集める ■文化庁「文化振興マスタープラン〜文化立国の実現に向けて」策定 ■秋吉台国際芸術村開村 ■日本アートマネジメント学会発足 ■Japan Contemporary Dance Network (JCDN)設立準備室活動開始 	<ul style="list-style-type: none"> ■「ふらの演劇工房」が国内初のNPO法人として認証 ■日本NPO学会設立 ■日本アートマネジメント学会、初の全国大会開催 ■ART COMPLEX 1928(京都)開館 ■東京国際舞台芸術フェスティバル(現「フェスティバル/トーキョー」)、毎年開催となる ■セゾン美術館閉館、銀座セゾン劇場一時閉館 ■博多座、福岡アジア美術館開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■1993年に小学校の統廃合のため閉校となった明倫小学校(京都)を一部改修した「京都芸術センター」が開館、廃校を転用する芸術文化創造・支援拠点の先駆的な例となる ■練習室とホールを兼ね備えた大阪市立芸術創造館開館 ■第1回越後妻有アートトリエンナーレ開催 ■佐賀町エキジビット・スペース閉館 ■現「フェスティバル/トーキョー」を運営するアートネットワーク・ジャパン、NPO法人として認証される
<ul style="list-style-type: none"> ●改正外為法施行、内外の資本取引自由化により日本版金融ビッグバン開始 ●和歌山毒物カレー事件 ●小淵内閣成立 ●「iMac」発売(アップル社) ●Google社設立 	<ul style="list-style-type: none"> ●日銀、ゼロ金利政策実施 ●NATO軍、コンボ紛争制裁のためユーゴ空爆 ●東海村JCO臨界事故 ●世界貿易機関(WTO)第3回閣僚会議が開催されたシアトルで反グローバリゼーションの大規模なデモが行われる ●2000年を控え、Y2K(コンピューター2000年)問題が話題となる 	<ul style="list-style-type: none"> ●森内閣成立 ●沖縄で第26回サミット開催 ●イチロー、マリナーズと契約 ●高度情報通信ネットワーク社会形成基本法(IT基本法)成立 ●米大統領選で民主党ゴア候補(当時副大統領)敗北、共和党のブッシュ(子)候補当選

年	2001	2002	2003
方針			
活動・出来事	<ul style="list-style-type: none"> ●前ページセゾングループの各企業に加え、(株)セゾン情報システムズより寄附金を受入 	<ul style="list-style-type: none"> ●セゾングループの企業より寄附金を受入 	<ul style="list-style-type: none"> ●(社)企業メセナ協議会よりメセナ大賞2003「舞台芸術牽引賞」を受賞
助成事業	場所の提供		
	情報・ノウハウの提供		
	機会の提供		
	創造環境整備	海外で活躍する日本人ダンサーによる「里帰りダンスワークショップ」を支援	首都圏以外の地域での演劇・舞踊人材育成事業に力を入れ始める
芸術創造	「芸術創造活動II」の休止決定(2001年度の時点で「芸術創造活動I」の助成を受けている団体の申請をもって終了)		
国際交流	「芸術交流プログラム」の編成を下記のとおり改編: 「I:プロジェクト支援」 「II:活動運営支援」(新設)	「活動運営支援」を「継続プロジェクト支援」と改称	「I:プロジェクト支援」での資金助成を廃止、森下スタジオの貸与のみとする
自主製作・共催事業 パートナーシップ	制作実践セミナー法律編を開催【別表⑥】	トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクト イン ダンスIII ●TAP IとIIの評価と今後の活動のプランニングを行う ●ドキュメンテーション(記録)の作業として関係者へのインタビューを映像収録(~2003年度)【別表③】	トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクト イン ダンスIII ●TAPの映像作品完成、ベイツ・ダンス・フェスティバル、森下スタジオにて上映【別表③】
	セゾンシアタープログラムの一環として、シンガポールの劇団シアターワークスによる森下スタジオでのレジデンス事業『Dreamtime in Morishita Studios』などを開催		
芸術文化支援状況	既存の劇場、美術館の閉館が相次ぐ一方、新規の文化施設がオープン		
	<p>アート系NPOの誕生</p> <ul style="list-style-type: none"> ■朝日舞台芸術賞(朝日新聞)創設(~2008年) ■第1回横浜トリエンナーレ2001開催 ■文化芸術振興基本法が公布・施行 ■トヨタ コレオグラフィアワード(トヨタ自動車)創設 ■(財)光文社シエラザード文化財団の稽古場シエラザードスタジオ開館(現、光文社演劇スタジオ) ■トーキョーワンダーサイト開館 ■JCDN、NPO法人として認定される 	<ul style="list-style-type: none"> ■文化庁による「文化芸術創造プラン(新世紀アーツプラン)」開始、芸術団体助成休止 ■稽古場等を併設した「せんだい演劇工房 10-BOX」開館 ■東京グローブ座、一時休館後ジャニーズ事務所に移管 ■カザルスホール休館、日本大学に移管 ■DANCE BOX、NPO法人として認証され、フェスティバルゲート(大阪)内にて劇場Art Theater dBを開場 ■「大阪のど真ん中に小劇場を取り戻す会」設立 ■アサヒビール、「アサヒ・アート・フェスティバル」開始 	<ul style="list-style-type: none"> ■NPO法人認証数が累計で1万件超える ■大阪・OMS(扇町ミュージアムスクエア)閉館 ■ART COMPLEX 1928がエンジェルシステム、ロングラン投資システムを導入 ■日本芸術文化振興基金、国際交流基金が独立行政法人化 ■指定管理者制度導入 ■第1回アートNPOフォーラム開催 ■山口情報芸術センター(YCAM)開館 ■「トヨタ創造空間プロジェクト」本格的に開始
社会情勢	<ul style="list-style-type: none"> ●米ブッシュ政権、京都議定書からの離脱を表明 ●小泉内閣成立 ●ハンセン病補償法成立 ●日本初のBSE(牛海綿状脳症)感染牛発見 ●米同時多発テロ事件(9.11) ●米英軍によるアフガニスタンへの攻撃開始 ●アップル社、初代iPod発売 ●参議院本会議にてテロ関連三法案可決成立 	<ul style="list-style-type: none"> ●欧州連合の単一通貨「ユーロ」の紙幣・硬貨導入 ●ブッシュ米大統領、一般教書演説でイラン、イラク、北朝鮮を「悪の枢軸」として批判 ●東ティモール民主共和国成立 ●サッカーワールドカップ、日韓共同開催 ●住民基本台帳ネットワーク開始 ●小泉首相、訪朝 ●モスクワ劇場占拠事件 	<ul style="list-style-type: none"> ●イラク戦争開戦 ●宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』、米アカデミー賞長編アニメ賞を受賞 ●感染症SARSが世界的に流行 ●六本木ヒルズオープン ●有事関連三法成立 ●自由党が民主党に合流 ●米軍、イラクのフセイン元大統領を拘束

2004	2005	2006
<ul style="list-style-type: none"> ●森下スタジオ開館10周年を迎えリニューアル工事を実施 ●「フランス・ダンス・03」より寄附金を受入、これを基金として「日仏舞踊交流プログラム」を新設決定 	<ul style="list-style-type: none"> ●(株)クレディセゾンから寄附金を受入 ●共催事業『Mobile-アジアの移住労働者』に対して(財)東京都歴史文化財団と(財)アサヒビール芸術文化財団より助成を受ける 	<ul style="list-style-type: none"> ●(株)クレディセゾンから寄附金を受入 ●共催事業『Mobile-アジアの移住労働者』(2年目)に対して(財)アサヒビール芸術文化財団より助成を受ける
<p>2005年度の現代演劇・舞踊助成の審査にあたりアドバイザー・ミーティング(審査会)を開催(05年2月)、審査メンバーを「2005年度事業報告書」にて公表(以後同様)</p>		
<p>1998年度より国際交流助成・知的交流活動プログラムにあった個人研修助成を「個人研修」として独立させて創造環境整備プログラムに編入</p>	<p>異文化体験を目的とする「個人研修」の名称を「サバティカル(休暇・充電)」に変更</p>	<p>地域における演劇振興活動などを重点的に支援</p>
<p>「若手奨励助成」(非公募)を新設</p>		
<p>ミュンヘンのユディツィウム社による日本の現代社会に関する文献をドイツ語に翻訳出版する事業の第2期を開始</p>	<p>「日仏舞踊交流プログラム」を新設</p>	<p>日本の現代戯曲の海外での上演を実現するための3年間プロジェクトを米非営利団体アーツ・ミッドウェストとの共催事業「日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト」(提携:米プレイライツ・センター/協力:アートネットワーク・ジャパン、ガスリー・シアター)として開始【別表⑨】</p>
<p>(廃校などの旧来の施設の再利用による芸術文化拠点開設)</p>		
<p>アート系NPOによる活動の本格化</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ■国立劇場おきなわ開場 ■横浜の歴史的建造物を活用するBankART 1929開始 ■東京・豊島区の旧中学校を稽古場として(のちに同体育館を劇場として)再生する「にしすがも創造舎」がスタート ■金沢21世紀美術館開館 ■大阪の旧小学校を再生する「精華小劇場」が開館 ■自治体初のダンスカンパニーNoism04活動開始 ■芸術家への無利息つなぎ融資制度を京都市が創設 ■アートマネジメント総合サイト「ネットTAM」開設 	<ul style="list-style-type: none"> ■政府税調「新たな非営利法人に関する課税及び寄附金税制についての基本的考え方」を発表 ■民主党が「公益法人制度改革案」を発表、その後各党によるマニフェストが出揃う ■NPO法人認証数が累計で2万件を超える ■東京・新宿区の旧淀橋第三小学校を芸能関連団体の事務所、稽古用施設等として再生する「芸能花伝舎」開館 ■新国立劇場演劇研究所開所 ■吉祥寺シアター(東京)開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■公益法人制度改革関連法案が成立 ■横浜市との協働のもと、NPO法人アートプラットフォームが管理・運営を行なう公設民営の文化施設「急な坂スタジオ」(横浜)開館
<ul style="list-style-type: none"> ●国内で鳥インフルエンザ発生 ●自衛隊イラク派遣 ●新潟県中越地震 ●米ブッシュ大統領(子)再選 ●インドネシア・スマトラ島沖地震・津波 ●韓流ブーム ●「オレオレ詐欺」多発 	<ul style="list-style-type: none"> ●YouTube社設立 ●日本国際博覧会(愛知万博)開催 ●個人情報法施行 ●JR宝塚線(福知山線)脱線事故 ●ロンドン同時爆破テロ ●ハリケーン「カトリーナ」「リタ」「ウィルマ」(米) ●郵政民営化関連法案成立 ●失業・人種差別問題を発端としフランスで暴動発生 	<ul style="list-style-type: none"> ●ジャワ島中部および南西部地震 ●冥王星、惑星から準惑星に分類 ●安倍内閣成立 ●米中間選挙で民主党が上下両院で多数党に

年	2007	2008	
方針		芸術家への直接支援	
活動・出来事	<ul style="list-style-type: none"> ●(株)クレディセゾンより寄附金を受入 ●「アジア芸術交流・舞踊家派遣事業」に対して(財)アサヒビール芸術文化財団より助成を受ける 	<ul style="list-style-type: none"> ●(株)クレディセゾンより寄附金を受入 ●コロンビア大学「ドナルド・キーン日本文化振興賞」を受賞 ●助成事業について、「国内助成(創造環境整備及び芸術創造活動)」、「国際交流プログラム」の2部門を改め、「芸術家への直接支援」、「パートナーシップ・プログラム」の2部門とする 	
助成事業	場所の提供		
	情報・ノウハウの提供		
	機会の提供		
	創造環境整備		アーティスト・イニシアティブの事業が顕在化する
	芸術創造	<p>チェルフィッチュ『三月の5日間』をクンステン・フェスティバル・デザールで発表。公演後、海外のフェスティバルや劇場から約50件のオファーを受ける。※「芸術創造活動I」支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●芸術団体を対象としていた「芸術創造活動I・II」を改変し、芸術家個人を支援する「セゾン・フェロー」を新設【別表⑩】 ●「若手奨励助成」を休止
国際交流	<ul style="list-style-type: none"> ●「芸術交流活動II:継続プロジェクト支援」で、EU・ジャパンフェスト日本委員会と共同で支援を開始(～2010年) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「知的交流活動」を休止 	
自主製作・共催事業	<ul style="list-style-type: none"> ●「第3回アジアダンス会議」から派生したダンス・フェスティバル「Live Arts Bangkok」を派遣先とする「アジア芸術交流・舞踊家派遣事業」を実施 ●日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクトの実施【別表⑨】 	<ul style="list-style-type: none"> ●クンステン・フェスティバル・デザールで日本の現代演劇・舞踊を紹介する4ヶ年の継続助成を開始【別表⑪】 ●パイロット事業として、英語セミナー「リアル・アーティストカンパセーションズ・ワークショップ」を開始 	
芸術支援状況の特徴	国際的な舞台芸術関係者ネットワーク、IETMのアジア・サテライト・ミーティングを機に、海外の舞台芸術の		
芸術文化支援状況	<ul style="list-style-type: none"> ■ル テアトル銀座、(株)パルコに運営移管。「ル テアトル銀座 by PARCO」に改称 ■「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第2次基本方針)閣議決定 ■東京都、東京芸術文化評議会設置 ■日本文化政策学会設立 ■国際児童青少年演劇フェスティバル大阪、スタート ■あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)開場 ■川崎市アートセンター・アルテリオ小劇場、開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■(社会情勢)「地方税法等の一部を改正する法律」公布、「ふるさと納税」制度スタート ■新公益法人制度施行 ■急な坂スタジオ、「坂あがりスカラシップ」開始 	
社会情勢	<ul style="list-style-type: none"> ●観光立国推進基本法施行 ●防衛省発足 ●国民投票法成立 ●安倍首相が辞任し、福田内閣成立 ●米国、サブプライムローン問題の表面化 ●新潟県中越沖地震発生 ●各地で食品偽装の発覚 ●郵政民営化法に基づき、日本郵政グループ発足 ●アップル社、初代iPhone発売 	<ul style="list-style-type: none"> ●麻生内閣成立 ●リーマン・ブラザーズ・ホールディングス経営破綻、世界的金融危機へ ●日経平均株価、1982年以来となる26年ぶりに7,000円を割る ●後期高齢者医療制度開始 ●秋葉原通り魔事件 ●北京夏季五輪開催 ●米大統領選で民主党のオバマ候補当選 	

2009	2010	2011
	<ul style="list-style-type: none"> ●内閣府より公益認定を受け、公益財団法人へ移行 ●森下スタジオ新館建設に際し、(株)良品計画より「無印良品」の家具・備品等の寄贈を受ける 	<ul style="list-style-type: none"> ●自主製作事業「レジデンス・イン・森下スタジオ」に対して文化庁より助成を受ける(2011-2015年度)
	<ul style="list-style-type: none"> ●森下スタジオ、新館竣工 スタジオのほか、ゲストルームやラウンジを新たに備えた新館が完成 	
<p>NPO法人鳥の劇場やNPO法人コンカリーニョなど、地域の演劇を振興する事業を重視し、支援を行う</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ●「セゾン・フェロー シニア・フェロー」公募開始 ●「日仏舞踊交流プログラム」を休止 <p>ドイツのHAU劇場で、日本の現代演劇を特集する「TOKIO-SHIBUYA: THE NEW GENERATION」が行われる。</p>		<p>「対話」や「プラットフォーム」をキーワードに立場を超えた交流を促す事業の増加</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●セミナー「米国の企業フィランソピー最新事情」を実施 		<p>東日本大震災を受けて、郷土芸能をはじめとする地域の文化資源への意識が高まる</p>
<p>ドイツのHAU劇場で、日本の現代演劇を特集する「TOKIO-SHIBUYA: THE NEW GENERATION」が行われる。</p>		<p>ウィーン芸術週間の演劇部門で、日本の現代演劇が特集される。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●セミナー「米国の企業フィランソピー最新事情」を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●こまばアゴラ劇場と共催し、「創造型芸術劇場の芸術監督・プロデューサーのための基礎講座」を実施 ●国際交流基金と共催し、「JENESYS Programme: 東アジアクリエイター招へいプログラム 2009/2010」を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●森下スタジオ、新館のゲストルームを活用した自主事業、「レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー」を開始【別表⑫】 ●「リアル・アーティストカンパセーションズ・ワークショップ」、プリティッシュ・カウンシルと共催を開始
<p>プロデューサーとの交流が盛んとなる</p>	<p>公共ホール、ネーミングライツ導入広がる</p>	<p>クラウド・ファンディング、盛んとなる</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■(社会情勢)民主党政権が設置した行政刷新会議、事業仕分けを実施 ■東京国際芸術祭、「フェスティバル/トーキョー」に改称し、開催 ■別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」、スタート ■座・高円寺開館 ■ベニサン・ピット閉館 ■シアタートップス閉館 	<ul style="list-style-type: none"> ■経済産業省製造産業局「クール・ジャパン」室開設 ■アサヒ・アートスクエア、「AAS Grow up!! Artist Project」開始 ■瀬戸内国際芸術祭、あいちトリエンナーレ、Kyoto Experiment、スタート ■富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督に多田淳之介就任(最年少芸術監督) ■水天宮ピット(東京舞台芸術活動支援センター)開館 ■3331 Arts Chiyoda開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第3次基本方針)閣議決定、年間の創造活動への総合的な支援や日本版アーツカウンシルの試行的導入、アーティスト・イン・レジデンスの支援などを重点戦略とする ■企業メセナ協議会、「GBFund」創設 ■東京芸術見本市、東京から横浜へ会場を移動し、「国際舞台芸術ミーティング in 横浜」に改称し、開催 ■おおさか創造千島財団設立 ■KAAT神奈川芸術劇場開館
<ul style="list-style-type: none"> ●衆議院総選挙で民主党が圧勝し、鳩山内閣成立 ●行政刷新会議、事業仕分けを実施 ●ギリシャ、国家財政の粉飾決算が発覚 ●ゼネラル・モーターズ、クライスラー経営破綻 ●裁判員制度施行 ●ワールド・ベースボール・クラシック、日本代表2大会連続優勝 ●世界保健機構(WHO)、新型インフルエンザのパンデミック宣言 ●オバマ米大統領、ノーベル平和賞を受賞 	<ul style="list-style-type: none"> ●菅内閣成立 ●欧州債務危機の拡大 ●中国のGDP、日本を上回り世界2位へ ●日本航空経営破綻 ●尖閣諸島沖で中国漁船衝突、インターネットの映像流出 ●小惑星探査機「はやぶさ」、地球に帰還 ●FIFAワールドカップ南アフリカ大会、日本代表ベスト16 ●上海国際博覧会開催 ●チリ鉱山、作業員33名、奇跡の生還 	<ul style="list-style-type: none"> ●野田内閣成立 ●大阪府知事・大阪市市長のダブル選挙で「維新の会」が圧勝 ●環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)に参加表明 ●東日本大震災発生、福島第一原子力発電所事故 ●アップル社創業者、スティーブ・ジョブズ逝去 ●FIFA女子ワールドカップ、日本女子代表優勝 ●北朝鮮最高指導者に金正恩氏就任

年	2012	2013
方針		
活動・出来事		●2013年11月、創立者、堤清二氏逝去
助成事業	場所の提供	
	情報・ノウハウの提供	●団体の法人化に向けた相談窓口を開設する
	機会の提供	
	創造環境整備	舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)の設立準備の支援を行う
	芸術創造	演劇やダンスの専門学部を有する大学卒業生からの申請が増加
	国際交流	アジアに関連するプロジェクトの増加
自主製作・共催事業		
芸術支援状況の特徴	クラウド・ファンディング、盛んとなる	障害者アートが
芸術文化支援状況	<ul style="list-style-type: none"> ■「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」施行 ■新たな認定NPO法人制度の施行、スタートアップの支援として「仮認定NPO法人制度」導入 ■橋下大阪市長、文楽協会への補助金の見直しを指示 ■沖縄のアーツカウンシル「沖縄文化活性化・創造発信支援事業」開始 ■アーツカウンシル東京設立 ■中学校の保健体育で、武道とダンスが必修となる ■アジア女性舞台芸術会議実行委員会発足 ■レズ・アルティス総会2012東京大会開催 ■東京芸術劇場、リニューアル・オープン 	<ul style="list-style-type: none"> ■大阪アーツカウンシル設立 ■アーツカウンシル東京、「東京芸術文化創造発信助成 [長期助成プログラム]」開始 ■舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)発足 ■こまばアゴラ演劇学校・無隣館開校 ■「習いに行け!東北へ!!」開始 ■歌舞伎座、リニューアル・オープン ■穂の国とよはし芸術劇場プラット開館 ■アンダースロー開館 ■ル テアトル銀座 by PARCO、閉館
社会情勢	<ul style="list-style-type: none"> ●第2次安倍内閣成立 ●消費税法案成立 ●東日本大震災の復興予算の使途をめぐる問題が浮上 ●格安航空会社(LCC)、ピーチ・アビエーション、ジェットスター・ジャパン、初就航 ●全国の原子力発電所、一時稼働ゼロ ●東京スカイツリー開業 ●フェイスブック、米NASDAQ市場に株式を上場 ●ロンドン夏季五輪開催、日本代表史上最多のメダルを獲得 ●中国共産党総書記に習近平就任 ●米オバマ大統領再選 	<ul style="list-style-type: none"> ●特定秘密保護法の成立、同法の廃案を訴えるデモが広がる ●アベノミクス始動、金融緩和の期待から円安・株高が進む ●2020年夏季オリンピック・パラリンピック大会、東京開催決定 ●ツイッター、ニューヨーク証券取引所に株式を上場 ●エドワード・スノーデン、米国の情報収集活動を告発 ●中国、PM2.5の汚染拡大の深刻化

【参考資料】企業メセナ協議会「メセナ年表」、トヨタアートマネジメント「アートマネジメント関連年表」、公益法人協会「制度改革アーカイヴズ」、「国際交流基金30年のあゆみ」、各種ウェブサイト

2014	2015	2016
<ul style="list-style-type: none"> ●伊東勇氏が理事長に就任 	<ul style="list-style-type: none"> ●『セゾン文化財団の挑戦～誕生から堤清二の死まで』刊行 	<ul style="list-style-type: none"> ●自主製作事業「セゾン・アーティスト・イン・レジデンス」に対して文化庁より助成を受ける
<ul style="list-style-type: none"> ●試行版プログラムとして、「フライト・グラント」開始 	<ul style="list-style-type: none"> ●「フライト・グラント」、正規プログラムとなる 	<ul style="list-style-type: none"> ●「創造環境整備」を「創造環境イノベーション」に改称し、舞台芸術界の課題解決やスタートアップを目的とした事業を対象とする支援を開始
<ul style="list-style-type: none"> ●テアター・デア・ヴェルトに3名の演劇人を派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ●シンガポール国際芸術祭2015、国際舞台芸術ミーティング in 横浜2016でアーカイブボックスをもとにしたパフォーマンスを上演 	<ul style="list-style-type: none"> ●「レジデンス・イン・森下スタジオ」の成果を踏まえ、海外の芸術家や芸術団体等との双方向の国際文化交流が活性化を目的とする「セゾン・アーティスト・イン・レジデンス」を開始
<ul style="list-style-type: none"> ●文化庁と共催し、オン・ケンセンとともに「ダンス・アーカイブの手法」を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●「舞台芸術の観客拡大策に関する研究会」を実施 	
<ul style="list-style-type: none"> ●英語ワークショップ「日本の近・現代舞台芸術史」を実施 		
<p>脚光を浴びる</p>	<p>都内の劇場不足が深刻化</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ■文化庁「東アジア文化都市」開始 ■国際交流基金アジアセンター開設 ■芸術公社設立 ■第1回三陸国際芸術祭開催 ■アーツサポート関西発足 ■(一社)日本2.5次元ミュージカル協会設立 ■城崎国際アートセンター開館 	<ul style="list-style-type: none"> ■「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第4次基本方針)閣議決定 ■東京都「東京文化ビジョン」策定 ■2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた劇場やコンサートホールの改修工事や閉館による会場の不足、「2016年問題」が指摘される ■Explat設立 ■たちかわ創造舎閉館 ■青山劇場・青山円形劇場閉館 	<ul style="list-style-type: none"> ■2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラム、スタート ■文化庁の京都移転に関する基本方針が決定 ■「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」の改正、施行 ■トヨタコロオグラフィアワード終了 ■京都会館、「ロームシアター京都」に改称し、開館 ■にしすがも創造舎閉館 ■アサヒ・アートスクエア閉館 ■バルコ劇場、建替え工事のため、一時休館
<ul style="list-style-type: none"> ●第3次安倍内閣成立 ●地方創生として、「まち・ひと・しごと創生法」施行 ●集団的自衛権の行使容認、閣議決定 ●消費税5%から8%に増税 ●ソチ冬季五輪開催 ●錦織圭選手、全米オープンで準優勝 ●クリミア半島の帰属をめくり、ロシアとウクライナが対立 ●エボラ出血熱感染拡大 ●スコットランド、住民投票で独立否決 	<ul style="list-style-type: none"> ●安全保障関連法成立 ●スポーツ庁発足 ●安倍首相、戦後70年談話を発表 ●訪日外国人観光客が急増し、「爆買い」が新語流行語年間大賞に選ばれる ●九州電力川内1号機が再稼働、「原発ゼロ」終わる ●アップル・ウォッチの発売 ●世界各地でイスラム過激派組織による大規模テロが多発 ●米国とキューバ、国交回復 ●COP21でパリ協定採択 	<ul style="list-style-type: none"> ●オバマ米大統領、広島訪問 ●日本銀行、マイナス金利制度初導入 ●天皇陛下、退位の意向示唆 ●熊本地震発生 ●訪日外国人人数、2,000万人を超える ●相模原障害者施設殺傷事件 ●リオ夏季五輪開催 ●英国、国民投票の結果、欧州連合離脱決定 ●米大統領選で共和党のトランプ候補当選

別表データについて

※以下敬称略

※肩書、所属団体名等は助成・開催・刊行当時のものを記載

【別表①】海外招聘公演の主催事業一覧

年	アーティスト名	作品名	会場
1990	マギー・マラン・カンパニー	『レポルシオン』	銀座セゾン劇場
1991	ピーター・ブルック(演出)	『テンベスト』	銀座セゾン劇場
1992	スティーブン・バーク(演出)	『サロメ』『審判』	銀座セゾン劇場
1993	モスクワ・タバコフ劇場	『わが大地』『平凡物語』『検察官』	バルコ劇場、神戸文化小ホール
1994	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『冬物語』	銀座セゾン劇場
1995	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『恋の骨折り損』	銀座セゾン劇場
1997	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『夏の夜の夢』	銀座セゾン劇場
1998	ロイヤル・ナショナル・シアター	『オセロー』	銀座セゾン劇場
1999	テアトル・ヴィディ・ローザンヌ	『フェードル』	銀座セゾン劇場

【別表②】芸術創造活動プログラム 助成対象団体一覧 (1992年度～2009年度)

ジャンル	対象者名	代表者・芸術監督	助成対象年度	
演劇	新宿梁山泊	金 守珍	1992-1994	
	MODE	松本 修	1994-1996	
	燐光群	坂手洋二	1994-1997	
	青年団	平田オリザ	1995-1997	
	劇団解体社	清水信臣	1996-1998	
	演劇企画集団THE・GAZIRA	鐘下辰男	1999-2001	
	遊園地再生事業団	宮沢章夫	1996-1998	
	199Q太陽族	岩崎正裕	1998-2000	
	MONO	土田英生	1999-2001	
			2002-2004	
	桃園会	深津篤史	2000-2002	
			2003-2005	
	劇団「指輪ホテル」	羊屋白玉	2001-2003	
			2004-2006	
	演劇担当 猫ニャー	ブルースカイ	2001-2003	
	ナイロン100°C	ケラリーノ・サンドロヴィッチ	2002	
	うずめ劇場	ペーター・ゲスナー	2003-2005	
	地点	三浦 基	2005-2007	
	劇団、本谷有希子	本谷有希子	2005-2007	
	マレビトの会	松田正隆	2006-2008	
	チェルフィッチュ	岡田利規	2006-2008	
	ペンギンプルペイルパイルズ	倉持 裕	2007-2009	
	舞踊	伊藤キム+輝く未来	伊藤キム	1996-1998
				1999-2001
		山崎広太・rosy Co.,	山崎広太	1996-1999
		H・アール・カオス	大島早紀子	1997-1999
				2000-2002
イデビアン・クルー		井手茂太	1998-2000	
			2003-2005	
レニ・パッソ		北村明子	2000-2002	
			2004-2006	
Dance Theatre LUDENS		岩淵多喜子	2000-2002	
			2003-2005	
PROJECT FUKUROW		石川ふくろう	2001-2003	
Study of Live works発条ト		白井 剛	2001-2003	
AbsT		白井 剛	2006-2008	
ニブロール		矢内原美邦	2002-2004	
珍しいキノコ舞踊団	伊藤千枝	2003-2005		
BATIK	黒田育世	2004-2006		
Co.山田うん	山田うん	2005-2007		
大橋可也&ダンサーズ	大橋可也	2007-2009		
Dance Company BABY-Q	東野祥子	2007-2009		
パフォーマンス	ババ・タラフマラ	小池博史	1992-1994	
	ダムタイプ	古橋悌二	1993-1996	

【別表③】トライアングル・アーツ・プログラム(TAP) プロジェクトインダンス アメリカ、インドネシア、日本のダンスにおける人物交流プログラム実施内容

上記3ヶ国から推薦された振付家・ダンサー、制作者、研究者・批評家らがグループで各国に滞在しながら、それぞれの国のダンス関係者との交流を深める事業。

1994年度:TAPI

レジデンス先

【アメリカ】ジェイコブス・ピロー・ダンスフェスティバル(マサチューセッツ)

【インドネシア】ジャカルタ・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ(ジャカルタ)

【日本】森下スタジオ(東京)

参加者

【アメリカ】ポリー・モトリー(振付家・ダンサー)、サミュエル・A.ミラー(ジェイコブス・ピロー・ダンスフェスティバル ディレクター)

【インドネシア】デディ・ルタン(振付家・ダンサー)、トム・イブナー(制作)

【日本】米井澄江(振付家・ダンサー)、吉井省也(制作)

協力

共催:アジア・カルチュラル・カウンシル、助成:国際交流基金、協賛:アサヒビール株式会社

1997年度:TAPII

レジデンス先

【アメリカ】ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン)、UCLAインロード/アジア(カリフォルニア)

【インドネシア】ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ

【日本】森下スタジオ(東京)、京都

参加者

【アメリカ】ナンシー・スターク・スミス(振付家・ダンサー)、ローラ・ファーレ(ベイツ・ダンス・フェスティバル エグゼクティブ・ディレクター)

【インドネシア】スカルジ・スリマン(振付家・ダンサー)、イスカンドール・カマ・ローディン(照明家)

【日本】山崎広太(振付家・ダンサー)、佐東範一(制作)、伊藤恭子(舞踊批評・ジャーナリスト/日本のみの参加)

協力

共催:アジア・カルチュラル・カウンシル、ニューイングランド芸術財団

助成:国際交流基金、財団法人東京都歴史文化財団

1999年度

実施場所 ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン)他

内 容 TAPI-IIの評価を行い、TAPIIIIの計画等について意見交換を行う。関係者によるミーティングをベイツ・ダンス・フェスティバルで開催。

2001～2005年度:TAPIII

実施場所 アメリカ、インドネシア、日本

内 容 TAPIIIIとして、米映像作家モリー・デイヴィスと94年度のTAPIに参加した振付家・ダンサーのポリー・モトリーのチームが、関係者へのインタビュー等を収録するドキュメンテーションの作業を行う。2003年に映像作品が完成し、Traditions, Inventions and Exchange: Images from the Triangle Project - A Work-in-Progressとして、ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン)、森下スタジオ(東京)で上映。さらに、2005年にTraditions, Inventions and Exchange: Dance in Indonesia and Japanを、アジア・ソサエティ(NY)で上映した。

【別表④】セゾン文化財団ニュースレター「viewpoint」 記事一覧 1996年度～2016年度

号	発行日	タイトル	著者・所属等	号	発行日	タイトル	著者・所属等
1	1996/10/1	アーツマネジメントの視点 劇団に運営戦略はあり得るか — 青年団の軌跡を通じて viewpointの発刊にあたって	ジョアン・ジェフリー 平田オリザ	11	1999/8/25	芸術文化団体にとつてのNPO法 「ユニーク」な日本から「ふつうの」日本へ 大阪から見た関西演劇 — その変遷と現在	伊藤裕夫 マイケル・ジャクソン 岩崎正裕
2	1997/3/1	トライアングル・アーツ・プログラム — コンセプトとしての過程 チェーホフを探して — ぼくのロシア・東欧演劇巡り 第1回制作実践セミナー「海外公演の実施と問題点」レポート	サミュエル・A.ミラー 松本 修	12	1999/11/25	失敗の成功 — tptのディレクターズ・ワークショップ バック・トゥ・スクール — 大学院における アーツ・マネジメント教育の可能性 大地の糧、生命の表現 — アートキャンパ白州、12年間の経験	デヴィッド・ルヴォー 奥山 緑 木幡和枝
3	1997/7/20	目から鱗のおちた体験 — ジャック・ルコックのプロの演技教育 演劇の力・文化の力 シンポジウム「文化支援の展望」— 公的・民間支援の可能性」レポート 第2回制作実践セミナー「ワークショップ活動の可能性 — 自治体との取り組みを中心に」レポート	高橋昌也 佐藤郁哉	13	2000/2/25	芸術団体に対するリーガルエイド — 米VLAでの集中研修報告 新たな境を越えて — 初のアメリカツアー報告 人形劇「Kwaidan — 怪談」富山プロジェクトを終えて	福井健策 小池博史 前田圭蔵
4	1997/11/30	米国連邦政府(NEA)の演劇・ ダンス支援政策の軌跡 芸術団体の法人化をめぐる — 「第3の選択肢」としての合資会社 日本のダンス教育と舞踊家養成の プロジェクトについて	片山泰輔 桑野雄一郎 米井澄江	14	2000/5/25	土方巽を再構築する — 慶應義塾大学アート・ センターによる研究アーカイブ・システムの開発 さらば東京?東京の再構築 — 東京国際舞台芸術フェスティバルの諸問題 未来のコミュニティと不可能に挑む肉体 — インドネシア・アメリカ・日本 共に生きる21世紀のために — コミュニティダンスの普及を目指して	前田富士男 市村作知雄 山崎広太 南村千里
5	1998/2/28	イギリスにおける舞台芸術の支援策: 地方分散、職業としての演劇、マネジメントの奨励 才能を覚醒させる装置としての交流 アーティストと社会の架け橋:ダンス シアターワークショップでの1年間	河島伸子 伊藤恭子 佐東範一	15	2000/8/25	欧州の都市文化政策と「創造空間」 — ボローニャ・バーミンガムの比較を通して Encounters — 邂逅の軌跡 社会とダンスの結び目 — Japan Contemporary Dance Networkの発足に向けて	佐々木雅幸 オン・ケンセン 佐東範一
6	1998/5/25	演劇教育機関の逆説 — 芸術家はどのような 環境の中から生まれてくるのか? アジア・カルチュラル・カウンスル — アジアと米国の文化交流支援の35年 第5回制作実践セミナー「地方公演のルート作り — 効果的なアプローチとプレゼンテーションの方法」レポート	鴻 英良 ラルフ・サミュエルソン	16	2000/11/25	舞台芸術フェスティバルが育む芸術文化環境 遊園地の再生と逃走 — セゾン文化財団の 「芸術創造活動プログラム」と助成について へこたれない火の粉 — パフォーマンス・アートに関わって25年	五島朋子 宮沢章夫 霜田誠二
7	1998/8/25	フランクフルト市立劇場におけるマネー マネジメントの革新 — W.フォーサイスを支えた マネーマネジメントから我々は何を学ぶか 演劇による国際交流の可能性 — 欧米とアジアでの活動から得た経験 ジャパニーズ・シアター・ナウ — ジャパン・ソサエティーによるNYでの 日本現代演劇の紹介	笹井宏益 宮城 聡 ポーラ・S.ローレンス	17	2001/2/25	【シリーズ:米国の文化政策①】 クリエイティビティと社会の関係 — 米国の文化政策の発展について 業界の常識に挑戦?して — リチャード・フォアマン 率いるオントロジカル・ヒステリック・シアター 初来日公演を実現するまで 僕はアメリカでも孤独だった — ベイツ・ダンス・フェスティバル	ジジ・ブラッドフォード 奥山 緑 伊藤キム
8	1998/11/25	レジデントシアター成立への課題 — 公設民営化とマネー・マネジメント・スキルの開発 調和と対立の狭間にて — 米国の法律家による芸術支援活動 挑発するポスター 街に貼られた現代演劇 — 現代演劇ポスター収集・保存・公開プロジェクトの活動 第2期:制作実践セミナーI~III 「芸術団体にとつてのNPO法」 「NYにおける日本現代演劇の紹介」 「他業界から学ぶ観客開拓①-音楽編」レポート	衛 紀生 福井健策 笹目浩之	18	2001/5/25	【シリーズ:米国の文化政策②】 文化政策とビュー・チャリタブル・ ストラストについて 異文化紹介のメカニズム — 英国ヴィジティング・アーツの理念と活動	マリアン・A.ゴドフリー ステイブ・K.ユライスト テリー・サンデル
9	1999/2/25	アートを起業する — 米国のNPOの活動から 国際交流の経験 — ある戯曲が欧米で どのように上演され、受けとめられたか 第2期:制作実践セミナーIV 「他業界から学ぶ観客開拓② — 映画編」レポート	吉本光宏 坂手洋二	19	2001/9/10	to be or not to be — 舞台芸術団体に非営利 法人格を適用することの妥当性と必要性について 【シリーズ:米国の文化政策③】 研究者から見た米国の文化政策 舞台の上でみえを切ったり、喚いたり — CJ8: カナダ/日本ダンス・パートナーシップについて	塩谷陽子 マーガレット・ J.ヴィゾミアスキー コリン・ マッキンタイヤ
10	1999/5/25	芸術家の権利と芸術振興政策 — 優れた芸術を生み出す環境整備とは 日本を知る日本の俳優になるために — 「演劇研究室『座』による俳優養成講座」報告 日韓現代演劇交流 — 開きつつある扉の前にて	小林真理 壤 晴彦 木村典子	20	2002/2/28	【シリーズ:米国の文化政策④】 9月11日以降の米文化政策の展望 劇団解体社ワールドツアーを終えて アメリカ — 物語のダンスフェスティバルのあとに —	ジェームズ・アレン・スミス 清水信臣 北村明子
				21	2002/6/10	【特集:日本の戯曲の翻訳】 話し言葉の翻訳 日本の現代戯曲の同時代性を伝える — ドラマ・リー ディング〜日本の若手劇作家の現在 in the UK 日本戯曲の英訳について	齋藤 憐 中山弘美 リアン・イングルスルード

号	発行日	タイトル	著者・所属等
22	2002/9/30	【特集:海外で活躍する日本のダンスアーティスト】 日本の現代ダンスのアーティストが海外へ出る背景 僕がベルギーに居続けてしまう理由 海外で活躍するダンサーたち-“里帰り”ワークショップの開催にあたって 遠藤康行(ベルギー/シャルロワ・ダンス所属)、社本多加(ベルギー/ローザス所属)、安藤洋子(ドイツ/フランクフルトバレエ団所属)、稲尾芳文、島崎麻美(イスラエル/パッドシェパ・ダンスカンパニー所属)へのインタビュー	佐藤まいみ 日玉浩史
23	2002/11/30	ラオコオン・サマー・フェスティバル2002 今、ここに立つ(丸腰の身体)からの出発 — ラオコオン・サマー・フェスティバルに参加して 全身の包帯を解くために — ベイツ・ダンス・フェスティバルでのレジデンシー報告	鴻 英良 大橋 宏 石川ふくろう
24	2003/2/28	芸術文化創造活動支援の可能性 — ブルーラル・ファンディングの課題 第10回を迎えた世田谷パブリックシアター — 舞台技術者養成講座 ウェルズ ダンス・カンパニー ダイバージョンズとの複合的な交流事業	坪内恵美子 市来邦比古 井手茂太
25	2003/5/31	「舞踊」雑考(H・アール・カオス1997-2002) 「地域」を越えた舞台芸術の創造 — 岡山舞台芸術セミナーの活動と展望 ダンスの潮流を学ぶ — 京都国際ダンスワーク ショップ・フェスティバル“京都の暑い夏”	大島早紀子 大森誠一 森 裕子
26	2003/8/31	ロンドンへの道・前編 新たな寓話の創出 — 『RED DEMON』ロンドン公演を観て 小劇場におけるロングラン公演への挑戦	野田秀樹 キャサリン・ハンター 小原啓渡
27	2003/12/10	プエルトリコの新しい演劇 ロンドンへの道・中編 誰にでもオープンな英国のアートセンター — チャプター・アートセンターでの研修を終えて セゾン文化財団(メセナ大賞2003 舞台芸術牽引賞)受賞の報告	ロベルト・ラモス=ベレア 野田秀樹 秦 岳志
28	2004/3/15	転換期にある関西小劇場 — 大阪現代舞台芸術協会を通して我々に何が出来るか 指輪ホテル 細腕繁盛記(2001-2003) リビングルーム さくら編 — 栗東における『Living Room Project』の取り組み	深津篤史 羊屋白玉 白井 剛
29	2004/7/25	【シリーズ:世界の芸術支援①】 台湾・財団法人国家 文化芸術基金会について 芸術振興政策における芸術NPOの意義 ロンドンへの道・後編	財団法人国家文化芸術基金会 資源開発部編/ 文化芸術基金会について 訳:蘭 明 曾田修司 野田秀樹
30	2004/11/15	作品の熟成 【シリーズ:世界の芸術支援②】 ジャーウッドとは何か? 日本の現代演劇をロシアへ — 国立オムスク大学における日本文化講座	川村 毅 ロアンヌ・ドッズ 村井 健
31	2005/3/31	【シリーズ:世界の芸術支援③】 ロレックスの 「メント&プロトジェアートプログラム」について 誤解から理解へ — 俳優教育でいま求められているもの コンタクト・インプロビゼーションって何? をC.I.co.的視点から	レベッカ・アーヴィン 川南 恵 勝部ちこ
32	2005/08/20	新しい批評の場を求めて 集客から創客へ。 「オリジナルのワークショップを創る研究会」の 活動について	長谷部浩 衛 紀生 吉野さつき
33	2005/12/10	声と言葉と身体をつなげる旅路 【シリーズ:世界の芸術支援④】 プリンセス・グレース財団(USA)と プリンセス・グレース賞について 瓶詰め状態の劇作家 — アメリカにおける劇作家たちの状況	池内美奈子 クリスティーン・ M.ジャンカターノ アヤ・オガワ

号	発行日	タイトル	著者・所属等
34	2006/3/25	DANCE BOX:過去-現在-未来 我が闘争へうずめ劇場イン北九州 ダンスとメディア-その関係性と必要性	大谷 煥 ペーター・グスナー 飯名尚人
35	2006/05/20	幽霊今昔 — 『四谷怪談』を演出して 日独共同プロジェクト『四谷怪談』の現場から レニ・パソの海外公演 フツウのダンス・ カンパニーが海外でたくさん公演できるワケ	ヨッシ・ヴィーラー 阿部初美 布施龍一
36	2006/8/20	芸術家のくすり箱の誕生 — 才能を花開かせるしくみを創るために必要なこと 【シリーズ:世界の芸術支援⑤】 NESTAとドリーム タイム・フェロシップ・プログラムについて 私、新しい自分を見つけちゃいました	福井恵子 ゲヌ・デュバ 伊藤キム
37	2006/12/10	リサーチ&ディベロップメント — プレイライツ・センターについて インタビュー:「…」には気をつけて — ミネアポリスの「プレイラボ」に参加して ムネモシュネの贈り物 — 「記憶」をめぐる物語	ポリー・カール 本谷有希子 ユディ・アーマド・タジュディン
38	2007/3/5	モバイル-現代異文化社会派演劇について 『モバイル』への道 Dance Theatre LUDENS 2000-2005 — セゾン文化財団の芸術創造活動助成を得て	アルヴィン・タン 鐘下辰男 岩淵多喜子
39	2007/5/31	あったらいいなを形にする — 海外研修をもっと有効に活用するために 国際共同製作『Dream Regime — 夢の体制 —』を通して — 共同作業の現場から 矢内原美邦国際コラボレーション 作品発表をとおして	後藤美紀子 清水信臣 矢内原美邦
40	2007/8/10	ダンスやめるつもりだったのに多くのみなさんにご 支援いただいた今この僕ありますという僕の近況 えんげき放浪記 レジデンス・アーティスト・システム — 私達の試み 創造共同体 — 契約アーティストのいる劇場 —	井手茂太 水沼 健 伊藤 孝 加藤弓奈
41	2007/11/10	私たちは森を原点としていた。 — 国際共同制作 ダンス・プロジェクト「気配の探求」報告 LIVE ARTS BANGKOK 『せきをしてもひとり』タイ再演における 舞踊家の挑戦 infect — コミュニケーションを誘発する プロモーションを目指して	田中 浜 山下 残 古後奈緒子 相内唯史
42	2008/2/25	【シリーズ:世界の芸術支援⑥】 「芸術家」の見える社会を目指して — ユナイテッド・ステーツ・アーティストズについて ロンドン公演の報告 旅するスタッフ塾	キャサリン・デショー 鴻上尚史 アイカワマサアキ
43	2008/6/5	ミネアポリスのリーディング体験 「ポストドラマ演劇の実践ワークショップ」の次第 山田うんワークショップ・レポート	永井 愛 阿部初美 山田うん
44	2008/9/10	ダンス公演『恋する虜 ジュネ、身体、イマージュ』 綿ほり立っ作業場として ~ 京都造形芸術大学の試み CAVEと舞踏とニューヨーク 類い稀なる表現者たち ~クンステン・フェスティバル・デザール における岡田利規と山下残作品~	山田せつ子 森家成和 クリストフ・スラフマイルダー
45	2008/12/10	【特集:地域の創造環境】 地域交流プロジェクトを経て 考えたこと-札幌と福岡の演劇交流事業「Meets! 2007」 渡辺源四郎商店のこれまでとこれから — 青森で演劇をするということについて 高知演劇ネットワーク・演会による舞台芸術の創造 環境整備に向けた取り組み — 俳優養成とともに 地域における演劇活動の課題と九州演劇人サミット	小室明子 畑澤聖悟 西村和洋 高崎大志

号	発行日	タイトル	著者・所属等	号	発行日	タイトル	著者・所属等
46	2009/2/25	戯曲翻訳の新機軸 — ブレイライツ・センターでの 日米共同翻訳推敲"ラボ" Is there a pizza place around here? 『中間報告』	吉田恭子 倉持 裕 三浦 基	58	2012/2/25	マレピトの会、その演劇における方法について 『あゆみ』をラインとした、5年間の記録 まだ終わってない、東京滞在	松田正隆 柴 幸男 コ・ジュヨン
47	2009/6/5	【シリーズ:世界の芸術支援⑦】 欧州連合(EU)の文化政策と助成 — 舞台芸術を中心に A Page Out of Order 失なわれた1ページ 30年の歴史 『blueLion』の滞り製作と上演、 ならびに3年間の助成期間を終えて	ジュディス・ステインズ ヨシコ・チュウマ 白井 剛	59	2012/5/30	針穴を通して見る — Looking through the needle hole 日本のアーティストとして海外で活動すること summersick magic music	アイディン・テキャル 梅田宏明 篠田千明
48	2009/9/5	【シリーズ:世界の芸術支援⑧】 ヨーロッパにおける舞台芸術支援の 政策と助成 — 各国の展望、傾向、問題点 「誰か」の優位 — 〈室伏鴻、ベルナルド・モンテ、 ボリス・シャルマツ 2007-2010〉 モロッコに行ってきました	ジュディス・ステインズ 室伏 鴻 戌井昭人	60	2012/8/25	「デラシネラの創作」に至る道程 アーティスト主体のBALが見据える可能性とは 極東のスリー(イケ)メン イン ダークスーツ — 三人の、どこが同じで、何が違うか。	小野寺修二 山崎広太 川口隆夫
49	2009/12/15	「タッチ、コンタクト、ボーンズ」本州に行く 芸術家のくすり箱が取り組む 「芸術家のヘルスケア」 クンステンはベルギーの地名だと思ってた	スティーヴ・バクストン 小曾根 史代 前田司郎	61	2012/11/30	「妖精たちの無賃労働」 — 当然視している物事の大切さについて 『踊りとそのまわりにあるもの』 時代の共犯者としてのコンテンポラリーダンス	マックス=フィリップ・ アッシュンブレンナー 鈴木ユキオ 石井達朗
50	2010/2/28	演劇作家のわたしはパブリックで あることがどのように可能かについて アーティストに聞く — あなたにとってAIRは? viewpoint 第50号を迎えて	岡田利規 Part 1: ディック・ウォン Part 2: マリアーノ・ベンソッティ 片山正夫	62	2013/2/20	『欧州で考えたこと』 括弧書き劇場の実験 — 「We Dance」の5年間をめぐる 常に形状を変えることを許容しながらも監視する	前田司郎 岡崎松恵 神里雄大
51	2010/6/10	中国のインディペンデントアーティストとの共同作業の試み — 21世紀日中舞台芸術交流プロジェクト — 劇場から遠く離れて	菊池領子 北村明子	63	2013/5/20	孤独と連帯 — 「舞台芸術制作者オープン ネットワーク」発足に寄せて 不安を忘れない 〈媒介〉としての「日本」 — 舞台芸術のモビリティを高めるために	橋本裕介 ダグマー・ヴァルザー 内野 儀
52	2010/9/5	なぜ、いま「アジアの演劇」と「教育演劇」なのか — セミナー&ワークショップ「アジアの演劇と 教育演劇の過去・現在・未来を考える」のレポート — 限界はないはず — 首都圏の都市での劇団活動 アーティストに聞く — あなたにとってAIRは? Part 3: エイミー・オニール/カイル・エイブラハム	松井憲太郎 関 美能留	64	2013/8/31	旅を巡って — サバティカル雑感 根を張る日々 つなごうとする意志 — 2013年上半年期の舞台を見て	小池博史 手塚夏子 松岡和子
53	2010/12/15	さて、どこから始めましょうか ブリュッセル滞在記 ロンドンで戯曲を書くこと — ロイヤルコート シアター・インターナショナルレジデンシーのレポート [3回シリーズ] ヨーロッパ見聞 1	ファーミ・ファジール 松井 周 前川知大 久野敦子	65	2013/11/30	JCDNの15年を少しだけ振り返ってみて ファウンド・イン・トランスレーション: 国際共同制作の創造プロセスにおける 翻訳の役割を探る ある物体は名付けられる以前より、 常にそのものである	佐東範一 滝口 健 塚原悠也
54	2011/2/28	私たちはどこへ行くのだろう — 助成金制度について考える 演劇の地平を均せ 東京滞在 [3回シリーズ] ヨーロッパ見聞 2	小池博史 倉持 裕 山下 残 久野敦子	66	2014/2/25	「追悼:堤 清二 理事長」 天児牛大/一柳慧/岡田利規/川村毅/北村明子/紀国憲一/ ドナルド・キーン/小池一子/小池博史/高橋昌也/高山明/ 勅使川原三郎/平田オリザ/福原義春/宮沢章夫/八木忠栄/ 山崎正和/リチャード・ラニエ	松井 周 北川大輔
55	2011/6/15	ショーネッド・ヒューズ青森プロジェクト 2008~2011 継続から生まれるもの。 アーティストに聞く — あなたにとってAIRは? Part 4: ジュリー・ニオシュ [3回シリーズ] ヨーロッパ見聞 3	ショーネッド・ヒューズ 杉山 準 久野敦子	67	2014/5/30	インドネシア国際共同製作企画 To Belong Project の軌跡 演劇の場所 挑戦する演劇祭 佐藤佐吉演劇祭2014+ 開催とこれから	北村明子 松井 周 北川大輔
56	2011/9/15	『個室都市』東京、京都、そしてウィーン アーティストとしての俳優指導者の役割 — The Role of the Instructor as an Artist Asia Contemporary Dance Festivalを 中心としたアジアとの取り組みについて	高山 明 池内美奈子 横堀ふみ	68	2014/8/31	ジュニア・フェローの6年間 「テアター・デア・ヴェルト — パフォーミング・アーツ・キャンパス」の 現場から セミナー「ダンス・アーカイブの手法」報告 (2014年4月)	江本純子 神里雄大/ 篠田千明/ 野村政之
57	2011/12/15	2011年ウィーン芸術週間における 日本特集 未来の舞台芸術を動かす新しい"OS"をつくる: — ドリフターズ・サマースクールの活動 2010-2011 日本滞在	シュテファニー・カルブ 中村 茜 サヴィータ・ラニ	69	2014/12/5	舞台芸術というレンズから見える風景 ブルキナファソらしっど? みんなで一緒に舞台を楽しもう!! — 特定非営利法人シアター・アクセシビリティ・ ネットワークの取り組み —	高谷史郎 勝部ちこ 廣川麻子
				70	2015/2/25	『ガモメ カルメギ』までのこと。から。 そうやって歴史と向き合っている 時間における身体 — 過去と現在の間に 京都アトリエ劇研 — 地方の民間劇場の取り組み	多田淳之介 ソン・ギウン イム・ジエ あごうさとし

号	発行日	タイトル	著者・所属等
71	2015/7/31	【特集:日台文化交流をめぐって】 どうなるか分からなくても、やってみたらいいと思う。 — 台湾・日本国際共同企画 川端康成三部作 台北・上海・東京公演報告 山縣美礼 植物学系譜研究の十年 — アーティストとして日本と関わるまでの道のり 劉亮延 台湾のなかの「日本」:「日本時代」のデッサン 李文茹	
72	2015/10/10	【特集:劇場の外へ】 路上のホームレスとXアパートメント 小川てつオ 『演劇クエスト』で世界をさまよう 藤原ちから 拡張された場におけるパフォーマンス 星野太	
73	2015/12/25	【特集:「連歌」の思想と芸術交流】 既知の未知 — 連歌的創作の可能性 一柳 慧 連詩が教えてくれるもの 阿部公彦 往復書簡から始まった旅 ジョン・ジェスラン/川村 毅 [Information] ダンスアーカイブボックス@TPAM2016	
74	2016/3/15	【特集:正直、オリンピックってどうですか?】 伊藤千枝/川村美紀子/霜田誠二/多田淳之介/塚原悠也/振子 びじん/羊屋白玉/平田オリザ/三浦 基/南村千里/山本卓卓	

号	発行日	タイトル	著者・所属等
75	2016/7/10	【特集:文化+まちづくり— 社会デザインにおける「関係性」の物語 —】 パフォーマーが地域おこしに関わる私的な例 姜 命秀 立川市モデルの確立を目指して~たちかわ創造舎の挑戦~ 倉道康史 文化と社会デザイン、コミュニティデザイン — 関係性を活かすワーク、編み直すワーク 中村陽一	
76	2016/9/26	【特集:舞台芸術におけるプロフェッショナリズムとは?】 舞台芸術とプロフェッショナリズム 佐藤 信 プロフェッショナルとアマチュアの違い 前川知大 日本的なプロフェッショナル 梅田宏明	
77	2016/12/26	【特集:不在/亡霊の演劇】 亡霊の話法 — 能と現代演劇における「語り」 横山太郎 幽霊の生は大事な問題だ 岡田利規 不在について 村川拓也	
78	2017/3/15	【特集:インクルーシブ/インテグレイテッドダンスの可能性と課題】 インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響 — Kyo 境界を超えるダンス— 障害を持つ人達の身体性 伊地知裕子 を生かした新しい舞踊表現の可能性を探る 岩淵多喜子 インクルーシブダンスの可能性 — 「響」での活動を通して 石井達朗 エクスクルーシブな時代に、 「インクルーシブであること」を巡って思うこと	

【別表⑤】制作実践セミナー 開催歴一覧(1996年度~2004年度)

開催期間	タイトル	講師	会場
1996/11/6	第1回「海外公演の実施と問題点」	曾田修司(国際舞台芸術交流センター) 小山田徹(ダムタイプ)	東京・モリイレンタルスペース
1997/1/16	第2回「ワークショップ活動の可能性-自治体との取り組みを中心に」	松本 修(MODE)	森下スタジオ
1997/7/29	第3回「芸術団体の法人化」	桑野雄一郎(演田松本法律事務所、弁護士) 楯屋一之(有限会社ノイズ/劇団NOISE)	森下スタジオ
1997/10/29	第4回「現代舞踊の活性化に向けて」	ローラ・ファーレ(ベイツ・ダンス・フェスティバル エグゼクティブ・ディレクター) 佐東範一(制作/米DTWインターン)	森下スタジオ
1998/2/6	第5回「地方公演のルート作り-効果的なアプローチと プレゼンテーションの方法」	津村 卓(財団法人地域創造) 坂手洋二(燐光群)	森下スタジオ
1998/7/22	第2期・I「芸術団体としてのNPO法」	伊藤裕夫(電通総研)	セゾン文化財団会議室
1998/8/7	第2期・II「ニューヨークにおける日本現代演劇の紹介」	ポーラ・S.ローレンス(ジャパン・ソサエティ)	セゾン文化財団会議室
1998/9/11	第2期・III「他業種から学ぶ観客開拓1 — 音楽編」	児玉 真(カザルスホール)	セゾン文化財団会議室
1998/11/27	第2期・IV「他業種から学ぶ観客開拓2 — 映画編」	篠原弘子(株式会社ブレノン・アッシュ)	森下スタジオ
2000/4/5-5/17	法律編:Aコース「舞台作品・上演に関する著作権」(全5回)	福井健策(弁護士) ナビゲーター:奥山緑(舞台制作者)	森下スタジオ
2000/5/24-6/14	法律編:Bコース「舞台芸術と契約」(全4回)	ゲスト講師:[A]斎藤憐(劇作家)、[B]大和滋(芸団協)	
2000/9/27-12/6	舞台制作者のためのマーケティング勉強会(全6回)	和田充夫(慶應義塾大学ビジネス・スクール教授)	セゾン文化財団会議室
2001/5/17-6/14	法律編:「舞台作品・上演に関する著作権」(全5回) 法律編:「舞台芸術と契約」(全5回)	福井健策(弁護士) ナビゲーター:奥山緑(舞台制作者) ゲスト講師:[A]高萩宏(世田谷パブリックシアター) [B]宮田慶子(劇団青年座)	森下スタジオ
2004/9/13	指定管理者制度はビジネスチャンス?	小林真理(東京大学助教授) パネリスト:市村作知雄 (NPO法人アートネットワーク・ジャパン理事)	国際フォーラム会議室
2004/10/4	ジャパニーズ・クールの波に乗る — マンガ、アニメ、ゲームの海外戦略 —	小野打恵(株式会社ヒューマンメディア代表取締役社長) ゲスト:村濱章司(株式会社GDH代表取締役会長)	国際フォーラム会議室
2004/11/19	美術界から学ぶ — 新世代ギャラリストの戦略とは —	小山登美夫(小山登美夫ギャラリーオーナー)	国際フォーラム会議室

【別表⑥】ジャパン・ソサエティ(米・ニューヨーク)

Japanese Theater NOW 第1期:

1998年度~2002年度

助成年度	劇団	主宰者	上演作品
1998	燐光群	坂手洋二	『神々の国の首都』
1999	新宿梁山泊	金 守珍	『少女都市からの呼び声』
2000	青年団	平田オリザ	『東京ノート』
2001	劇団解体社	清水信臣	『バイバイ/未開へ』
2002	ク・ナウカシアター カンパニー	宮城 聡	『天守物語』

Japanese Theater NOW 第2期:

2004年度~2008年度

助成年度	劇団	主宰者	上演作品
2004	燐光群	坂手洋二	『屋根裏』
2005	青年団	平田オリザ	『ヤルタ会談』『忠臣蔵・OL編』
2006	指輪ホテル	羊屋白玉	『CANDIES girlish hardcore』
2007	—	川村 毅	『AOI / KOMACHI』
2008	チェルフィッチュ	岡田利規	『三月の5日間』『クーラー』

Play Reading Series:

2009年度、2013年度~2015年度

助成年度	劇作家	上演作品
2009	永井 愛	『片づけたい女たち』
2013	前川知大	『散歩する侵略者』
	前田司郎	『迷子になるわ』
2014	ノゾエ征爾	『鳥踊る』
2015	山本卓卓	『幼女X』

【別表⑦】 ベイツ・ダンス・フェスティバル(米・メイン州ルイストン)参加舞踊家一覧

期間	参加舞踊家
1999年7月24日-8月15日	武元賀寿子(但し同フェスティバルへの助成として)

「ベイツ・ダンス・フェスティバル舞踊家派遣事業」参加舞踊家

期間	参加舞踊家(カンパニー名)
2000年7月29日-8月20日	伊藤キム(伊藤キム+輝く未来)
2001年7月28日-8月19日	北村明子(レニ・パッソ)
2002年7月27日-8月18日	石川ふくろう(PROJECT FUKUROW)

【別表⑧】 森下スタジオ若手舞踊家育成プログラム関連事業一覧 (2000年度~2004年度)

共催:東京ガス都市開発株式会社 パークタワー・アートプログラム(2000年度~2003年度) 協力:STスポット、セッションハウス、DANCE BOX
協賛:アサヒビール株式会社、トヨタ自動車株式会社 企画・制作協力:ハイウッド 機材協力:パークタワーホール、ル テアトル銀座

年度	開催日程	イベント名	会場	出演者
2000	2000/12/9	ネクスト・ネクスト(若手による舞踊小作品集)	森下スタジオ	石川ふくろう、オガワユカ、クルスタシア、たかぎまゆ、水と油
	2001/2/1-2/7	Just before the performance! (作品創作過程の見学およびトーク)	森下スタジオ	岩淵多喜子、永谷亜紀、佐藤ベチカ、山下 残、マドモワゼル・シネマ
	2001/2/16-2/24	第5回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	岩淵多喜子、永谷亜紀、佐藤ベチカ、山下 残、マドモワゼル・シネマ
2001	2001/12/8	ネクスト・ネクスト2	森下スタジオ	天野由起子、北村成美、坂本公成、山田珠美
	2002/1/25	Just before the performance!	森下スタジオ	岩淵多喜子(Dance Theatre LUDENS)×松澤慶信(舞踊美学)
	2002/1/31			矢内原美邦(ニプロール)×桜井圭介(ダンス批評)
	2002/2/1			石川ふくろう(PROJECT FUKUROW)×石井達朗(舞踊評論家)
2002/2/20-2/28	第6回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	岩淵多喜子(Dance Theatre LUDENS) 矢内原美邦(ニプロール)、石川ふくろう(PROJECT FUKUROW)	
2002	2002/12/21	ネクスト・ネクスト3	森下スタジオ	岡本真理子、黒田育世、砂連尾理+寺田みさこ、飛び入り家系
	2003/2/17	Just before the performance!	森下スタジオ	山田うん(Co.山田うん)×松澤慶信(舞踊美学)
	2003/2/20			矢内原美邦(ニプロール)×桜井圭介(ダンス批評)
	2003/2/22			坂本公成(Monochrome Circus)×石井達朗(舞踊評論家)
2003/2/26-3/5	第7回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	坂本公成(Monochrome Circus)、矢内原美邦(ニプロール) 山田うん(Co.山田うん)	
2003	2003/12/20	ネクスト・ネクスト4	森下スタジオ	相原マユコ、鈴木ユキオ、高野美和子、林 貞之
	2004/2/7	Just before the performance!	森下スタジオ	砂連尾理+寺田みさこ×桜井圭介(ダンス批評)
	2004/2/13			矢内原美邦(ニプロール)×石井達朗(舞踊評論家)
	2004/2/17			黒田育世(BATIK)×松澤慶信(舞踊美学)
2004/2/25-3/3	第8回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	砂連尾理+寺田みさこ、矢内原美邦(ニプロール)、黒田育世(BATIK)	
2004	2004/12/18	ネクスト・ネクスト5	森下スタジオ	北村成美、鈴木ユキオ、康本雅子

【別表⑨】 日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト

主催:U.S./Japan Cultural Trade Network of Arts Midwest 提携:プレライツ・センター(ミネアポリス) 開催地:米・ミネアポリス(プレライツ・センター)

年度	派遣劇作家/翻訳対象作品	提携/協力/助成
2006	・本谷有希子/『乱暴と待機』(英題:Vengeance Can Wait)	協力:NPO法人アートネットワーク・ジャパン、ガスリー・シアター(ミネアポリス) 助成:アンドリュー・W.メロン財団、在日米国大使館
2007	・松田正隆『蝶のやうな私の郷愁』(英題:Like a butterfly, My Nostalgia) ・永井 愛『片づけたい女たち』(英題:Women A Holy Mess) ・[再演]本谷有希子/『乱暴と待機』(英題:Vengeance Can Wait)	協力:NPO法人アートネットワーク・ジャパン、ガスリー・シアター(ミネアポリス) 助成:アンドリュー・W.メロン財団、国際交流基金
2008	・深津篤史『のたり、のたり、』(英題:Notari, Notari [Slowly, Rolling]) ・倉持 裕『ワンマン・ショー』(英題:One Man Show)	協力:ガスリー・シアター(ミネアポリス) 助成:アンドリュー・W.メロン財団、国際交流基金

【別表⑩】 クンステン・フェスティバル・デザール(ベルギー・ブリュッセル)

助成年度	劇団	主宰者	上演作品
2008	—	山下 残	『そこに書いてある』
	チェルフィッチュ	岡田利規	『フリータイム』
2009	五反田団	前田司郎	『すてるたび』
2010	チェルフィッチュ	岡田利規	『ホットベツパー、クーラー、そして、お別れの挨拶』
2011	チェルフィッチュ	岡田利規	『わたしたちは無傷な別人である』『ゾウガメのソニックライブ』
	ボツドール	三浦大輔	『夢の城』

【別表①】セゾンフェロー(2008年度～2016年度)

ジュニア・フェロー

ジャンル	対象者名	助成対象年度
演劇	戌井昭人(劇作家・演出家/鉄割アルパトロスケット)	2008-2009
	江本純子(劇作家・演出家・俳優/毛皮族)	2008-2009, 2010-2011, 2012-2013
	関美能留(演出家/三条会)	2008-2009
	タニノクロウ(劇作家・演出家/庭劇団ベニノ)	2008-2009, 2010-2011
	中野成樹(演出家/中野成樹+フランケンズ)	2008-2009
	多田淳之介(劇作家・演出家/東京デスロック・CASTAYA Project)	2009-2010
	松井周(劇作家・演出家/サンプル)	2009-2010
	柴幸男(劇作家・演出家/ままごと)	2010-2011, 2012-2013, 2015-2016
	神里雄大(演出家・作家/岡崎藝術座)	2011-2012, 2013-2014, 2015-2016
	危口統之(劇作家・演出家/悪魔のしるし)	2012-2013
	藤田貴大(劇作家・演出家/マームとジブシー)	2012-2013, 2014-2015
	あごうさとし(劇作家・演出家・俳優)	2013-2014
	杉原邦生(演出家・舞台美術家/KUNIO)	2013-2014, 2015-2016
	木ノ下裕一(監修・補綴/木ノ下歌舞伎)	2014-2015, 2016-2017
	村川拓也(演出家)	2014-2015, 2016-2017
	カゲヤマ气象台(劇作家・演出家/sons wo:)	2015-2016
	西尾佳織(劇作家・演出家/鳥公園)	2015-2016
	山本卓卓(劇作家・演出家・映像制作者/範宙遊泳)	2015-2016
	篠田千明(演出家・作家)	2016-2017
	舞踊	谷賢一(作家・演出家・翻訳家/DULL-COLORED POP)
三浦直之(劇作家・演出家/ロロ)		2016-2017
鈴木ユキオ(振付家/金魚)		2008-2009
きたまり(振付家/ダンスカンパニー-KIKIKIKIKIKI)		2009-2010
梅田宏明(振付家/S20)		2010-2011
KENTARO!!(振付家・ダンサー/東京ELECTROCK STAIRS)		2010-2011, 2012-2013, 2014-2015
岩淵貞太(振付家・ダンサー)		2013-2014
川村美紀子(ダンサー・振付家)		2013-2014, 2015-2016
関かおり(振付家・ダンサー/関かおりPUNCTUMUN)		2014-2015, 2016-2017
振子びじん(舞踏家)		2015-2016
パフォーマンス	スズキ拓朗(振付家・ダンサー/CHAiroiPLIN)	2016-2017
パフォーマンス	塚原悠也(演出家・パフォーマー/contact Gonzo)	2011-2012, 2013-2014

シニア・フェロー

ジャンル	対象者名	助成対象年度	
演劇	三浦基(演出家/地点)	2008-2010	
	岡田利規(演劇作家・小説家/チェルフィッチュ)	2009-2011	
	高山明(演出家/PortB)	2009-2011	
	松田正隆(劇作家・演出家/マレビトの会)	2009-2011	
	中野成樹(演出家/中野成樹+フランケンズ)	2010-2012	
	藤田康城(演出家/ARICA)	2010-2012	
	松井周(劇作家・演出家・俳優/サンプル)	2011-2013	
	タニノクロウ(劇作家・演出家/庭劇団ベニノ)	2012-2014	
	前田司郎(劇作家・演出家・俳優・映画監督/五反田団)	2013-2015	
	危口統之(劇作家・演出家/悪魔のしるし)	2014-2016	
	筒井潤(劇作家・演出家・俳優/dracom)	2014-2016	
	多田淳之介(演出家/東京デスロック)	2015-2017	
	山口茜(劇作家・演出家・プロデューサー/トリコ・Aプロデュース)	2016-2018	
	舞踊	矢内原美邦(振付家/ニプロール・ミクニヤナイハラプロジェクト・Off Nibroll)	2008-2010
		鈴木ユキオ(振付家/金魚)	2010-2012
		手塚夏子(振付家)	2010-2012
		山下残(振付家)	2011-2013
		山田うん(振付家・ダンサー/Co.山田うん)	2011-2013
		伊藤千枝(振付家・ダンサー/珍しいキノコ舞踊団)	2012-2014
黒田育世(振付家・ダンサー/BATIK)		2013-2015	
向雲太郎(舞踏家/デュ社)		2013-2015	
梅田宏明(振付家・ダンサー・ビジュアル・アーティスト/S20)		2014-2016	
森下真樹(振付家・演出家・ダンサー)		2015-2017	
パフォーマンス	東野祥子(演出家・振付家・ダンサー/ANTIBODIES Collective)	2016-2018	
	小野寺修二(演出家・振付家/デラシネラ)	2009-2011	
パフォーマンス	塚原悠也(演出家・パフォーマー/contact Gonzo)	2015-2017	

【別表⑫】 ヴィジティング・フェロー（2011年度～2016年度）

アーツ・マネジャー

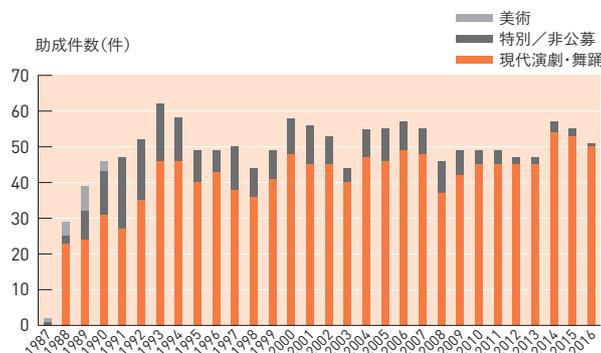
対象者名	出身国	対象年度
マックス＝フィリップ・アッセンブレンナー (Südpol 芸術監督、ドラマトゥルク)	ドイツ	2011
コ・ジュヨン (Korean Arts Management Service アドミニストレーター)	韓国	2011
コスミン・マノレスク (Gabriela Tudor Foundation エグゼクティブ・ディレクター)	ルーマニア	2011
トラジャル・ハレル (Movement Research Performance Journal 編集長、ダンス・キュレーター)	米国	2011
カディジャ・エル・ベナウイ (Art Moves Africa コーディネーター)	モロッコ	2012
ダグマー・ヴァルザー (SRG SSR シアター・エディター、ドラマトゥルク)	リヒテンシュタイン	2012
ホー・クアンチエン (TheatreWorks プロジェクト・マネジャー)	シンガポール	2012
エリザベッタ・ビザード (Dance Ireland プログラム・マネジャー)	イタリア	2012
ズヴォニミール・ドプロヴィッチ (Perforations アーティスティック・ディレクター)	クロアチア	2013
アンナ・レヴァノヴィッチ (Krakow Theatrical Reminiscences フェスティバル・ディレクター)	ポーランド	2013
ヘリー・ミナルティ (Jakarta Arts Council プログラム部門長)	インドネシア	2013
マリアナ・アルテガ (Centro de Cultura Digital ダンス・キュレーター)	メキシコ	2014
シンティア・エドゥル (Panorama Sur プログラム・ディレクター)	アルゼンチン	2015
マーティン・デネワル (Festival Theaterformen 芸術監督)	ルクセンブルク	2015
カティア・アルファラ (Onassis Cultural Centre 芸術監督)	ギリシャ	2016

アーティスト

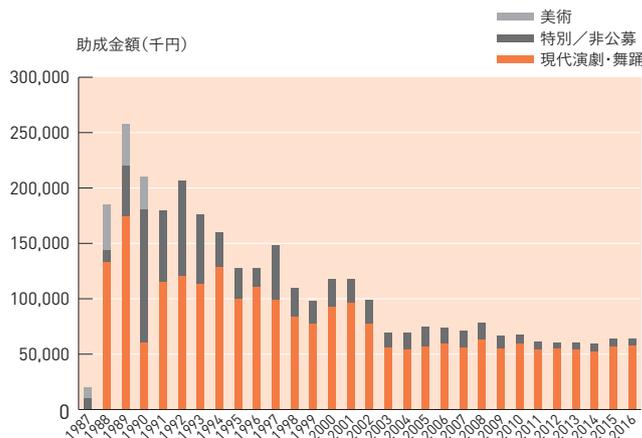
対象者名	出身国	対象年度
ジョティ・ドグラ (演出家、俳優)	インド	2013
イヤッド・ホサミ (演出家、作家)	米国	2014
イム・ジエ (振付家、ダンサー)	韓国	2014
アイサ・ホクソン (アーティスト)	フィリピン	2014
ワン・チョン (劇作家、演出家、薪伝実験劇団主宰)	中国	2015
ダヴィデ・ヴォンバク (振付家、ダンサー)	フランス	2015
ルイス・ガレー (パフォーマンス・アーティスト、ダンス・メーカー)	コロンビア	2016
JK・アニコチェ (Sipat Lawin Ensemble アーティスティック・ディレクター)	フィリピン	2016
ヤナ・トネス (演出家、THE AGENCY主宰)	ドイツ	2016
ピチェ・克蘭チェン (振付家、ダンサー)	タイ	2016

助成件数および助成金額（1987-2016年度）

年度	助成件数(件)		
	現代演劇・舞踊	特別/非公募	美術
1987		1	1
1988	23	2	4
1989	24	8	7
1990	31	12	3
1991	27	20	
1992	35	17	
1993	46	16	
1994	46	12	
1995	40	9	
1996	43	6	
1997	38	12	
1998	36	8	
1999	41	8	
2000	48	10	
2001	45	11	
2002	45	8	
2003	40	4	
2004	47	8	
2005	46	9	
2006	49	8	
2007	48	7	
2008	37	9	
2009	42	7	
2010	45	4	
2011	45	4	
2012	45	2	
2013	45	2	
2014	54	3	
2015	53	2	
2016	50	1	
累計	1214	230	15



年度	助成金額(千円)		
	現代演劇・舞踊	特別/非公募	美術
1987		10,000	10,000
1988	133,475	10,500	41,000
1989	174,681	45,226	37,863
1990	60,703	119,438	30,000
1991	115,280	64,466	
1992	120,973	85,617	
1993	113,250	62,500	
1994	128,644	31,350	
1995	100,000	27,831	
1996	110,500	17,394	
1997	99,000	49,430	
1998	84,174	25,212	
1999	78,000	20,433	
2000	92,600	25,208	
2001	96,100	22,140	
2002	77,500	21,000	
2003	56,000	13,000	
2004	54,420	14,800	
2005	57,125	17,600	
2006	59,969	14,100	
2007	56,022	15,100	
2008	63,500	14,900	
2009	55,450	11,000	
2010	59,300	8,400	
2011	54,100	6,707	
2012	55,100	4,900	
2013	53,900	6,500	
2014	52,134	7,621	
2015	57,016	6,500	
2016	57,596	6,000	
累計	2,376,512	784,873	118,863



*89年度の中止案件3件は除く
*美術助成は90年度にて終了

財産および収入の推移(1987-2016年度)

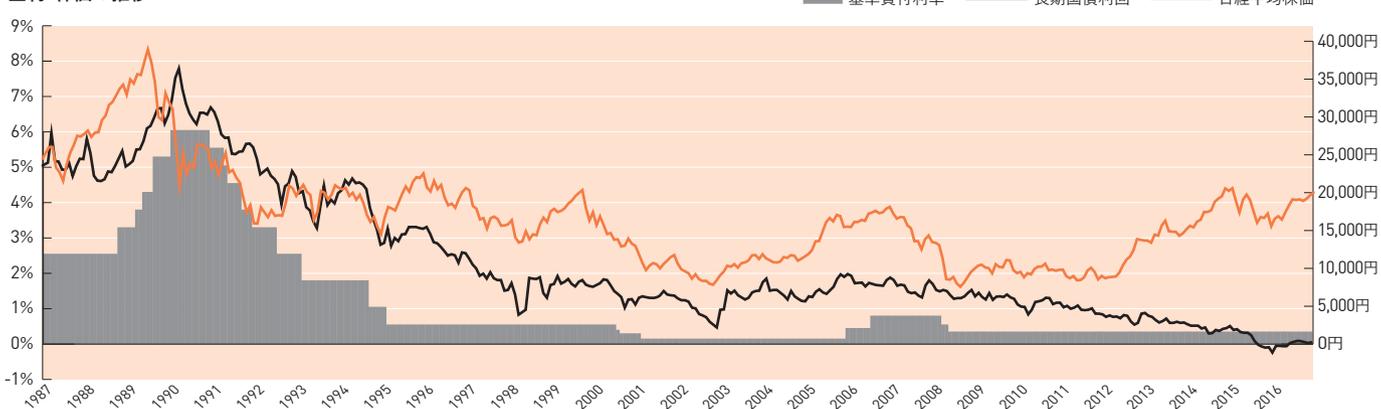
年度	正味財産額(円)	運用収入額	事業収入額	寄附金・助成金 収入額	収入合計(円)
1987	4,189,784,319	90,668,044		2,670,000,000	2,760,668,044
1988	9,309,604,931	256,163,575		3,785,000,000	4,041,163,575
1989	13,571,750,954	431,006,076		4,000,000,000	4,431,006,076
1990	10,906,909,686	568,778,789		100,103,000	668,881,789
1991	11,019,105,332	521,209,106		0	521,209,106
1992	11,068,145,516	436,579,482		0	436,579,482
1993	10,687,650,597	416,490,929		50,000,000	466,490,929
1994	10,583,469,005	253,457,621	26,942,995	100,000,000	380,400,616
1995	10,668,787,494	365,684,529	27,751,284	100,000,000	493,435,813
1996	10,705,991,696	346,243,950	27,751,284	100,500,000	474,495,234
1997	10,581,734,118	190,552,306	28,290,144	100,000,000	318,842,450
1998	10,477,816,709	110,788,278	28,290,144	100,000,000	239,078,422
1999	10,407,897,491	174,081,067	25,942,608	0	200,023,675
2000	10,434,452,856	188,125,517	5,985,000	150,000,000	344,110,517
2001	10,314,379,942	224,827,914	6,211,800	137,000,000	368,039,714
2002	10,198,385,708	208,060,767	9,031,350	67,500,000	284,592,117
2003	9,651,734,220	201,796,002	10,128,525	0	211,924,527
2004	9,630,996,738	211,981,012	11,465,595	3,950,548	227,397,155
2005	9,608,270,865	193,719,435	10,168,222	6,000,000	209,887,657
2006	9,582,893,121	185,532,689	10,639,957	7,000,000	203,172,646
2007	9,555,851,146	191,737,268	8,200,263	12,000,000	211,937,531
2008	9,530,536,595	185,743,743	11,766,757	13,000,000	210,510,500
2009	9,490,709,915	159,260,061	10,404,099	8,000,000	177,664,160
2010	9,407,785,345	118,502,107	8,920,167	2,000,000	129,422,274
2011	9,298,607,394	107,673,597	12,895,086	0	120,568,683
2012	9,499,062,191	109,134,218	13,358,638	5,000,000	127,492,856
2013	9,637,603,356	207,864,178	13,555,299	5,000,000	226,419,477
2014	10,153,968,495	211,548,999	14,229,506	10,804,000	236,582,505
2015	9,629,543,424	206,505,014	12,879,234	4,596,228	223,980,476
2016	9,778,380,988	185,962,314	16,171,534	4,000,000	206,133,848

運用収入／事業収入／寄附金・助成金収入の推移(単位:千円)

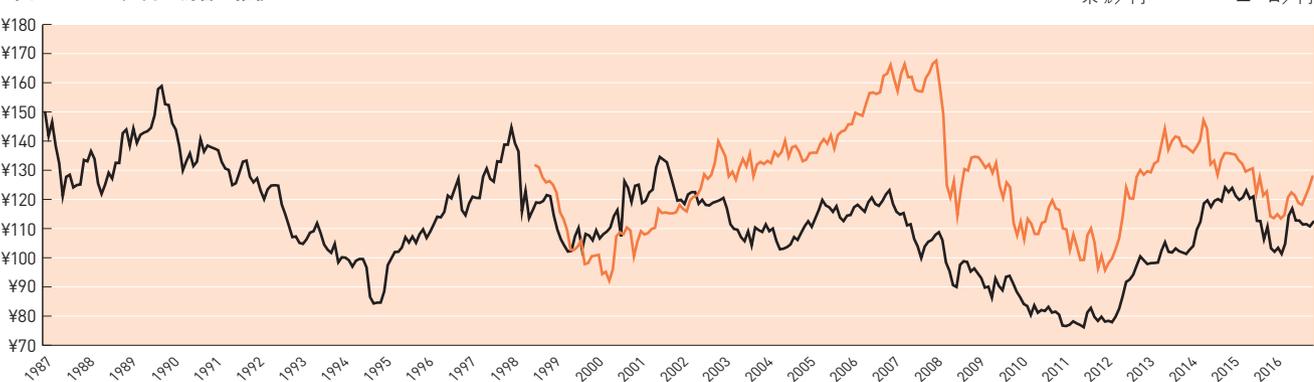


金融情勢の変遷(1987-2016年度)

金利・株価の推移



米ドル・ユーロ/円 為替の推移



評議員・理事・監事・顧問一覧(1987-2016年度/敬称略)

	氏名	在任年度		氏名	在任年度		氏名	在任年度	
評議員	青木 辰男	1987-1992	理事	堤 清二	1987-2013	監事	堤 麻子	1987-2002	
	江頭 啓輔	1987-1996		生野 重夫	1987-2002		中瀬 宏通	1987-1995	
	朝倉 撰	1987-2013		石川 六郎	1987-2005		原後 山治	1987-2008	
	阿部 良雄	1987-2004		河竹 登志夫	1987-2008		伊藤 醇	1996-1998, 2009-	
	生野 重夫	1987-1998		木田 宏	1987-2005		後藤 康男	1999-2002	
	石井 ふく子	1987-1996		紀国 憲一	1987-1992		生野 重夫	2003-2008	
	磯田 一郎	1987-1992		白洲 正子	1987-1998		三宅 弘	2009-	
	一柳 慧	1987-		高丘 季昭	1987-1995				
	伊夫伎 一雄	1987-2002		永井 道雄	1987-1998		顧問	八木 忠栄	2001-2003
	岩田 勝	1987-1994		羽倉 信也	1987-1998			河竹 登志夫	2009-2011
	沖 正一郎	1987-1994		平岩 外四	1987-1998	小林 陽太郎		2009-2015	
	荻 昌弘	1987-1988		山崎 富治	1987-2008	森 稔		2009-2011	
	小田島 雄志	1987-2009		本野 盛幸	1989-2000	山崎 富治		2009-2013	
	川上 浩	1987-2009		八木 忠栄	1993-2000	佐藤 俊一		2012-2013	
	川口 幹夫	1987-1998		片山 正夫	1997-	堤 猶二		2012-	
	紀国 憲一	1987-1998		絹村 和夫	1997-2008				
	小池 一子	1987-		佐野 文一郎	1997-2004				
	近藤 道生	1987-2009		安西 邦夫	1999-2006				
	三枝 成彰	1987-2000		川口 幹夫	1999-2004				
	佐野 文一郎	1987-1996		小林 陽太郎	1999-2008				
	高丘 季昭	1987-1993		森 稔	1999-2008				
	高橋 照明	1987-1994		堤 康二	2001-				
	團 伊玖磨	1987-2001		風間 英昭	2003-2007				
	遠山 一行	1987-2009		難波 英夫	2003-2010				
	中川 鋭之助	1987-1994		請川 隆良	2008-2010				
	中原 祐介	1987-1998		北條 慎治	2009-				
	野村 喬	1987-2002		藏原 正昭	2011-2013				
	増田 通二	1987-1990		中野 晴啓	2011-				
	水落 潔	1987-		松田 一彦	2011-2013				
	宮本 保孝	1987-1998		伊東 勇	2014-				
	山口 勝弘	1987-1998		堤 麻子	2014-				
	山口 一信	1987-1992		鍵岡 正謹	2014-				
	山崎 正和	1987-		渡邊 紀征	2014-				
	高橋 昌也	1989-2013							
	三枝 佐枝子	1991-2000		会長	絹村 和夫	2004-2008			
	荒井 豊	1993-1994							
	植木 浩	1993-		理事長	堤 清二	1987-2013			
	絹村 和夫	1993-2000			伊東 勇	2014-			
	西村 恭子	1993-1998							
	宇佐美 昭次	1995-2000		副理事長	絹村 和夫	1997-2003			
	後藤 茂	1995-1998			風間 英昭	2004-2007			
	佐治 俊彦	1995-2000			堤 麻子	2014-			
	杉山 駒吉	1995-1996							
	中村 雄二郎	1995-2004		常務理事	生野 重夫	1987-1996			
	高橋 康也	1997-2002			紀国 憲一	1987-1992			
	山田 晶義	1997-2000			八木 忠栄	1993-2000			
	犬養 康彦	1999-2000			堤 康二	2001-2002			
内野 儀	1999-		片山 正夫	2003-					
坂本 春生	1999-2000								
沼野 充義	1999-								
松岡 和子	1999-								
三島 憲一	1999-2009								
柳瀬 治	1999-2000								
渡邊 紀征	1999-2000								
堤 康二	2000								
伊東 勇	2001-2012								
林野 宏	2001-								
堤 麻子	2003-2013								
石井 達朗	2005-								
堤 たか雄	2012-								
佐藤 俊一	2014-								

堤清二氏(創立者)からの寄附金

年度	金額(円)
1987	2,670,000,000
1988	3,785,000,000
1989	4,000,000,000
1990	100,103,000
1991	
1992	
1993	50,000,000
1994	100,000,000
合計	10,705,103,000

寄附者・助成元一覧(1987-2016年度)

年度	寄附者・助成元(敬称略/団体名は当時のもの)
1996	吉村光弘
2000	(株)クレディセゾン、(株)西武百貨店、(株)西友、 (株)西洋フードシステムズ、(株)吉野家ディー・アンド・シー
2001	(株)クレディセゾン、(株)西武百貨店、(株)西友、 (株)西洋フードシステムズ、(株)吉野家ディー・アンド・シー、 (株)セゾン情報システムズ、生野重夫
2002	(株)クレディセゾン、(株)西友、(株)西洋フードシステムズ、 (株)セゾン情報システムズ、(株)吉野家ディー・アンド・シー
2004	フランス・ダンス・03フェスティバル (主催:フランス外務省AFFA、フランス大使館等) ※2003年に日本で開催されたフェスティバルの余剰金を同フェスティバルから の指定により寄附金として受入、2005年度から2007年度までの期間限定 で開設された「日仏舞踊交流プログラム」に充当
2005	(株)クレディセゾン (財)アサヒビール芸術文化財団
2006	(株)クレディセゾン (財)アサヒビール芸術文化財団 (財)東京都歴史文化財団*
2007	(株)クレディセゾン (財)アサヒビール芸術文化財団 EU・ジャパンフェスト日本委員会 ※共同助成分担金として(助成プログラム「国際プロジェクト支援」に充当)
2008	(株)クレディセゾン EU・ジャパンフェスト日本委員会 ※共同助成分担金として(助成プログラム「国際プロジェクト支援」に充当)
2009	EU・ジャパンフェスト日本委員会 ※共同助成分担金として(助成プログラム「国際プロジェクト支援」に充当)
2010	一柳慧 EU・ジャパンフェスト日本委員会 ※共同助成分担金として(助成プログラム「国際プロジェクト支援」に充当)
2012	文化庁*
2013	文化庁*
2014	文化庁*
2015	文化庁*
2016	文化庁*

計3個人、11団体

*前年度に実施された事業に対する助成



事業概要

PROGRAM OUTLINE

助成事業

I. 芸術家への直接支援

1. 現代演劇・舞踊助成 — セゾン・フェロー

演劇界・舞踊界での活躍が期待される劇作家、演出家、または振付家の創造活動を支援対象としたプログラム。フェローに選ばされると、自らが主体となって行う創造活動に当財団からの助成金を充当することができるほか、必要に応じて森下スタジオの稽古場・ゲストルームや情報の提供が受けられる。原則として、ジュニア・フェローは2年間、シニア・フェローは3年間にわたって助成を行うが、継続の可否に関しては毎年見直す。対象は、下記の条件を満たしている劇作家、演出家、または振付家。

ジュニア・フェロー

- ・日本に活動の拠点を置いている
 - ・申請時点で35歳以下である
 - ・申請時点で過去3作品以上の公演実績がある
- ※過去のジュニア・フェローでも、条件を満たしていれば計3回まで助成可能。

シニア・フェロー

- ・日本に活動の拠点を置いている
- ・原則申請時点で45歳以下である
- ・申請時点で過去3作品以上の公演実績がある
- ・以下のいずれかの要件を満たしている
 - ・芸術団体の主宰者としてセゾン文化財団の助成歴がある
 - ・戯曲賞／演出家賞／振付家賞等の受賞歴がある
 - ・海外の著名なフェスティバルのメイン部門／劇場から招聘歴がある

※ただし、過去に当財団の「芸術創造活動II」プログラムで支援を受けた芸術団体の主宰者は対象外。

2. 現代演劇・舞踊助成 — サバティカル(休暇・充電)

日本を拠点に活動する劇作、演出、振付の専門家として10年以上の活動歴を有し、1ヶ月以上の海外渡航を希望する個人に対し、100万円を上限に、渡航費用の一部に対し助成金を交付。

申請時点までに継続的に作品を発表・制作し、一定の評価を受けているアーティストで、2016年度中にサバティカル(休暇・充電)期間を設け、海外の文化や芸術などに触れながら、これまでの活動を振り返り、さらに今後の展開のヒントを得たいと考えている者を優先する。

II. パートナーシップ・プログラム

「パートナーシップ・プログラム」では、芸術創造を支える機関・事業や、国際的な芸術活動を展開する個人／団体を当財団のパートナーとし、日本の舞台芸術の活性化や国際的な協業の推進を目指している。

1. 現代演劇・舞踊助成 — 創造環境イノベーション

現代演劇・舞踊界が現在抱えている問題点を明らかにし、その創造的解決を目指した新規事業に対する助成プログラム。

課題解決:2016年度テーマを「舞台芸術の観客拡大策」とし、観客拡大のための新しい手法で、効果が客観的に検証でき、普及可能な事業を対象とする。

スタートアップ:現代演劇・舞踊界に変化をもたらすことが期待できる新規事業を立ち上げから支援。

2. 現代演劇・舞踊助成 — 国際プロジェクト支援

演劇・舞踊の国際交流において特に重要な意義をもつと思われる複数年にわたる国際プロジェクトへの支援を目的とした助成プログラム。海外のパートナーとの十分な相互理解に基づき、発展的に展開していくプロジェクトを重視。リサーチや、ワークショップなどプロジェクトの準備段階から、申請することが可能。企画経費の一部に対して助成金を交付。希望者には森下スタジオ、ゲストルームを提供。3年を上限として助成を行う。対象となるのは、日本と海外双方に事業のパートナーが決定しており、申請時点で国際交流関係の事業の実績を持つ個人／団体。

芸術交流活動【非公募】

海外の非営利団体との継続的なパートナーシップに基づいた芸術創造活動、日本文化紹介事業等に対して資金を提供する。

自主製作事業・共催事業

Ⅲ. フライト・グラント

海外招聘に伴う渡航費が緊急に必要な場合の支援プログラム。

自主製作事業としてヴィジティング・フェロー(プログラム)、セミナー、ワークショップ、シンポジウムの主催、ニュースレターの刊行などを行う。

共催事業では、日本の舞台芸術界を活性化させるために非営利団体等と協力して事業を実施する。

GRANT PROGRAMS

I. Direct Support to Artists**1. Contemporary Theater and Dance:**
- *Saison Fellows*

This program supports creative activities and projects by promising playwrights, directors, and choreographers. Fellows will be awarded grants that they may spend on their creative work, priority use of the Foundation's rehearsal and residence facilities in Tokyo (Morishita Studio), and may receive information services that are necessary to their work. Junior Fellows (artists that are thirty-five years old or younger) will receive ¥1,000,000 for two years in principle; Senior Fellows (artists that are forty-five years old or younger) will receive grants (Range of grants given in this program in 2016: ¥2,500,000 - ¥3,000,000) for three years.

2. Sabbatical Program

This program gives partial support to individuals who wish to travel abroad to come into contact with inter-cultural experiences by awarding fellowships up to ¥1,000,000. Applicants must have (a) a base in Japan; (b) more than ten years of professional working experience in one of the following occupations: playwrighting, directing, or choreography; and (c) plan to travel abroad for more than one month.

Priority will be given to artists who have been creating and presenting works continuously until the time of applying to this program, have an established reputation in their respective fields, and are considering to take a sabbatical leave during fiscal year 2016 to review their past activities and receive inspiration for future activities through inter-cultural experiences.

II. Partnership Programs**1. Contemporary Theater and Dance:**
- *Creative Environment Innovation Program*

Grants and studio/guestroom awards are given to individuals and organizations conducting projects aimed to improve the infrastructure of contemporary performing arts in Japan. The Saison Foundation established two new categories within this program from 2016, which are Support for Problem-Solving Projects (Major issue for 2016: Audience Expansion Solutions for the Performing Arts) and Support for Startup Projects.

2. Contemporary Theater and Dance:
- *International Projects Support Program*

A grant program that awards long-term grants to international exchange projects in which contemporary Japanese theater or dance artists/companies are involved. Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request. Those eligible to apply to this program are (a) individuals or companies based in Japan or have partners in Japan, and (b) with a history of artistic achievements in the area of intercultural exchange activities at the time of application.

**Artistic Exchange Project Program
(designated fund program)**

This designated fund program supports activities by not-for-profit organizations outside of Japan with a continuous partnership with the Saison Foundation, including creative work by artists/companies, projects with the aim to familiarize Japanese culture to other nations, and fellowship programs.

Note: Applications to this program are not publicly invited.

III. Flight Grant

This outbound (from Japan to overseas) program supports those in immediate need of travel funds.

Apart from making grants, The Saison Foundation sponsors and organizes a Visiting Fellows Program, seminars, workshops, and symposia, and publishes a newsletter.

In order to support and enhance the creative process within contemporary theater and dance and to stimulate the performing arts scene in Japan, The Saison Foundation also organizes projects by working with artists/companies, not-for-profit organizations, and other groups under its co-sponsorship program.

常務理事
片山正夫

いまからちょうど30年前(1987年)の7月13日、セゾン文化財団は文化庁からの許可を得て設立された。まだからっぽの事務所の鍵を開け、関連する会社から譲り受けた中古の什器を運び入れて仕事を始めたのが、ついこのあいだのことのように感じられる。

しかし当時から今日までの、現代舞台芸術を取り巻く環境の変化を辿ってみると、逆に30年ははるか昔に感じられる。つまりそれほどの変わりよなのだ。

たとえば支援機関についてみると、芸術文化振興基金も、地域創造も、企業メセナ協議会も、アーツカウンシルとよばれる機構も、どれも30年前には存在しなかった。民間芸術助成財団の連合体である芸術文化助成財団協議会加盟23団体のうち、当時すでにあったのはわずか4団体だけである。現在1000億円を超える文化庁の年間予算も、当時まだ400億円程度に過ぎず、現在あるような芸術団体への大型助成や、劇場・音楽堂に対する助成も行われていなかった。

制度面に目を向けると、文化芸術振興基本法も、劇場・音楽堂等の活性化に関する法律(劇場法)も30年前には制定されていなかったし、特定非営利活動促進法(NPO法)もなかった。われわれのような財団法人の設立は、民法に則った許可制で、いまのような寄附税制の優遇措置は、多くの民間団体にとって夢のまた夢であった。

文化施設も同様だ。現在全国津々浦々にある公共ホールも、その大半はまだ存在していないし、新国立劇場もなかった。アーティストのためのレジデンス施設ができて始めるのも、ようやく90年代になってからだ。

教育の世界では、30年前、大学で実作を伴った演劇・舞踊教育がおこなわれることは、まだほとんどなかった。演劇教育とはすなわちテキストの講読であり、舞踊教育は体育の範疇だったのである。アーツ・マネジメントにいたっては、言葉さえ誰も聞いたことがなかったほどだ。

これだけ並べてみると、制度や環境の整備に対しては、各方面で相当の努力がなされ、資金もそれなりに投入されてきたことがわかる。しかし、ではこれによって芸術家の創造活動がどれだけやりやすくなったのか、あるいは一般の市民生活に舞台芸術がどれほど浸透したのかと問われれば、進展した面はあるにせよ、全体的にみれば不満足な点も多い。

この間、何が達せられ、何が達せられなかったのか。およそ文化分野で政策を考えるにあたっては、このように30年程度の時間軸でものを見る視点をいつももってみたいと改めて思う。当財団においても、もちろんそれは同様である。30周年をその良い契機にしたい。

一方で、本報告書巻頭の鼎談Iでは、30年というのはひとつのサイクルが巡る時間だということが語られている。その意味では当財団も、創立者・堤清二の精神という原点に立ち還り、それをいま一度見つめ直す時期だといえる。この鼎談からは、在りし日の言葉や行動を通じて、堤氏の価値観や考え方が鮮明に伝わってくる。芸術家に寄り添い、かれらの自由を何より重んじた人。既成の概念にとらわれずリベラルに、そして批判的にものを見た人。いつも時代の先を見つめ、新しい何かを探していた人。

われわれのような財団には、決して変えるべきでない本質と、時流に応じて変化していくべき部分とがある。しかしその両者は、どこからどこまでは変えてよいが、どこからは変えてはならないという関係には必ずしも立っていない。不易流行という言葉が表すように、絶えず更新することによってこそ、本質が保たれるのだ。堤氏の精神はそう主張している。

ここまで30年、これほど変革を繰り返してきた助成財団も珍しいだろう。だがこの財団には、これからもつねに変革が要請される。それが創立者の精神だからだ。鼎談IIでは、いままでやってきたことはアーツカウンシルや文化庁にまかせて、大きな変革を促す「次の一手」を、という期待の言葉も聞かれた。もとより簡単なことではないけれど、次の30年に向けた愛情あふれる叱咤激励と受け止めたい。

さて、2016年度は現代演劇・舞踊分野での諸活動に対して、51件の助成を行った。助成金の総額は、前年に比べて微増して6359万円となった。

文化庁の補助事業である「セゾン・アーティスト・インレジデンス」では、海外からのヴィジティング・フェローを5名招聘した。このほか、共催事業1件、協力事業2件を催行し、ニュースレター「viewpoint」を4回発行した。

森下スタジオは、主としてセゾン・フェローの作品製作や、助成対象事業のために使用されているが、空き期間は過去の助成対象者も含めた方々に開放しており、本年度もフル稼働であった。4つのスタジオの年間利用日数はのべ1389日であったが、これは稼働率(9日間の休館日を除いて計算)でいうと97%を超えており、すでにキャパシティの上限に近いといえる。ゲストルームについても、のべ537日の利用があった。

助成プログラムについては、一部改訂を行った。パートナーシップ・プログラムのうち、これまでの「創造環境整備」を「創造環境イノベーション」と改称し、課題解決型プログラムの色彩をより明確にしたのである。

「創造環境イノベーション」には、「課題解決」と「スタートアップ」の2つのカテゴリーを設けた。「課題解決」では、当財団が課題となるテーマを設定する。申請者には、新しいアイデアによる仮説を立て、テーマの課題に対応した施策として提示してもらう。もちろん、採択された場合、実際に助成金を使って実行に移されることが前提である。その際重要なのは、仮説を客観的に検証できるよう、あらかじめ評価方法も計画に含めて提案してもらう点だ。これはうまく施策が機能したとき、他にも普及させていくことを最終的なゴールと考えているからである。

初年度となる本年度のテーマは「舞台芸術の観客拡大策」とした。前年度に当財団主催で開催した同テーマの研究会の成果を、助成事業に引き継ぎ、具現化していきたいという考えからである。実際に、採択された2件は、研究会の参加者からの提案であった。

もう一方のカテゴリーである「スタートアップ」は、現代演劇・舞踊の世界に何らかのインパクトをもたらすことが期待できる団体や事業を、その立ち上げ時から支援するものである。問題意識と実行プランが明確な取り組みに対してシードマネーを提供していくことを意図したのだが、「課題解決」の自由課題バージョンという側面もある。鼎談のなかで、佐東範一氏がジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク(JCDN)について、「セゾン文化財団と一緒に立ち上げたという気持ち」と語ってくれているが、そう感じてもらえるくらいのコミットメントを、このプログラムでも志向していきたい。

「創造環境イノベーション」は性格上、3年程度にわたる支援を想定しているが、実際の助成期間は毎年の進捗を確認しながら判断していく予定である。

この改訂により、これまで「創造環境整備」で対象としていた、俳優やダンサーのためのワークショップ等のほとんどは、プログラムの趣旨からはずれてしまうことになった。ただ今後も森下スタジオの空き期間を活用することで、可能な限り会場提供の要請には応えていきたいと思う。

本年度の助成先の選考に際しては、下記の方々にご協力いただきました。有益なご示唆を頂戴しましたことに、深く感謝申し上げます。

石井達朗(舞踊評論家、当財団評議員)

稲田奈緒美(舞踊評論家)

内田洋一(日本経済新聞社 文化部 編集委員)

高橋宏幸(演劇批評家)

徳永京子(演劇ジャーナリスト)

武藤大祐(舞踊評論家、群馬県立女子大学准教授)

(敬称略・肩書は2015年12月当時のもの)

Masao Katayama
Managing Director

The Saison Foundation was established 30 years ago, on July 13, 1987, after receiving the approval of the Agency for Cultural Affairs. I feel as if it was yesterday that I opened the key of the office that was still empty and brought in second-hand furniture that our associated companies gave us to start working there.

However, when I look back on the change in the environment of contemporary performing arts since then, 30 years feels far behind. The change is that significant.

For example, grant-making institutions such as Japan Arts Council, Japan Foundation for Regional Art-Activities, Association for Corporate Support of the Arts or structures that are now called arts councils did not exist at all 30 years ago. In the 23 member organizations of the Alliance of Arts and Cultural Foundations, an alliance of foundations in the private sector that support the arts, only four existed at that time. The annual budget of the Agency for Cultural Affairs is over 100 billion yen now, but it was about 40 billion at that time, and they did neither offer large-scale support for arts organizations nor support theaters and music halls as they do now.

In terms of system, neither the Basic Act for the Promotion of Culture and the Arts nor the Act on the Vitalization of Theaters and Halls (Theater Law) had been established 30 years ago, and the Act on Promotion of Specified Non-profit Activities (NPO Law) did not exist either. Establishing a foundation like us required authorization based on the civil law, and it was an undreamed-of luxury for most organizations in the private sector to imagine a preferential tax system for donation like the one that exists now.

The same can be said of cultural facilities. More than the half of the public halls that are now in every part of the country did not exist, and the New National Theatre, Tokyo had not been built either. Facilities for artist-in-residence started to be established only in the 90s.

In the world of education, 30 years ago, it was hard to find a theater or dance program involving creation in the curricula of universities. Theater education was considered indistinguishable from text reading, and dance education was in the category of athletics. Let alone arts management — nobody had even heard of the term.

These facts speak for considerable effort and a certain amount of investment that have been made in various sectors for improving the system and environment. However, it cannot really be said that

artists have been creating with much less stress than before or performing arts have been accepted by a wider range of people than before. Though some developments have been made, we still find a lot of insufficiencies in the overall situation.

What has been, and has not been, achieved in the 30 years? I think that I have to remind myself of the importance of taking a long-term, for instance a 30-year, view on the situation when it comes to cultural policy. Needless to say, that is true also for The Saison Foundation. I would like to take the 30th anniversary as an opportunity for raising that awareness.

On the other hand, in Discussion I, which is printed in Japanese at the beginning of this annual report, it is said that 30 years is a length of time in which a cycle is completed. In that sense, now should be the time for us to go back to our starting point, namely the spirit of our late founder, Seiji Tsutsumi, and contemplate on it again. The words and acts by Mr. Tsutsumi mentioned in this discussion by those who used to work with him vividly describe his values and philosophy. He was a person who stood beside artists and valued their freedom above everything else. A person free from preconceived ideas and saw things from liberal and critical perspectives. A person who always looked ahead of the times and searched for something new.

A foundation like ours has an essence that should never be altered and elements that should be altered in accordance to the current of the times. Yet these two do not necessarily stand in a relationship that controls how alternations may or may not be made. The principle of fluidity and immutability in haiku tells us that essence of things may be maintained only by renewing them constantly, which is what Mr. Tsutsumi's spirit encourages us to do.

I suppose that not many grant-making foundations have gone through reforms over and over again over a long period of time as we did throughout the 30 years, and we will always be required of further reforms, because that is the spirit of the founder. In Discussion II, he also expressed his expectation that we would take "a step forward" for a significant change letting arts councils and the Agency for Cultural Affairs do what we have already done. That is not easy, but I would like to receive the words as his affectionate and strict encouragement for another 30 years to come.

We awarded grants to 51 projects and activities in the fields of contemporary theater and dance in 2016. The total amount of the grants was 63,590,000 yen, which was slightly larger than the previous year.

In “Saison Artist in Residence,” our project supported by the Agency for Cultural Affairs, we invited five Visiting Fellows from overseas. We also had one co-sponsorship program, two cooperative programs, and published four issues of our newsletter “viewpoint.” Morishita Studio has been used mainly for creations by Saison Fellows and projects that we support, and when it is vacant, we offer it to our grant recipients in the past too. It operated at full capacity: the four studios were used for 1,389 days in total in 2016, which is over 97% of the capacity (excluding nine days from the calendar year on which the studio is closed). The guest rooms were also used for a total of 537 days.

We revised some parts of the grant programs: in the Partnership Programs, the “Creative Environment Improvement Program” was renamed “Creative Environment Innovation Program” and made it clearer that the program is for finding solutions to problems.

We newly installed two categories, “Support for Problem-Solving Projects” and “Support for Startup Projects,” in the “Creative Environment Innovation Program.” We proposed a theme for the “Support for Problem-Solving Projects,” to which applicants formulate a hypothesis with new ideas and present it as a solution to the theme. Of course, if selected, the plan has to be actually executed with our grant, where it is important that an evaluation methodology has also been incorporated into the plan so that the hypothesis can be objectively evaluated, because our ultimate goal is to spread the plan to other practitioners as well if it is proven to be effective.

The theme for the first year was “Audience Expansion Solutions” because we wanted to elaborate on and materialize, in this year’s grant program, the results of a series of seminars on the same theme that we organized the previous year. Indeed, two of the proposals were selected from participants of the seminars.

The other category, “Support for Startup Projects,” is for supporting groups or projects that are expected to make some kind of impact on the world of contemporary theater and dance at their startup. The intention is to provide seed money to projects that clearly show a high level of awareness and efficient work plans; the program can be said to be a freer

version of “Support for Problem-Solving Projects” . In one of the Discussions, Mr. Norikazu Sato said about Japan Contemporary Dance Network (JCDN) that he feels “as if we established it together with The Saison Foundation.” We aim to make commitments that are strong enough to create that feeling.

Support over about three years might be appropriate for “Creative Environment Innovation Program” due to its objectives, and we plan to decide on the grant-giving terms looking at the progress of the activities each year.

This reform has resulted in deviation of the program from support for most of workshop projects for performers and dancers that the “Creative Environment Improvement Program” would have supported. However, we will try to meet, as much as possible, demands for venues by using the vacant periods of Morishita Studio.

We would like to thank the following persons who assisted us during the selection process for their helpful instructions:

Tatsuro Ishii (Dance Critic / Trustee of The Saison Foundation)

Naomi Inata (Dance Critic)

Yoichi Uchida (Senior Staff Writer, Cultural News Department, NIKKEI INC.)

Hiroyuki Takahashi (Theater Critic)

Kyoko Tokunaga (Theater Journalist)

Daisuke Muto (Dance Critic / Associate Professor, Gunma Prefectural Women’s University)

(Titles are of December 2015)



助成事業

GRANT PROGRAMS

1. 現代演劇・舞踊助成 ― セゾン・フェロー

このプログラムは、対象となる劇作家／演出家／振付家が主宰または所属する劇団やダンスカンパニー以外の芸術活動にも助成金を使用できることが特徴である。公演などの事業はもちろん、リサーチ、芸術家としての自己研鑽のための勉強や研修などにも使用することで、芸術家としての幅を広げてもらうことを意図している。助成金の交付の他、森下スタジオおよびゲストルームの提供による支援を行っている。

2016年度はジュニア・フェローで女性の申請者が増え、3分の1以上を占めた。舞踊では、海外でキャリアを積んだ振付家が日本での活動転換、拠点を探していることがうかがわれた。

ジュニア・フェロー

35歳以下を対象とするジュニア・フェローでは、演劇分野から木ノ下裕一、篠田千明、谷賢一、三浦直之、村川拓也、舞踊分野からスズキ拓朗、関かおりの7名が選抜された。木ノ下、村川、関は2014-2015年度のジュニア・フェローに引き続いての助成となる。

篠田千明は演出家、作家として2005年より劇団「快快」創立メンバーとして活動を開始。演出した快快の作品が、2010年にスイスの若手劇団の登竜門「ZKB Patronage Prize」を、日本のカンパニーとして初めて受賞。「快快」退団後、2012年よりバンコクでソロ活動を開始。地域に染みついた物語を可視化し、舞台上に再配置することで舞台の枠組みやテキストの成立の過程を問う活動を展開している。劇場作品では拠点や時間を共有していないチームによる集団制作の可能性、21世紀的な集団のあり方を模索している。2016年度は、KYOTO EXPERIMENTで回遊形式の作品『ZOO』を発表。また数年間取り組んできた作品『It's my turn』を終了し、2017年度から新しい段階に進む。

谷賢一は2005年、「DULL-COLORED POP」を旗揚げ。2016年5月の公演以降、活動を休止しているが、劇作、演出の他、翻訳やテキストレジも手がけ、商業演劇の演出など幅広く活躍している。2013年、『最後の精神分析』（マーク・セント・ジャーメイン作）の翻訳、演出を行い、小田島雄志翻訳戯曲賞、文化庁芸術選奨を受賞。2016年度は公立劇場、地人会等、複数の委嘱公演を行った。また、かねてより温めていた、出身地である福島をテーマとした戯曲執筆に向けて、リサーチを開始した。1950年代に日本の原子力政策がスタートしてから、2011年に福島第一原子力発電所事故を迎えるまでの長編3部作を構想している。2017年度は同戯曲、第1部のリーディング上演を予定。

三浦直之は劇作家、演出家で2009年、「ロロ」を立ち上げ。漫画、アニメ、小説、音楽、映画など様々なジャンルをパッチワークのように紡ぎ合わせ、様々な「出会い」の瞬間を物語化

し、きめ細やかな感情と長い時間軸を内包する壮大さを同時に導き出す作品が特徴だ。2015年から高校演劇向けの作品創作「いつ高シリーズ」を始めた。また2016年度は商業演劇の作・演出も行った。2017年度は「いつ高シリーズ」の小説も執筆、出版し、劇団公演では初の音楽劇を上演、児童演劇の脚本執筆も予定している。

スズキ拓朗は振付家で、2007年、「CHAiroiPLIN」を結成。「質の高い身体性」と「軸のある物語」を掛け合わせ、年齢層を問わず、鑑賞経験のない人でも親しみやすい作品を作っている。名作をダンスにする企画「踊る戯曲」等を展開している。2014年、若手演出家コンクール2013最優秀賞、2015年、日本ダンスフォーラム(JaDaFo)賞、舞踊批評家協会新人賞を受賞。2016年度はカンパニー公演の他、作品を委嘱される機会も多かった。2017年度も「踊る戯曲」、日韓共同プロジェクト等、多彩な活動が予定されている。

またジュニア・フェロー8名が本年度で2年間の助成対象期間終了となった。

カゲヤマ气象台は、2015年度の『水』では劇団外部から演出家を招き、「シティ」シリーズにおいては、特に2016年度の『シティII』で新たな創作手法に取り組むなどの試みが見られた。2017年度はシリーズ最終作を発表後、新たなテーマの作品を予定している。出身地である浜松でも2年間を通じて2回の劇場公演、ツアーパフォーマンスの他、ワークショップやワークインプログレスを開催した。音楽、映画など、様々なジャンルでインディペンデントに活動する人々とも交流しており、今後も活動を継続していく。

神里雄大は1回目のジュニア・フェロー採択時からの目標であったヨーロッパでの公演が、3回目のジュニア・フェローを終える2016年度に、2つの主要フェスティバルからの招聘という形で実現し、大きな成果をあげた。10月からは文化庁の海外研修制度によってブエノスアイレスに滞在中で、様々なことを日々経験、考察しているようだ。帰国後の2017年秋にはKYOTO EXPERIMENTでの新作発表が決まっており、この作品も含め、今後、どのような作品が生まれてくるのか、楽しみにしている。

柴幸男は、2016年度は劇場での公演を行わず、小豆島や豊橋での滞在制作・上演、多摩美術大学での学生との創作・上演、2017年度の公演のためのリサーチ等を行った。劇団で自主公演の必要性を共有し、2018年度に実施を予定している。今年度、時間と助成金を費やしたりリサーチの成果となる作品は2017年度のフェスティバル/トーキョーと2018年の台北芸術祭での上演が決まっている。劇団の新作公演と合わせて楽しみに待ちたい。

杉原邦生は、木ノ下歌舞伎での演出家としての活躍が目

立ったが、2015年度には自身の団体「KUNIO」の公演、2016年度には公立劇場からの依頼による演出、2年間にわたっての歌舞伎座での演出助手や構成など、幅広く精力的に活動した。様々な仕事から得られる経験、出会いが自身の創作にも生きているようだ。2017年度は、5月の公演で木ノ下歌舞伎から離れ、KUNIOの活動に集中することになる。『夏の夜の夢』に続いて『グリークス』の上演が予定されており、代表作となるような作品が生まれることを期待している。

西尾佳織は2年間にわたって多彩で数多くの活動を行い、日本演出家協会の若手演出家コンクール最優秀賞も受賞した。2016年度は劇団の新作として太田省吾の戯曲、旧約聖書「ヨブ記」を題材にした作品の2作品、1人芝居を1作品発表し、ドイツのフェスティバル、テアターフォルメンのフェロシッププログラムにも参加した。自分の創作を対象化して捉え直す期間ともなったことで創作面での新たな関心も生まれているとのこと。時間をかけて丁寧に取り組み、優れた作品に結実することを期待する。

山本卓卓は、海外での活動を精力的に行い、多くを学んだ2年間となった。『幼女X』は複数の国で上演し、代表作と呼ぶにふさわしい作品になった。またアジアのカンパニーとの共同創作を通じて創作の根本に関わる変化もあったようだ。国内においても『となり街の知らない踊り子』や演劇系大学共同制作での作・演出等で高い評価を得た。今後も海外での活動に関心が高いようだが、この2年間の大きな成長、変化からさらなる飛躍が期待できそうだ。

川村美紀子は、2016年の前半は「横浜ダンスコレクション EX2015」での「若手振付家のための在日フランス大使館賞」受賞によりフランスで研修を行った。早くから振付家、ダンサーとして頭角を現し、注目されてめまぐるしく活躍してきたが、これまでを振り返る機会ともなったようだ。研修期間中は複数の振付センターを拠点として活動し、何度か上演も行った。新作の創作、発表も行い、帰国後、横浜ダンスコレクションにて日本初演として上演した。新たな作風が見られ、これからの変化をまだまだ予想させるものだった。

振子びじんは2016年度は、韓国、光州のASIA CULTURE CENTERでの「Our Masters 土方巽」のキュレーションが大きな仕事だった。2017年2月のTPAM(国際舞台芸術ミーティング in 横浜)では報告会も行われ、日本の観客との共有の機会をもつことができた。それ以外にも数多くのリサーチを行ったことが、今後への蓄積となったようだ。今後は作品の上演に限定しない形で、舞踊について考察し、アウトプットを行う考えのようだ。どのような活動が展開されるのか、注視していきたい。

シニア・フェロー

原則45歳以下を対象とするシニア・フェローでは、演出家、振付家、ダンサーでANTIBODIES Collectiveを主宰する**東野祥子**、劇作家・演出家・プロデューサーでトリコ・Aプロデュースとサファリ・Pを主宰する**山口茜**が新規に採択された。双方とも、京都を拠点に日本各地で活動を行っている。

東野祥子は、芸術創造活動プログラム(2007 -2009年)を経て今年度よりシニア・フェローになった。2015年に活動拠点を東京から京都に移し、「ANTIBODIES Collective」をサウンド・パフォーマンス・アーティストのカジワラトシオと設立した。様々な境界がダイナミックに関わり合う「インターディシプリナリー」なコラボレーションの形態を探求、発展させていくことを目的に様々な分野のアーティストと共に活動している。初年度は、屋外公演やライブハウス、講堂、庭園などで、アーティストと共に観客が会場内を移動しながら作品を楽しむスケール感のある回遊型のパフォーマンスを上演した。家族連れ、カップル、ミュージシャンなど演劇、舞踊分野のみならず幅広い層の観客を動員した。また、市民向けワークショップも多くの地域で実施し新領域を開拓している。

山口茜は、2003年のOMS戯曲賞をはじめ、若手演出家コンクール最優秀賞、文化庁芸術祭新人賞、利賀演劇人コンクール優秀賞演出家賞一席など多くの賞を受賞している。2007年には文化庁新進芸術家海外留学制度研修員としてフィンランドに2年間滞在、国立劇場などで研修を深めた。京都を拠点に活動する実力派の演劇人として、その牽引力、および今後の作品の展開を期待され助成が決定した。京都在住ということもあり、東京での公演数は少ない山口だが今年度は『悪童日記』(原作:アゴタ・クリストフ)での高評価で東京でも観客を増やした。また、2017年度発表の新作についても今年度からオーディション、リサーチ、稽古を開始しており、時間をかけて丁寧に創作に取り組んでいる。助成期間の3年間で本人が目標に掲げた、制作体制の強化、作品創作環境の整備などを実現し、コンスタントに良い作品を京都のみならず各地で見せてくれることを期待している。

本年度で助成期間が終了したのは、振付家、ダンサー、ビジュアル・アーティストの梅田宏明、劇作家、演出家、俳優の筒井潤、劇作家、演出家の危口統之の3名である。

梅田宏明は、2010年-2011年のジュニア・フェロー、2012年の国際プロジェクト支援を経て、2014年よりシニア・フェローで3年間の継続支援を受けた。既に高い評価を得ているヨーロッパを中心に精力的に活動をした。新作委嘱公演、ダンスフェスティバルへの参加だけではなく、美術館、音楽フェスティバルなどにも招聘される機会が増え、インスタレーション作品も提供しており、活動の幅が広がっている。国内にお

1. Contemporary Theater and Dance: -Season Fellows

いては、助成金の一部を社会に還元したいと、後輩育成のためのダンスプロジェクト「Somatic Field Project」を立ち上げ、自身がこれまで培ってきたプロフェッショナル性を後輩に伝えるべく継続して活動が続けてきた。国内における公演活動は、ヨーロッパを中心にやってきた梅田の公演システムの方法とうまくあわず苦勞が多かったようだ。今後も、「Somatic Field Project」を継続、また一般向けに「姿勢ワークショップ」も開催していくという。ヨーロッパと日本、それぞれの場所で梅田らしい活動が展開されることを期待している。

筒井潤は、2014年より支援を開始。この3年間の活動内容の変化には目を見張るものがあった。演劇について語り合う「ざろんざろん」の開催や、関西の劇作家作品を演出、上演する「たんじょうかい」などで大阪の演劇シーンに刺激を与える活躍もさることながら、様々な要因が重なり大阪から、東京、海外と活躍の場が格段に広がった。演出家としての技量が高く評価され、外部演出の依頼も増えている。自身が率いる劇団「dracom」の東京公演も良い評価を得ることができたので、今後も定期的に各地で公演を継続できればと願う。3年という短い支援期間ではあったが、期間中の経験を活かし、今後も広い分野で活動が続けて欲しい。2017年秋には海外公演も計画されているようだ。

危口統之は、2012年から2013年までのジュニア・フェローを経て、2014年から2016年までシニア・フェローで支援したが、最終年度の秋に病が発覚、2017年3月17日に逝去した。悔やまれる早世だった。7月の展示/パフォーマンス、『劇的なものをネグって』ではキュレーターが提案した「演劇的現象が生起する『場』」をテーマに危口らしいストレートでシニカルな方法で応答した。2017年3月には「悪魔のしるし」の関係者たちにより『蟹と歩く』が危口の残したテキストを原案に上演された。演劇を通して制度や観客の問題を今までにない方法と思考で表現することにいつも苦心していた。出自である建築やデザインの才能を発揮した「搬入プロジェクト」は2008年から国内外20カ所で実施され、2017年度の計画も考えていた。プロジェクトの活動の内容と実施方法は『搬入プロジェクト2008-2013ドキュメント: WORDS and IMAGES』にまとめられ出版されている。2017年5月に『蟹と歩く記録集』が刊行された。

それぞれの3年間の活動については、批評家、研究者の方々に総括していただいた。

また、各フェローの本年度の活動概要については後述のデータ編を参照されたい。

This program lets the playwrights, directors or choreographers who receive the grant use it also for their activities outside of the theater or dance companies that they represent or belong to. It is intended not only for performance projects but also for research or study and training for the artists' self-development. In addition to the grants, we offer priority use of Morishita Studio and its guest rooms.

In 2016, we received more applications than before from female artists, which constituted one-third of all the applications. In dance, it seemed that choreographers who had built their careers abroad were looking for opportunities for re-establishing their bases for activities in Japan.

Junior Fellows

In 2016, seven artists — **Yuichi Kinoshita, Chiharu Shinoda, Kenichi Tani, Naoyuki Miura and Takuya Murakawa** from the field of theater and **Takuro Suzuki and Kaori Seki** from dance — were selected as Junior Fellows, which is for artists younger than thirty-five years old. We supported Kinoshita, Murakawa and Seki in continuation of the 2014–2015 Junior Fellow term.

Chiharu Shinoda started as a director, writer and founding member of theater company “faifai” in 2005. In 2010, a work for faifai that she directed received the “ZKB Patronage Prize” from a Swiss festival given to encourage emerging companies, for the first time as a Japanese company. After leaving faifai, she has been working solo in Bangkok since 2012, visualizing stories that have become inseparable from the local community and questioning the process of establishing frameworks and texts for a performance through repositioning these stories on the stage. In theater works, she explores a form of collective creation in the 21st century by a team of which members do not share time and place. In 2016, she presented *ZOO*, an excursion-style performance in Kyoto Experiment. She has also completed *It's my turn*, on which she worked for years, and proceeds to a next stage.

Kenichi Tani founded “DULL-COLORED POP” in 2005. Although the company is on hiatus since their performance in May 2016, his activity ranges from playwriting and directing to translation, text revising and direction of commercial theater works. In 2013, his translation and direction of *Freud's Last Session* (written by Mark St. Germain) received the Yushi Odajima Drama in Translation Award and the Art Encouragement Prize from the Agency for Cultural Affairs. In 2016, he was commissioned by public theaters and the theater company Chijinkai-Shinsya to direct works, and also started research for writing plays about Fukushima, where he is from, on which he had been planning for a long time as a trilogy that would describe what happened from the 1950s when the Japanese nuclear power policy started till 2011 when the accident of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station occurred. It is planned that the first chapter of the plays will be presented as a reading performance in 2017.

Naoyuki Miura is a playwright and director who

founded “lolo” in 2009. As if patchworking various genres including manga, animation, novel, music and film, he creates narratives of diverse moments of “encounters” drawing subtle emotions and large-scale temporal qualities at the same time. He launched the “ITSUKOU series,” creations for high school theater, in 2015, wrote and directed a commercial play in 2016, and in 2017, he wrote and published a novel of the “ITSUKOU series,” presented the first music play with his company, and plans to write a script for children’s theater.

Takuro Suzuki is a choreographer who formed CHAIROIPLIN in 2007. Combining “high-quality physical expression” and “consistent stories,” he creates works that are accessible to people of all ages and inexperienced audiences. Developing such projects as “Dancing play” where he creates dance out of classics, he received the best prize at a young directors competition held by the Japan Directors Association in 2014 as well as JaDaFo (Japan Dance Forum) Dance Award and Dance Critics Society of Japan New Talent Award in 2015. In 2016, he choreographed for his own company as well as commissions. Diverse projects including the “Dancing play” and Japan-Korea collaboration are planned for 2017.

Eight Junior Fellows completed their two-year grant-receiving terms in 2016.

Kishodai Kageyama invited a director outside from his company for *Water* in 2015, and in the two works of the “CITY” series, especially in *CITY II* in 2016, employed a new creation method. He plans to present the final piece of the series and to work on a production with a new theme in 2017. In Hamamatsu, where he is from, he carried out two performances in theaters, a tour performance, workshop and work-in-progress throughout the two years. He has been exchanging with independent practitioners in such fields as music and film to develop future activity.

One of the goals that Yudai Kamisato set when selected as a Junior Fellow for the first time was to tour in Europe, and that was materialized when he received invitations from two leading festivals in 2016, the year he completed his third grant-receiving term, which we see as a remarkable achievement. He has been in Buenos Aires since October on the Program of Overseas Study of the Agency for Cultural Affairs of Japan, and he seems to be experiencing and reflecting on various matters. After returning to Japan, he will present a new work at Kyoto Experiment in the fall of 2017. We look forward to the piece and his future creations.

Yukio Shiba did not present a performance in a theater in 2016. Instead, he worked on creations and presentations on residencies on Shodoshima Island and Toyohashi, worked at Tama Art University with students on creation and performance, and did research for a performance in 2017. Meanwhile, he has shared the idea of the importance of independent projects with the members of his company and plans to carry out one in 2018. A new work as the result of the research for which he spent time and the grant will be featured at Festival/Tokyo in 2017 and Taipei Arts Festival in 2018. We look forward to this piece and the

new piece of the company.

Kunio Sugihara drew attention by his direction for Kinoshita Kabuki, but his other activities were also diverse and energetic, ranging from performances of his company “KUNIO” in 2015, a project commissioned by a public theater in 2016, and to work as an assistant director for Kabukiza Theatre for two years. It seems that what he has learnt from the experiences and encounters in these diverse work opportunities has improved his creation. In 2017, he will leave Kinoshita Kabuki with a performance in May as his last work with them and will focus on KUNIO. They plan to work on *A Midsummer Night’s Dream and The Greeks*. We expect that he will produce a work that will rank among his best.

Kaori Nishio worked on many different projects over the two years, and won the best prize at the young directors competition held by the Japan Directors Association. In 2016, she worked on two new works with her company that were based on a play by Shogo Ohta and the Book of Job and one solo performance. She also took part in the fellowship program of Festival Theaterformen in Germany and she says the term helped her review her own creations objectively and has found new inspirations for creation. We expect that she will develop her creations thoroughly through a long-term process into excellent works.

Suguru Yamamoto worked abroad energetically and learnt a lot in the two years. *Girl X* was presented in many countries and became his signature work. Also, his collaborations with Asian companies must have influenced his creation fundamentally. He gained reputation also in Japan for *The Unknown Dancer in the Neighboring Town* as well as writing and direction for collaboration with the Theater Departments of Universities in Tokyo. He seems to be interested in continuing overseas activity, and the improvement and changes in the two years must contribute to further progress.

Mikiko Kawamura studied in France on a program offered by the French Embassy Prize for Young Choreographers of Yokohama Dance Collection EX 2015 in the first half of 2016. She has rapidly gained reputation as a choreographer and dancer and worked hard, so the experience was a good opportunity for reflecting on her own history. During her stay in France, she worked in several choreography centers and presented several performances. She even created and presented a new work, and its premiere in Japan was at Yokohama Dance Collection after her return. The work exhibited a new style, which promised her development in the future.

The most important work of Pijin Neji in 2016 was the curation for “Our Masters Hijikata Tatsumi” at Asia Culture Center in Gwangju, Korea. The work was shared with Japanese audiences at a report meeting at TPAM (Performing Arts Meeting in Yokohama) in February 2017. He did many other research as well, which seems to have let him accumulate ideas for his future activity. He intends to reflect on butoh and to offer output of his reflection in ways that are not restricted to the form of performance. We will keep on following how he will develop his activities.

Senior Fellows

Yoko Higashino, director, choreographer and dancer who leads ANTIBODIES Collective, and **Akane Yamaguchi**, playwright, director and producer who leads TORIKO · A PRODUCE and SAFARI · P, were newly selected as Senior Fellows, which is basically for artists younger than forty-five years old. Both are based in Kyoto and work throughout Japan.

Yoko Higashino became a Senior Fellow this year after receiving support from our foundation under the Artistic Creativity Enhancement Program (2007–2009). She moved from Tokyo to Kyoto in 2015 and established “ANTIBODIES Collective” together with Toshio Kajiwara, a sound performance artist. They work with artists with diverse backgrounds to explore interdisciplinary forms of collaboration where various boundaries dynamically interact. In the first year of her grant-receiving term, she presented large-scale performances where artists and audience members moved across spaces such as outdoors, a music venue, a college auditorium and a garden. The performances drew not only theater and dance fans but also a wide range of audiences including families, couples and musicians. She has also been conducting workshops for citizens in a number of areas, opening up a new domain of activity.

Akane Yamaguchi has received a number of prizes: OMS Drama Prize in 2003; the best prize at a young directors’ competition held by the Japan Directors Association; the New Artist Award of the Agency of Cultural Affairs’ National Arts Festival, and first prize at the Toga Theatre Artists’ Competition. For two years from 2007, she studied at the national theater and other institutions in Finland on the Program of Overseas Study of the Agency for Cultural Affairs of Japan. We selected her as a grantee in expectation of her leadership and future creations as an experienced theater maker based in Kyoto. Her activities have not been very visible in Tokyo, but this year *Le grand cahier* (based on the book by Agota Kristof) was highly acknowledged by a larger audience in Tokyo. She is in a long-term and steady process of auditioning, researching and rehearsing for a new work to be presented in 2017. We expect that she will fulfill her objectives in the three-year grant-receiving term including the reinforcement of management scheme and improvement of the creation environment and produce good works constantly not only in Kyoto but across Japan.

Hiroaki Umeda, choreographer, dancer and visual artist, Jun Tsutsui, playwright, director and performer, and Noriyuki Kiguchi, playwright and director, completed their three-year grant-receiving terms in 2016.

Hiroaki Umeda received a three-year support as a Senior Fellow from 2014 after being a Junior Fellow (2010–2011) and an International Projects Support Program grantee (2012). He worked hard mainly in Europe, where he has established high reputation. Expanding his activities, he did not only work on commissions of new works and participate in dance

festivals, but also was invited to museums and music festivals as well and presented his installation works. In Japan, he established “Somatic Field Project,” a dance project for training young practitioners where he has been introducing them to a sense of professionalism that he has developed, wishing to use part of his grant to make a social contribution. It seems that he has had a lot of difficulties when performing in the Japanese system that is different from Europe, where he has performed the most. He continues the “Somatic Field Project” and plans to organize “Posture Workshop” for general participants. We expect that his unique activity will develop both in Europe and Japan.

We started to support Jun Tsutsui in 2014. The change that his activity went through in the three years was amazing. He did not only stimulate the theater scene in Osaka by organizing “Zaron Salon”, a platform for discussing theater and “Tanjokai” for directing and presenting plays by playwrights in the Kansai area but also considerably extended the field of his activity to Tokyo and overseas, to which multiple factors contributed. His ability as a director has become recognized, and he has been receiving more commissions than before. Since the performances in Tokyo by his company “dracom” were highly acknowledged, we hope that they will continue bringing their productions to various places. The grant-receiving term was as short as three years, but we wish that he will make use of the experiences during the term to broaden his activities even more. We hear that he plans to tour internationally in the fall of 2017.

We supported Noriyuki Kiguchi, after his Junior Fellow term (2012–2013), and from 2014 to 2016 as a Senior Fellow. However, he was unfortunately diagnosed as having a fatal disease in the fall of the final year and passed away on March 17, 2017. In *Neglecting the Dramatic Passions*, an exhibition / performance in July, he responded in his unique straightforward and cynical way to the theme of “a ‘place’ where dramatic phenomena are generated,” which was proposed by the curator. *Walking with Cancers*, a performance based on the last writing by Kiguchi, was presented by the members and friends of his company “Akumanoshirushi” in March 2017. He always worked hard to express the issues of systems and audiences through theater with an unprecedented methodology and way of thinking. *Carry-in-Project*, the series he made use of his knowledge in the two areas he was originally from, which were architecture and design, was carried out in 20 places in and outside Japan, and he was thinking of its plans for 2017. The contents and methodologies of the project have been published as *CARRY-IN-PROJECT 2008-2013 DOCUMENT: WORDS and IMAGES*. In May 2017, *Akumanoshirushi “Walking with Cancers” DOCUMENT* was published.

We had critics and scholars review their activities over the three years.

Details on the activities of each Fellow in 2016 are listed in the following pages.

2016年度より From 2016



木ノ下裕一
(監修・補綴 「木ノ下歌舞伎」主宰)
[演劇/京都]
Yuichi Kinoshita
(supervisor, reviser and artistic director of Kinoshita Kabuki)
[theater/Kyoto]
<http://kinoshita-kabuki.org/>

- ▶ **継続助成対象期間**
2016年度から2017年度まで
- ▶ **2016年度の助成内容**
金額: 1,000,000円(公演に充当)
スタジオ提供: 72日間
ゲストルーム提供: 44日間
- ▶ **2016年度の主な活動**
2016年5-6月: 木ノ下歌舞伎『義経千本桜—渡海屋・大物浦—』愛知、東京(愛知県芸術劇場、東京芸術劇場、豊川市御津文化会館)「びわ湖ホール歌舞伎講座」滋賀(びわ湖ホール)
7. 10-11月: 木ノ下歌舞伎『勸進帳』長野、愛知、京都、福岡(まつもと市民芸術館、穂の国とよはし芸術劇場PLAT、京都芸術劇場、北九州芸術劇場)
8月: 木ノ下歌舞伎「しみこむ歌舞伎の観劇塾」東京
2017年1月: 木ノ下歌舞伎『隅田川』『娘道成寺』東京、京都(こまばアゴラ劇場、アトリエ劇研)
- ▶ **Grant-receiving term**
From 2016 to 2017
- ▶ **Details on support during fiscal year 2016**
Grant: ¥1,000,000 (used for performances)
Studio Rental: 72 days
Guest Room Rental: 44 days
- ▶ **Major activities during fiscal year 2016**
May-June 2016: *Yoshitsune Senbonzakura-Tokaiya & Daimotsuura*, Kinoshita Kabuki, in Tokyo and Aichi
July, October - November: *Kanjincho*, Kinoshita Kabuki, in Nagano, Aichi, Kyoto, Fukuoka
January 2017: *Sumidagawa / Musume Dojoji*, Kinoshita Kabuki, in Tokyo and Kyoto



木ノ下歌舞伎『義経千本桜—渡海屋・大物浦—』東京、2016年6月
撮影: bozzo
Yoshitsune Senbonzakura-Tokaiya & Daimotsuura, Kinoshita Kabuki, in Tokyo, June 2016
Photo: bozzo



篠田千明
(演出家、作家)[演劇/東京、バンコク]
Chiharu Shinoda
(director, artist)
[theater/Tokyo, Bangkok]
<http://shinodachiharu.com/>

- ▶ **継続助成対象期間**
2016年度から2017年度まで
- ▶ **2016年度の助成内容**
金額: 1,000,000円(機材、交通費等に充当)
スタジオ提供: 40日間
- ▶ **2016年度の主な活動**
2016年6月: 『5x5 Legged Stool』EUツアー サラマンカ(スペイン)、ベルリン(「Facyl Festival」、Wind and Pillar)
11月: 『ZOO』京都(「京都国際舞台芸術祭」)
2017年3月: 『Sketching and Short Chatri -from Four Chance for Drama』バンコク(「Low Fat Festival」)
- ▶ **Grant-receiving term**
From 2016 to 2017
- ▶ **Details on support during fiscal year 2016**
Grant: ¥1,000,000 (used for projects)
Studio Rental: 40 days
- ▶ **Major activities during fiscal year 2016**
June 2016: *5x5 Legged Stool*, in Salamanca, Spain and Berlin ("Facyl Festival", Wind and Pillar)
November: *ZOO*, at "Kyoto Experiment" in Kyoto
March 2017: *Sketching and Short Chatri - from Four Chance for Drama*, at "Low Fat Festival" in Bangkok



『ZOO』京都、2016年11月
撮影: 松見卓也 写真提供: KYOTO EXPERIMENT
Zoo, in Kyoto, November 2016
Photo: Takuya Matsumi, Courtesy of KYOTO EXPERIMENT



谷賢一

(作家、演出家、翻訳家「DULL-COLORED POP」主宰) [演劇/東京]

Kenichi Tani

(writer, director, translator and artistic director of DULL-COLORED POP) [theater/Tokyo]
<http://www.dcpop.org>

撮影:源賀津己 Photo: Katsumi Minamoto

▶継続助成対象期間

2016年度から2017年度まで

▶2016年度の助成内容

金額:1,000,000円(公演、自己研修、リサーチ等に充当)
スタジオ提供:35日間

▶2016年度の主な活動

2016年5-6月:DULL-COLORED POP vol.17活動休止公演
『演劇』東京、新潟(王子小劇場、えんとつシアター)

9月:地人会新社『テレーズとローラン』作・演出
東京(東京芸術劇場)

12月-2017年1月:ホリプロミュージカル『わたしは真悟』脚本
神奈川、静岡、富山、京都、東京(KAAT神奈川芸術劇場、浜松市浜
北文化センター、オーバード・ホール、ロームシアター京都、新国立
劇場)

3-4月:新国立劇場『白蟻の巣』演出 東京、兵庫、愛知(新国立劇
場、兵庫県立芸術文化センター、穂の国とよはし芸術劇場PLAT)

▶Grant-receiving term

From 2016 to 2017

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performance, research and study,
etc.)

Studio Rental: 35 days

▶Major activities during fiscal year 2016

May-June 2016: *A Play*, Theatre Company 'DULL-COLORED
POP' 17th production, in Tokyo and Nigata (Oji Fringe Theatre,
Nigata Entotsu Theater)

September: *Therese and Laurent*, Chijinkai-Shinsya,
Playwright and Direction, at Tokyo Metropolitan Theatre in
Tokyo

December 2016-January 2017: *My name is Shingo*, Horipro
Musical, Playwright, in Kanagawa, Shizuoka, Toyama, Kyoto,
Tokyo (Kanagawa Art Theatre, Hamamatsu Hamakita Culture
Center, Toyama Aubade Hall, Rohm Theatre Kyoto, New
National Theatre Tokyo)

March-April: *The nest of white ants*, New National Theatre
Tokyo, Direction, in Tokyo, Hyogo, Aichi (New National Theatre
Tokyo, Hyogo Performing Arts Center, Toyohashi Arts Theatre)



DULL-COLORED POP『演劇』東京、2016年5月

撮影:猫の手

A Play, Theatre Company 'DULL-COLORED POP', in Tokyo,
May 2016

Photo: Neko-no-te



三浦直之

(劇作家、演出家「ロロ」主宰)
[演劇/東京]

Naoyuki Miura

(playwright, director, and artistic
director of lolo) [theater/Tokyo]
<http://loloweb.site.sub.jp/>

撮影:源賀津己 Photo: Katsumi Minamoto

▶継続助成対象期間

2016年度から2017年度まで

▶2016年度の助成内容

金額:1,000,000円(公演、制作人件費等に充当)
スタジオ提供:6日間

▶2016年度の主な活動

2016年5月:ロロvol.12『あなたがいなかった頃の物語と、いなく
なつてからの物語』東京(東京芸術劇場)

8月:いわき総合高校卒業公演『魔法』脚本・演出 茨城(いわきアリオス)

9-10月:キティエンターテインメントプレゼンツ『光の光の光の愛
の光の』脚本・演出 東京(CBGKシブゲキ!!)

11月:ロロいつ高シリーズvol.3『すれちがう、渡り廊下の距離って』
神奈川(STスポット)

2017年1月:ロロいつ高シリーズvol.1&2『いつだって窓際であたし
たち』校舎、ナイトクルージング』新潟(秋葉区文化会館)

3月:ロロいつ高シリーズvol.4『いちごオレ飲みながらアイツのうわ
さ話した』+まとめ上演 東京(こまばアゴラ劇場)

▶Grant-receiving term

From 2016 to 2017

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performance, arts management
fees, etc.)

Studio Rental: 6 days

▶Major activities during fiscal year 2016

May 2016: *The Story of Before You Were There, and the Story of
After You Were Gone*, lolo vol.12, at Tokyo Metropolitan Theater
in Tokyo

August: *Magic*, Iwaki General High School Graduation
performance, Playwright and Direction, at Iwaki Performing
Arts Center Alios in Iwaki

September-October: *Hikarino Hikarino Hikarino Aino Hikarino*,
Kitty Entertainment Presents, Playwright and Direction, in Tokyo
November: ITSUKOU series vol.3 *Surechigau, Watarirouka no
Kyoritte*, lolo, at STspot in Kanagawa

January 2017: ITSUKOU series vol.1 & 2 *Itsudatte Madogiwade
Atashitachi / Kousya, Night Cruising*, lolo, at Akiba Ward Cultural
Center in Nigata

March: ITSUKOU series vol.4, lolo, at Komaba Agora Theater
in Tokyo



ロロvol.12『あなたがいなかった頃の物語と、いなくなつてからの物語』

東京、2016年5月

撮影:三上ナツコ

*The Story of Before You Were There, and the Story of After You Were
Gone*, lolo vol.12, in Tokyo, May 2016

Photo: Natsuko Mikami



村川拓也

(演出家) [演劇/京都]

Takuya Murakawa

(director) [theater/Kyoto]

<http://murakawatakuya.blogspot.jp/>

撮影:相模友士郎 Photo: Yujiro Sagami

▶ 継続助成対象期間

2016年度から2017年度まで

▶ 2016年度の助成内容

金額: 1,000,000円(公演に充当)

▶ 2016年度の主な活動

2016年9月: 村川拓也+劇研アクターズラボ『Fools speak while wise men listen』京都(アトリエ劇研)

12月: Hansol Yoon主催『国家—韓国編』ソウル(Post Territory Ujeongguk)

2017年2月: 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター「太田省吾を〈読む〉「未来」の上演のために」『場所のない記憶』京都(京都芸術劇場)

3月: 『Fools speak while wise men listen』東京、京都(早稲田小劇場どらま館、アトリエ劇研)

▶ Grant-receiving term

From 2016 to 2017

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performances)

▶ Major activities during fiscal year 2016

September 2016: *Fools speak while wise men listen*, Takuya Murakawa+gekken actors labo, at Atelier gekken in Kyoto
December: *Nation — Korea version*, organized by Hansol Yoon, at Post Territory Ujeongguk in Seoul

February 2017: *Memory of no place*, organized by Kyoto University of Art & Design Performing Arts Research Center, at Kyoto art theater in Kyoto

March: *Fools speak while wise men listen*, in Tokyo and Kyoto (Waseda syo gekijyo drama kan, Atelier gekken)



『Fools speak while wise men listen』京都、2017年3月

撮影: 城間典子

Fools speak while wise men listen, in Kyoto, March 2017.

Photo: Noriko Shiroma



スズキ拓朗

(振付家・ダンサー「CHAiroidPLIN」主宰)

[舞踊/東京]

Takuro Suzuki

(choreographer, dancer and

artistic director of CHAiroidPLIN)

[dance/Tokyo]

<http://www.chairoidplin.net/>

撮影: 許斐祐 Photo: Tasuku Konomi

▶ 継続助成対象期間

2016年度から2017年度まで

▶ 2016年度の助成内容

金額: 1,000,000円(公演に充当)

スタジオ提供: 70日間

▶ 2016年度の主な活動

2016年5月: ゴールデンウィーク特別公演3都市ツアー
CHAiroidPLIN 踊る童話2『BEAN!!!!!!』東京、福岡、広島(セッションハウス、イムズホール、JMSアステールプラザ)

9-10月: CHAiroidPLIN ワークインプログレス 東京(森下スタジオ)

2017年1月: CHAiroidPLIN 踊る小説2『peeeeeeep』東京(東京芸術劇場)

2月: 日韓共同制作プロジェクト 韓国版『あばばば』振付・構成・演出ソウル(マリ劇場)

インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響—kyo 第4回公演『パワポル』振付・構成・演出 東京(東京芸術センター)

▶ Grant-receiving term

From 2016 to 2017

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performances)

Studio Rental: 70 days

▶ Major activities during fiscal year 2016

May 2016: CHAiroidPLIN Dancing fairy tale2 *BEAN!!!!!!*, Golden Week special performance 3 city tour, in Tokyo, Fukuoka, Hiroshima (Session House, Immers Hall, JMS Astel Plaza)

September-October: CHAiroidPLIN Work in progress at Morishita Studio in Tokyo

January 2017: Dancing novel 2 *peeeeeeep*, CHAiroidPLIN, at Tokyo Metropolitan Theatre in Tokyo

February: *ababababa* Korean version, Japan-Korea Collaboration Project, Choreography, Composition, Direction, at MARI Theater in Seoul

PAWAPORU, Integrated Dance Company kyo vol.4, Choreography, Composition, Direction, at Tokyo Art Center in Tokyo



CHAiroidPLIN 踊る童話2『BEAN!!!!!!』東京、2016年5月

撮影: 福井理文

Dancing fairy tale2 *BEAN!!!!!!*, CHAiroidPLIN, in Tokyo, May 2016

Photo: Ribunn Fukui



関かおり

(振付家・ダンサー 「関かおり
PUNCTUMUN」主宰)[舞踊/東京]

Kaori Seki

(choreographer, dancer and
artistic director of KAORI SEKI
Co.PUNCTUMUN) [dance/Tokyo]
<http://www.kaoriseki.info/>

▶ 継続助成対象期間

2016年度から2017年度まで

▶ 2016年度の助成内容

金額: 1,000,000円(公演、自己研修等に充当)
スタジオ提供: 44日間

▶ 2016年度の主な活動

2016年8月: 岩淵貞太との共同作品『Berceuse』、関かおり
PUNCTUMUN『Cinema』東京(「ダンスが見たい! 18 ~エリック・
サティを踊る」)
9月: 関かおり PUNCTUMUN『をこプレゼンver.』東京(「第2回
International Dance Network Programme(IDN2016)」ショー
ケース)
10月: 関かおり PUNCTUMUN『ミロエデット2016 愛知ver.』
愛知(愛知県芸術劇場「パフォーミングアーツ・セレクション」)
11-12月: National Performance Network(アメリカ)「Creative
Residency & Tour」参加 バーモント、テキサス、イリノイ

▶ Grant-receiving term

From 2016 to 2017

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performances, research and
study, etc.)
Studio Rental: 44 days

▶ Major activities during fiscal year 2016

August 2016: *Cinema*, KAORI SEKI Co. PUNCTUMUN /
Berceuse, co-choreographed and performed by Teita Iwabuchi
and Kaori Seki, at "Dance ga mitai! (We want to see Dance)
vol. 18 - Erik Satie" in Tokyo
September: *WO CO -presentation ver.*, KAORI SEKI Co.
PUNCTUMUN, at "The 2nd International Dance Network
Programme (IDN2016) SHOW CASE" in Tokyo
October: *Miroedetut-Aichi ver.*, KAORI SEKI Co. PUNCTUMUN,
at "PERFORMING ARTS SELECTION" (AICHI ARTS CENTER) in
Aichi
November-December: National Performance Network
(America) "Creative Residency & Tour"



岩淵貞太との共同作品『Berceuse』東京、2016年8月
撮影: 松本和幸

Berceuse, co-choreographed and performed by Teita Iwabuchi
and Kaori Seki, in Tokyo, August 2016
Photo: Kazuyuki Matsumoto



カゲヤマ気象台

(劇作家・演出家 「sons wo:」主宰
[演劇/東京])

Kishodai Kageyama

(playwright, director and artistic
director of sons wo:)
[theater/Tokyo]
<http://sonswoweb.fc2.com>
撮影: 笠原玄也 Photo: Hiroya Kasahara

▶ 継続助成対象期間

2015年度から2016年度まで

▶ 2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ 2016年度の助成内容

金額: 1,000,000円(公演、リサーチ、自己研修等に充当)

▶ 2016年度の主な活動

2016年7月: sons wo:『シティII』東京、静岡(pool、KIRCHHERR)
2017年1月:『羊をめぐる』静岡(浜松市街)

▶ Grant-receiving term

From 2015 to 2016

▶ Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for performances, research and
study, etc.)

▶ Major activities during fiscal year 2016

July 2016: *CITY II*, sons wo:, in Tokyo and Shizuoka (pool,
KIRCHHERR)
January 2017: *A Wild Sheep*, on the streets of Hamamatsu in
Shizuoka



sons wo:『シティII』東京、2016年7月
CITY II, sons wo:, in Tokyo, July 2016



神里雄大

(劇作家・演出家 「岡崎藝術座」主宰
[演劇/東京])

Yudai Kamisato

(playwright, director and artistic
director of Okazaki Art Theatre)
[theater/Tokyo]
<http://okazaki-art-theatre.com>

▶ 継続助成対象期間

2015年度から2016年度まで

▶ 2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ 2016年度の助成内容

金額:1,000,000円(公演に充当)

スタジオ提供:11日間

▶ 2016年度の主な活動

2016年4月:『+51アビアシオン, サンボルハ』リーディング上演
ニューヨーク(「PEN World Voices: International Play
Festival 2016」)

5月:岡崎藝術座『+51アビアシオン, サンボルハ』
ブリュッセル(「Kunstenfestivaldesarts」)

7月:岡崎藝術座『+51アビアシオン, サンボルハ』
『イスラ! イスラ! イスラ!』三重(三重県文化会館)

10月:岡崎藝術座『+51アビアシオン, サンボルハ』
パリ(「LE FESTIVAL D'AUTOMNE À PARIS」)

10月-:ブエノスアイレスでの新進芸術家海外研修

▶ Grant-receiving term

From 2015 to 2016

▶ Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant:¥1,000,000 (used for performances)

Studio Rental: 11 days

▶ Major activities during fiscal year 2016

April 2016: +51 *Aviación, San Borja*, reading at "PEN World
Voices: International Play Festival 2016" in New York

May: +51 *Aviación, San Borja*, Okazaki Art Theatre, at
"Kunstenfestivaldesarts" in Brussels

July: +51 *Aviación, San Borja / ISLA! ISLA! ISLA!*, Okazaki Art
Theatre, at Mie center for Arts in Mie

October: +51 *Aviación, San Borja*, Okazaki Art Theatre, at "LE
FESTIVAL D'AUTOMNE À PARIS" in Paris

October-: Training Program in Buenos Aires



岡崎藝術座『+51 アビアシオン, サンボルハ』パリ、2016年10月
撮影:Cordula Tremel

+51 *Aviación, San Borja*, Okazaki Art Theatre, in Paris,
October 2016

Photo: Cordula Tremel



柴幸男

(劇作家・演出家 「ままごと」主宰
[演劇/東京・愛知・香川(小豆島)])

Yukio Shiba

(playwright, director and artistic
director of mamagoto) [theater/Tokyo,
Aichi, Kagawa [Shodoshima]]
<http://www.mamagoto.org/>
撮影:源賀津己 Photo: Katsumi Minamoto

▶ 継続助成対象期間

2015年度から2016年度まで

▶ 2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ 2016年度の助成内容

金額:1,000,000円(事業、リサーチに充当)

▶ 2016年度の主な活動

2016年7-9月:ままごと「港の劇場 -喫茶ままごと-」監督
香川(「瀬戸内国際芸術祭2016 夏会期」)

8月:ままごと×スイッチ総研『小豆島きまだめスイッチ』研究開発・
出演 香川(「瀬戸内国際芸術祭2016 夏会期」)

9月:ままごと「交響曲『豊橋』(合唱付き)」構成・演出
愛知(穂の国とよはし芸術劇場PLAT、豊橋駅周辺)

10-11月:ままごと「港の劇場 -喫茶ままごと-」監督
香川(「瀬戸内国際芸術祭2016 秋会期」)

2017年1月:多摩美術大学 演劇舞踊デザイン学科 演劇専攻・
柴幸男ゼミ『大工』作・演出 東京(多摩美術大学)

▶ Grant-receiving term

From 2015 to 2016

▶ Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥1,000,000 (used for project and research)

▶ Major activities during fiscal year 2016

July-September 2016: "Port Theater -mamagoto cafe-",
mamagoto, Supervision, at "Setouchi Triennale 2016 Summer
Season" in Kagawa

August: *Shodoshima KIMODAME-Switch*, mamagoto × Switch
Research Institute, Research, Development and Performer, at
"Setouchi Triennale 2016 Summer Season" in Kagawa

September: *Symphony "TOYOHASHI" with chorus*, mamagoto,
Constitution and Direction, at Toyohashi Art Theatre PLAT and
around Toyohashi Station in Aichi

October-November: "Port Theater -mamagoto cafe-",
mamagoto, Supervision, at "Setouchi Triennale 2016 Autumn
Season" in Kagawa

January 2017: *DAIKU*, Tama Art University Department of
Theatre & Butoh Design Theater major Yukio Shiba Seminar,
at Tama Art University in Tokyo



ままごと「交響曲『豊橋』(合唱付き)」愛知、2016年9月

撮影:矢作勝義

Symphony "TOYOHASHI" with chorus, mamagoto, in Aichi,
September 2016

Photo: Masayoshi Yahagi



杉原邦生
(演出家・舞台美術家 「KUNIO」主宰)
[演劇/京都]

Kunio Sugihara
(director, stage designer and
artistic director of KUNIO)
[theater/Kyoto]
<http://www.kunio.me/>

撮影:堀川高志 Photo: Takashi Horikawa

▶ **継続助成対象期間**

2015年度から2016年度まで

▶ **2016年度までの助成金額(単位:円)**

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **2016年度の助成内容**

金額:1,000,000円(公演、法人化費用に充当)

スタジオ提供:4日間

▶ **2016年度の主な活動**

2016年7、10-11月:木ノ下歌舞伎『勸進帳』演出・舞台美術
長野、愛知、京都、福岡(まつもと市民芸術館、穂の国とよし芸術
劇場PLAT、「KYOTO EXPERIMENT2016 AUTUMN」公式プロ
グラム、北九州芸術劇場)

8月:平成二十八年 八月納涼歌舞伎第二部『東海道中膝栗毛』

構成・演出助手 東京(歌舞伎座)

12月:KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『ルーツ』

演出・舞台美術 神奈川(KAAT神奈川芸術劇場)

2017年1月:木ノ下歌舞伎『隅田川』共同演出・舞台美術

東京、京都(こまばアゴラ劇場、アトリエ劇研)

▶ **Grant-receiving term**

From 2015 to 2016

▶ **Amount of continuous grants (in yen)**

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **Details on support during fiscal year 2016**

Grant: ¥1,000,000 (used for performance, etc.)

Studio Rental: 4 days

▶ **Major activities during fiscal year 2016**

July, October - November: *Kanjincho*, Kinoshita Kabuki,
Direction and Stage Design, in Nagano, Aichi, Kyoto, Fukuoka
(Matsumoto Performing Arts Centre, TOYOHASHI ARTS
THEATRE PLAT, "KYOTO EXPERIMENT2016 AUTUMN",
KITAKYUSHU Performing Art Center)

August: *TOKAIDOCYU-HIZAKURIGE*, NOURYO-KABUKI,
Screenplay and Assistant director at KABUKIZA Theater in Tokyo

December: *ROOTS*, KAAT Produce, Direction and Stage
Design, at KAAT KANAGAWA ARTS THEATRE in Kanagawa

January 2017: *SUMIDAGAWA*, KINOSHITA-KABUKI, Direction
and Stage Design, *MUSUME DOJYOJI*, KINOSHITA-KABUKI,
Stage Design, in Tokyo and Kyoto (KOMABA AGORA Theater,
atelier GEKKEN)



『ルーツ』神奈川、2016年12月

撮影:清水俊洋

ROOTS, in Kanagawa, December 2016.

Photo: Toshihiro Shimizu



西尾佳織
(劇作家・演出家 「鳥公園」主宰)
[演劇/東京]

Kaori Nishio
(playwright, director and artistic
director of Bird Park)
[theater/Tokyo]
<http://bird-park.info>

撮影:引地信彦 Photo: Nobuhiko Hikiji

▶ **継続助成対象期間**

2015年度から2016年度まで

▶ **2016年度までの助成金額(単位:円)**

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **2016年度の助成内容**

金額:1,000,000円(公演に充当)

スタジオ提供:17日間

▶ **2016年度の主な活動**

2016年6月:「フェスティバル テアターフォルメン フェロウシッ
プログラム」参加 ニーダーザクセン(ドイツ)

9-10月:鳥公園#12『ノヤヅルシ』

東京、香川(BUCKLE KOBO、「瀬戸内国際芸術祭2016」)

12月:西尾佳織ソロ企画『2020』作・演出・出演

東京、愛知(東京都歴史文化財団

「OPEN SITE 2016」、「ミソゲキ2016」)

2017年3月:鳥公園#13『ヨブ呼んでるよ』

京都、東京(アトリエ劇研、こまばアゴラ劇場)

西尾佳織ソロ企画『2020』作・演出

東京(「若手演出家コンクール2015」最優秀賞受賞記念公演)

▶ **Grant-receiving term**

From 2015 to 2016

▶ **Amount of continuous grants (in yen)**

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **Details on support during fiscal year 2016**

Grant: ¥1,000,000 (used for performances)

Studio Rental: 17 days

▶ **Major activities during fiscal year 2016**

June 2016: "Festival Theaterformen Fellowship program" in
Land Niedersachsen, Germany

September - October: *An Arrow*, Bird Park #12, in Tokyo and
Kagawa (BUCKLE KOBO, "Setouchi Triennale")

December: *2020*, solo performance, Text, Direction and Acting,
in Tokyo and Aichi (Tokyo Wonder Site Hongo, Nanja-rel)

March 2017: *Hey God, Job is calling you!*, Bird Park#13, in Kyoto
and Tokyo (atelier GEKKEN, Komaba Agora Theater)

2020, solo performance, Text, Direction and Acting, at
Shimokitazawa "Play" small theater in Tokyo



鳥公園#12『ノヤヅルシ』東京、2016年9月

撮影:塚田史子

An Arrow, Bird Park #12, in Tokyo, September 2016

Photo: Fumiko Tsukada



山本卓卓
(劇作家・演出家 「範宙遊泳」主宰)
[演劇/東京]
Suguru Yamamoto
(playwright, director and artistic director of HANCHU-YUEI)
[theater/Tokyo]
<http://hanchuyuei.com>

▶ **継続助成対象期間**

2015年度から2016年度まで

▶ **2016年度までの助成金額(単位:円)**

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **2016年度の助成内容**

金額:1,000,000円(公演、自己研修等に充当)

スタジオ提供:2日間

▶ **2016年度の主な活動**

2016年4月:範宙遊泳×The Necessary Stage <phase1>シンガポール滞在とワークショップ シンガポール(Necessary Stage)
7-9月:カオス*ラウンジ「鬼の家」にて、映像作品『鬼の唄』を展示 香川(「瀬戸内国際芸術祭2016」)
9月:演劇系大学共同制作vol.4『昔々日本』作・演出 東京(東京芸術劇場)
範宙遊泳『幼女X』中国公演 杭州(「杭州現代演劇祭」)
12月:ドキュメント『となり街の知らない踊り子』 東京(「フェスティバル/トーキョー」)
12月-2017年2月:範宙遊泳×Tadpole 滞在制作・インド国内4都市ツアー公演『午前2時コーヒークップサラダボウルユートピア -THIS WILL ONLY TAKE SEVERAL MINUTES-』共同脚本、共同演出 バンガロール、ボンデシエリー、プネー、デリー
2月:範宙遊泳『幼女X』アメリカ公演 ニューヨーク(ジャパン・ソサエティ)
3月:ドキュメント『となり街の知らない踊り子』シドニー公演

▶ **Grant-receiving term**

From 2015 to 2016

▶ **Amount of continuous grants (in yen)**

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **Details on support during fiscal year 2016**

Grant: ¥1,000,000 (used for performances, research and study, etc.)

Studio Rental: 2 days

▶ **Major activities during fiscal year 2016**

April 2016: HANCHU-YUEI × The Necessary Stage <phase1> in Singapore
September: *Girl X*, HANCHU-YUEI, in China
December: *DOCU(NT)MENT "The Unknown Dancer in the Neighboring Town"*, at Festival/Tokyo in Tokyo
December-February 2017: *THIS WILL ONLY TAKE SEVERAL MINUTES*, HANCHU-YUEI × Tadpole, in India
February: *Girl X*, HANCHU-YUEI, in New York
March: *DOCU(NT)MENT "The Unknown Dancer in the Neighboring Town"*, in Sydney



範宙遊泳『幼女X』ニューヨーク、2017年2月
Girl X, HANCHU-YUEI, in New York, February 2017



川村美紀子
(振付家・ダンサー) [舞踊/東京]
Mikiko Kawamura
(choreographer, dancer)
[dance/Tokyo]
<http://kawamuramikiko.com/>
撮影: 梶山かつみ Photo: Katsumi Kajiyama

▶ **継続助成対象期間**

2015年度から2016年度まで

▶ **2016年度までの助成金額(単位:円)**

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	831,311	1,831,311

▶ **2016年度の助成内容**

金額:831,311円(公演、自己研修費等に充当) スタジオ提供:5日間

▶ **2016年度の主な活動**

2016年1-6月:横浜ダンスコレクション EX2015 コンペティション
「若手振付家のための在日
フランス大使館賞」副賞としてフランスにてアーティスト・イン・レジデンス
4月: Mikiko Kawamura Creation 2016 マルセイユ(「KLAP
Maison pour la danse à Marseille」)
6月:「COCOTTE 2016」参加(CCNr: Centre
Choreographique National de Rillieux-la-Pape)
「LE FESTIVAL DE TOUS LES HÉROS」参加 リヨン(Les Subsistances)
川村美紀子ダンスパフォーマンス『地獄に咲く花』パリ(パリ国際大学都市 日本館)
10月:愛知県芸術劇場ミニセラ「パフォーマンス・セレクション」参加
2017年2月:『インナーマミー』『地獄に咲く花』(日本初演)
神奈川(「横浜ダンスコレクション2017」)

▶ **Grant-receiving term**

From 2015 to 2016

▶ **Amount of continuous grants (in yen)**

2015	2016	Total
1,000,000	831,311	1,831,311

▶ **Details on support during fiscal year 2016**

Grant: ¥831,311 (used for performances, research and study, etc.)

Studio Rental: 5 days

▶ **Major activities during fiscal year 2016**

January – June 2016: Artist in Residence in France as “The French Embassy Prize for Young Choreographer” of “Yokohama Dance Collection EX 2015”
April: Mikiko Kawamura Creation 2016 (KLAP Maison pour la danse à Marseille)
June: Performance at “COCOTTE 2016” (CCNR: Centre Choreographique National de Rillieux-la-Pape)
Performance at “LE FESTIVAL DE TOUS LES HÉROS” in Lyon (Les Subsistances)
Flower blooms in Hell, at Cité Internationale Universitaire de Paris – Maison du Japon in Paris
October: Performance at AICHI ARTS CENTER “Performing Arts Selection” in Aichi
February 2017: *Inner Mommy / LA FLEUR ÉCLÔT EN ENFER* (Japan Premiere), at “YOKOHAMA DANCE COLLECTION 2017” in Kanagawa



『地獄に咲く花』神奈川、2017年2月

撮影: bozzo

LA FLEUR ÉCLÔT EN ENFER, in Kanagawa, February 2017.

Photo: bozzo



振子びじん
(振付家・ダンサー)[舞踊/東京]

Pijin Neji
(choreographer/dancer)
[theater/Tokyo]
<http://pijinneji.blogspot.jp>
撮影:カンノケント Photo: Kento Kanno

▶ **継続助成対象期間**

2015年度から2016年度まで

▶ **2016年度までの助成金額(単位:円)**

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **2016年度の助成内容**

金額:1,000,000円(リサーチ、自己研修に充当)

スタジオ提供:7日間

▶ **2016年度の主な活動**

2016年5月:「Our Masters 土方巽「異言/glossolalia」」キュレーション 光州(韓国・アジアカルチャーセンターシアター)

7月:危口統之(悪魔のしるし)展示「劇的なものをネグって」にてパフォーマンス 演出・出演 東京(Kanzan Gallery)

10月:「はならあと2016」出演 奈良

12月:アーティスト・オン・サイト

振子びじん×障害者福祉施設・春光園うえみずによるダンス公演『わからない?』埼玉(「さいたまトリエンナーレ2016」関連プロジェクト)

▶ **Grant-receiving term**

From 2015 to 2016

▶ **Amount of continuous grants (in yen)**

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **Details on support during fiscal year 2016**

Grant: ¥1,000,000 (used for research and study.)

Studio Rental: 7 days

▶ **Major activities during fiscal year 2016**

May 2016: “Our Masters Hijikata Tatsumi “방언/glossolalia””, curation, at Asia Culture Center Theater in Gwangju, Korea,

July: Performance at the exhibition “off the dramatic passions”, in Tokyo

October: Performance at “ART FESTIVAL HANARART 2016” in Nara

November: Artist on Site Pijin Neji × SHUNKOEN UEMIZU

Don't know ?, in Saitama



「Our Masters 土方巽
「異言/glossolalia」」での
公演
『Full Body Costume』
光州、2016年5月
撮影:島崎ロディー

Full Body Costume, at
“Our Masters Hijikata
Tatsumi
“방언/glossolalia””, in
Gwangju, May 2016
Photo: Rody Shimazaki

2016年度より From 2016



山口茜
(劇作家・演出家 「トリコ・A・プロデュース」「サファリ・P」主宰)[演劇/京都]
Akane Yamaguchi
(playwright, director and artistic director of TORIKO・A PRODUCE / SAFARI・P) [theater/Kyoto]
http://toriko-a.com/

- ▶ 継続助成対象期間
2016年度から2018年度まで
- ▶ 2016年度の助成内容
金額: 2,500,000円(公演、自己研修等に充当)
スタジオ提供: 12日間
ゲストルーム提供: 17日間
- ▶ 2016年度の主な活動
2016年10月: トリコ・A新作の為のワークインプログレス『私の家族』東京(森下スタジオ)
12月: トリコ・A番外公演『幸福な王子』京都(京都市東山青少年活動センター)
2017年3月: サファリ・P第二回公演『悪童日記』京都、東京(アトリエ劇研、こまばアゴラ劇場)
- ▶ Grant-receiving term
From 2016 to 2018
- ▶ Details on support during fiscal year 2016
Grant: ¥2,500,000 (used for performances, research and study, etc.)
Studio Rental: 12 days
Guest Room Rental: 17 days
- ▶ Major activities during fiscal year 2016
October 2016: Work in Progress *My Family*, at Morishita Studio in Tokyo
December: *The Happy Prince*, Toriko・A, in Kyoto
March 2017: *Le grand cahier*, Safari・P, in Kyoto and Tokyo



サファリ・P第二回公演『悪童日記』京都、2017年3月
撮影: 堀川高志
Le grand cahier, Safari・P in Kyoto, March 2017
Photo: Takashi Horikawa



東野祥子
(振付家・ダンサー 「ANTIBODIES Collective」主宰)[舞踊/京都]
Yoko Higashino
(choreographer, dancer and artistic director of ANTIBODIES Collective) [dance/Kyoto]
http://www.antibo.org/
撮影: Fuzzy Photo: Fuzzy

- ▶ 継続助成対象期間
2016年度から2018年度まで
- ▶ 2016年度の助成内容
金額: 2,500,000円(公演、機材に充当)
スタジオ提供: 26日間
ゲストルーム提供: 8日間
- ▶ 2016年度の主な活動
2016年5月: ANTIBODIES Collective『A界限』東京(ザムザ阿佐ヶ谷とその界限)
6月: ANTIBODIES DANCE WORKSHOP&成果発表 Vo.1 東京(森下スタジオ)
8-9月: ANTIBODIES イタリアツアー ヴェネト、ポロニーヤ(「Operaestate Festival」、「Danza Urbana Festival」)
10月: ANTIBODIES Collective『惑星共鳴装置』東京(東京都庭園美術館)
ANTIBODIES Collective『DUGONG』福岡(福岡市立中央市民センター)
11月: ANTIBODIES Collective『「A界限」とは何だったのか?』京都(京都大学 西部講堂)同時開催『「A界限」とは何だったのか?』インスタレーション 京都(UWU)
- ▶ Grant-receiving term
From 2016 to 2018
- ▶ Details on support during fiscal year 2016
Grant: ¥2,500,000 (used for performances, etc.)
Studio Rental: 26 days
Guest Room Rental: 8 days
- ▶ Major activities during fiscal year 2016
May 2016: *A - KAIWAI*, ANTIBODIES Collective, at Zamza Asagaya and public area in Tokyo
June: ANTIBODIES DANCE WORKSHOP & Showing Vo.1, at Morishita Studio in Tokyo
August-September: ANTIBODIES Italy Tour and Workshop, in Veneto and Bologna ("Operaestate Festival VENETO", "Danza Urbana Festival")
October: *UNIVERSAL MODULATOR*, ANTIBODIES Collective, at Tokyo Metropolitan Teien Art Museum in Tokyo
DUGONG, ANTIBODIES Collective, at Fukuoka City Central Public Center in Fukuoka
November: *What was "A KAIWAI"?*, ANTIBODIES Collective, at Kyoto University Seibu-kodo in Kyoto
Installation "What was "A-KAIWAI"?", at UWU in Kyoto



ANTIBODIES Collective『A界限』東京、2016年5月
撮影: Bozzo
A - KAIWAI, ANTIBODIES Collective, in Tokyo, May 2016
Photo: Bozzo



多田淳之介

(劇作家・演出家 「東京デスロック」主宰、
「富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ」芸術
監督) [演劇/東京]

Junnosuke Tada

[playwright, director and artistic director
of TOKYO DEATHLOCK / Fujimi Public
Theater KIRARI☆FUJIMI] [theater/Tokyo]
<http://deathlock.spectors.net>
<http://www.city.fujimi.saitama.jp/30shisetsu/99kirari/>
撮影:やじまえり Photo: Eri Yajima

▶継続助成対象期間

2015年度から2017年度まで

▶2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶2016年度の助成内容

金額:2,500,000円(公演に充当)

スタジオ提供:29日間

▶2016年度までの主な活動

2016年5月:安山ストリートフェスティバル「安山巡礼道」参加 ソウル
5-6月:木ノ下歌舞伎『義経千本桜〜渡海屋・大物浦〜』演出 愛知、
東京(愛知県芸術劇場小、東京芸術劇場、豊川市御津文化会館)

6-7月:『RE/PLAY Dance Edit.』カンボジアVer. 滞在制作

10-12月:東京デスロック『亡国の三人姉妹』神奈川、京都、香川、新
潟、埼玉(横浜赤レンガ倉庫、アトリエ劇研、四国学院大学 ノース
スタジオ、リゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館、富士見市民文化
会館キラリ☆ふじみ)

2017年1月:キラリ☆ふじみリージョナルシアターACT-F『超メガハイ
パーこどもステーション☆キラリ』構成・演出 埼玉(富士見市民文
化会館キラリ☆ふじみ)

2月:『Choreograph』演出 神奈川(「横浜ダンスコレクション2017」)

3月:『RE/PLAY Dance Edit.』カンボジアVer.

演出(Department of Performing Arts)

▶Grant-receiving term

From 2015 to 2017

▶Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥2,500,000 (used for performances, research and
study, etc.)

Studio Rental: 29 days

▶Major activities during fiscal year 2016

October-December 2016: *Three Sisters in a Lost Motherland*,
TOKYO DEATHLOCK, in Kanagawa, Kyoto, Kagawa, Niigata,
Saitama (YOKOHAMA RED BRICK WAREHOUSE, atelier
GEKKEN, SHIKOKU GAKUIN University NOTOS STUDIO,
Niigata City Performing Arts Center, Cultral Centre of Fujimi
City KIRARI FUJIMI)



東京デスロック『亡国の三人姉妹』神奈川、2016年10月

撮影:bozzo

Three Sisters in a Lost Motherland, TOKYO DEATHLOCK,
in Kanagawa, October 2016

Photo: bozzo



森下真樹

(振付家・演出家・ダンサー)

[舞踊/東京]

Maki Morishita

[choreographer, dancer]

[dance/Tokyo]

[http://maki-m.com/profile/index_](http://maki-m.com/profile/index_en.html)
[en.html](http://maki-m.com/profile/index_en.html)

撮影:427FOTO Photo: 427FOTO

▶継続助成対象期間

2015年度から2017年度まで

▶2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶2016年度の助成内容

金額:2,500,000円(公演、リサーチ等に充当)

スタジオ提供:78日間

▶2016年度までの主な活動

2016年7月:『錆からでた実』東京(東京芸術劇場)

9月:ストックホルムレジデンス

10月:満島ひかり×玉井夕海×森下真樹パフォーマンス

京都(清水寺舞台)

『どこをどうぶつる』福岡(北九州芸術劇場)

『ぶつる』東京(「六本木アートナイト」)

11月:森下真樹誕生日ワークショップシリーズvol.2

「生きているからだ」東京(森下スタジオ)

2017年1月:東芋パフォーマンス『網の外』振付・出演

京都(京都文化博物館)

▶Grant-receiving term

From 2015 to 2017

▶Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥2,500,000 (used for performances, research and
study, etc.)

Studio Rental: 78 days

▶Major activities during fiscal year 2016

July 2016: *Fruit borne out of rust*, at Tokyo Metropolitan
Theater in Tokyo

September: Residence in Stockholm

October: Performance with Hikari Mitsushima, Yuumi Tamai,
at Kiyomizu Temple in Kyoto

doubutsu o Tsukuru, at Kitakyushu Performing Arts Center in
Fukuoka

Butsuru, at "Roppongi Arts Night" in Tokyo

January 2017: *Out of Net*, Performance with Tabaimo, at Kyoto
Cultural Foundation in Kyoto



『錆からでた実』東京、2016年7月

撮影:bozzo

Fruit borne out of rust, in Tokyo, July 2016

Photo: bozzo



塚原悠也

(演出家・パフォーマー 「contact Gonzo」主宰)[パフォーマンス/大阪]

Yuya Tsukahara

(director, performer and artistic director of contact Gonzo)
[performance/Osaka]
<http://contactgonzo.blogspot.com/>

▶ 継続助成対象期間

2015年度から2017年度まで

▶ 2016年度までの助成金額(単位:円)

2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶ 2016年度の助成内容

金額:2,500,000円(公演等に充当)

▶ 2016年度の主な活動

2016年7-9月:コンタクトゴンゾオリジナルビデオゲーム『伊吹島ドリフト伝説』を発表 香川(「瀬戸内国際芸術祭」)

8-10月:コンタクトゴンゾパフォーマンス ハンブルグ、フランクフルト、ベルリン、パリ、ミュンヘン(「グレイテスト・ショー・オン・アース」)

2017年2-3月:コンタクトゴンゾ個展「フィジカトピア」およびパフォーマンス「contact Gonzo × 植野隆司」「contact Gonzo × DJ方」東京(ワタリウム美術館)

3月:大阪市中津を拠点とするアートスペース4箇所の共同開催展覧会。コンタクトゴンゾはオリジナルゲーム『土食べ軍団・中津暴動編』を発表 大阪(コンタクトゴンゾ事務所、ミミヤマミシン、SOMA, PANTALOON)

▶ Grant-receiving term

From 2015 to 2017

▶ Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	5,000,000

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥2,500,000 (used for performances, etc.)

▶ Major activities during fiscal year 2016

July – September 2016: *Ibuki Island Drift Legend*, contact Gonzo, at “Setouchi Triennale” in Kagawa

August-October: Performances, contact Gonzo, at “The Greatest Show on Earth” in Hamburg, Frankfurt, Berlin, Paris, Munich

February-March 2017: solo exhibition, contact Gonzo, at Watarium Contemporary Art Museum in Tokyo

March: “psmg” co-produce exhibition at 4 different art spaces in Nakatsu and the movie *MINIMA MORALIA*, contact Gonzo, at PANTALOON in Osaka



コンタクトゴンゾパフォーマンス「グレイテスト・ショー・オン・アース」

ハンブルグ、2016年8月

撮影:Anja Beutler

Performance, contact Gonzo, at “The Greatest Show on Earth” in Hamburg, August 2016

Photo: Anja Beutler



危口統之

(演出家 「悪魔のしるし」主宰)
[演劇/東京、神奈川]

Noriyuki Kiguchi

(director and artistic director of
AKUMA NO SHIRUSHI)
[theater/Tokyo, Kanagawa]
<http://www.akumanoshirushi.com/>

▶継続助成対象期間

2014年度から2016年度まで

▶2016年度までの助成金額(単位:円)

2014年度	2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶2016年度の助成内容

金額:3,000,000円(公演、自己研修に充当)
スタジオ提供:3日間

▶2016年度の主な活動

2016年7月:シリーズ語りの技法『劇的なものをネグって』
東京(Kanzan Gallery)
10月:悪魔のしるし『歌舞伎町百人斬り』東京(歌舞伎町路上)
2017年3月:悪魔のしるし『蟹と歩く』岡山(倉敷市立美術館講堂)

▶Grant-receiving term

From 2014 to 2016

▶Amount of continuous grants (in yen)

2014	2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥3,000,000 (used for performances, research and study)

Studio Rental: 3 days

▶Major activities during fiscal year 2016

July 2016: *off the dramatic passions*, at Kanzan Gallery in Tokyo
October: *massacre in Kabuki-cho*, AKUMA NO SHIRUSHI, organized by Chim ↑ Pom, on Kabuki-cho street in Tokyo
March 2017: *Walking with Cancers*, AKUMA NO SHIRUSHI, at Kurashiki City Museum in Okayama

危口統之の2014-2016年度の活動について

高橋宏幸(演劇批評家)

この三年間の危口統之はアーティストとして堅調に歩んだのではないかと。代表作ともいえる大きな作品が生まれたわけではないかもしれない。だが、いくつもの作品、『わが父、ジャコモッティ』やいわき総合高校での『はだかのオオカミ』、ギャラリーでの『劇的なものをネグって』など、多彩な活動があった。他にもさまざまな企画への演出的な協力を行なっている。

それは、彼のスタイルとして、状況を含めて、作品を斜めから見る視点が自身の作品への演出を超えて様々な現場で求められたからだろう。最後の死に対してのブログもそうだ。それは一個人の視点として、死そのものを見つめつつ、その視点をずらして、死を対象化する面をもっていた。

だが、ときにその斜めから見る視点で作られた作品は、斜に構えて、歴史や大作に寄生してはじめて成り立つものとも捉えられてしまう。かつてならばポストモダンのとも言われたのだろうが、いまそのスタイルが有効的に成り立ちえるのか。もしくは、その大なる物語や歴史を解体して、再構築できていたのだろうか。もはやそのようなものがなくなった今において。

現場のレベルにおとしてしまうと、細かい仕事はくるだろうが、便利屋で終わるのではないかと。だからこそ、これからどのような展開/転回を示すのが期待された矢先だった。たしかに、「搬入プロジェクト」は世界のさまざまな場所で行われた。しかし、それをかれの代表作にして総括してしまっているのだろうか。まだまだ他にもさまざまな作品が創られ、これからかれの新しい活動は始まるのではないかと。その期待があった。

ただし、そのようなありふれた凡庸な期待自体を斜めから見たような、突如切れて残ったかれの言葉たちは、最後まで自分のスタイルを貫いたようでもある。

結末を含めて、その軌跡は短い期間であったかもしれないが、ひとりの作家のスタイルとしてある。



悪魔のしるし『わが父、ジャコモッティ』スイス国内3都市ツアー、2014年11月
撮影:荒木悠

MON PÈRE, GIACOMETTI Switzerland Tour, AKUMA NO SHIRUSHI,
November 2014
Photo: Yu Araki



『はだかのオオカミ』茨城、2016年1月
撮影:佐原輝明

A Naked Wolf, in Ibaraki, January 2016
Photo: Teruaki Sahara

On Noriyuki Kiguchi's Activities From 2014 to 2016

By Hiroyuki Takahashi, Theatre Critic

I believe we can say Noriyuki Kiguchi advanced steadily as an artist during these three years. Maybe it was a period lacking in significant works that could be counted as his masterpieces. Yet there were a variety of activities including quite a few works such as *Mon Père*, *Giacometti*, in which his own father played the role of a father, *A Naked Wolf* with high school students at Iwaki Sogo High School, and a piece shown at a gallery titled *off the dramatic passions*, which was inspired by Tadashi Suzuki's monumental work, *on the dramatic passions*. Additionally, Kiguchi contributed his skills as a director to numerous projects as well.

Perhaps this was because Kiguchi's cynical perspective towards productions and the circumstances surrounding them - rather than his dramatic skills of his own works - was viewed as his style as an artist and became in demand widely. Kiguchi's unique perspective is evident even in his blog on death written during the last days of his life; while looking at death itself from a personal perspective, he would shift his perspective and thus add the aspect of objectifying death in his blog.

Some argued - with doses of cynicism - that those pieces created from Kiguchi's cynical perspective were only possible because they parasitized history or epics. In the past they might have been described as post-modern works, but is that kind of style still valid now? Moreover, is it even possible to deconstruct and then reconstruct great stories or a part of history? Especially in an era when such things are absent from our lives?

On a more down-to-earth, on-site level, Kiguchi would probably have kept on receiving small-scale offers, but then he might have ended up becoming a handy man. That's precisely why people were anxious to see what sort of developments and twists he had up his sleeve. Indeed, the Carry-in-Project series toured in many places around the world, but would it be appropriate to label it as his most important work when many other different kinds of pieces might be created in the future? There was hope that the artist would embark on something new soon.

Yet it seems as if Kiguchi's words, which give the impression that even our banal and mediocre hope towards him would be seen from a cynical perspective, and that were cut off suddenly and left behind, have persevered their own unique style to the very end.

Although the tracks he left until the end of his story may be short, they remain here with us as the style of one artist.



『劇的なものをネグって』東京、2016年7月

撮影：前澤秀登

off the dramatic passions, in Tokyo, July 2016

Photo: Hideto Maezawa



悪魔のしるし『搬入プロジェクト#16』ブダペスト、2014年5月

撮影：危口統之

Carry-In-Project #16, AKUMA NO SHIRUSHI, in Budapest, May 2014

Photo: Noriyuki Kiguchi



筒井潤

(劇作家・演出家 「dracom」主宰)
[演劇/大阪]

Jun Tsutsui

(playwright, director and artistic
director of dracom)
[theater/Osaka]
http://dracom-pag.org/

▶継続助成対象期間

2014年度から2016年度まで

▶2016年度までの助成金額(単位:円)

2014年度	2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶2016年度の助成内容

金額:3,000,000円(事業・管理・経常費・自己研修等に充当)

スタジオ提供:12日間

ゲストルーム提供:24日間

▶2016年度の主な活動

2016年7、11月:dracom祭典『今日の判定』『ソコナイ図』

京都、東京(アトリエ劇研、森下スタジオ)

9月:ドイツ同時代演劇リーディングシリーズVISIONEN Vol.7『いけない、この惑星じゃない!』共同演出 大阪(大阪ドイツ文化センター)

大阪大学総合学術博物館《記憶の劇場》活動(7)vol.2「アクトとプレイで学びほぐす-記憶とドキュメント・アクション」ファシリテーター

大阪(アートエリア B1)

10月:『Silent Seeing Toyooka ~聴こえない音・観えない光景を巡る旅~』総合演出 兵庫(豊岡市内各所)

11月:高槻シニア劇団そよ風ペダル 『ほとぼり』作、演出

大阪(高槻現代劇場)

毎月1回、関西で上演される舞台作品をテーマとした茶話会「ざろんさん」を実施。

▶Grant-receiving term

From 2014 to 2016

▶Amount of continuous grants (in yen)

2014	2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥3,000,000 (used for projects, arts management and research and study)

Studio Rental: 12 days

Guest Room Rental: 24 days

▶Major activities during fiscal year 2016

July, November 2016: dracom SAITEN *Today's Judgement / Sokonai-zu*, in Kyoto and Tokyo (Atelier GEKKEN, Morishita Studio)

September: *Oops, wrong planet !*, German contemporary theater reading series VISIONEN Vol.7, at FLAG studio in Osaka organized Monthly Salon Talk Event "Zaron Saron"



dracom 祭典2014『gallery (extra version)』大阪、2014年10月
dracom SAITEN 2014 *gallery (extra version)* in Osaka, October 2014

筒井潤の2014-2016年度の活動について

岡田 蒔子(大阪大学博士後期課程単位取得退学 近現代演劇研究)

筒井潤の三年間の活動は多岐に渡るが、一貫して地域と人の関係性のあり方を問う姿勢があった。

初年度には観客と創作者とが関西演劇界に関して自由に意見を交わす場「ざろんさん」の企画運営を始め、毎回の報告をSNSで公開し広く共有した。大阪の劇作家三人の短編を取り上げ上演する『たんじょうかい』(Short Drama Presentation) (2014年、2015年)では、再演を通して他劇団と緩やかな繋がりを形成した。美術作品を巡る『gallery』では大阪府が収蔵する大阪府20世紀美術コレクションから選ばれた実際の美術作品とコラボレートした。これらは大阪という地域で魅力的な創作をする可能性の模索であったのではないだろうか。

次年度の『ソコナイ図』は地域で創作する面白さを十分に生かした作品となった。年越しの夜に損なわれゆく姉妹の命を巡る物語が、西成区にある築60年の木造アパートを再活用した小さなギャラリーで大晦日から新年にかけて上演されたのだが、劇内容と場所、上演時間の設定が合致したサイトスペシフィックな公演であった。戯曲は実際にあった姉妹の孤独死事件を元に書かれており、救済措置が十全に機能しない福祉社会の落とし穴を見据える劇作家としての眼差しが印象的であった。

最終年度はより広い地域を射程に入れた年となった。例えば『ソコナイ図』と二本立てで上演された『今日の判定』では、オリンピックを素材に競技開始から観客の熱狂の中で競技者が膠着状態に陥るまでが喜劇調に描かれるのだが、舞台背面の映像を用いて戦争や経済など様々な構造へ問題意識が広がる仕掛けがあった。『ソコナイ図』と並べて上演することで、制度や規則では完全には制御できない現代社会構造の一端を鋭く切り取る批評的な公演となっていた。

他にも高槻シニア劇団との関わりやTPAM2016でのアジアの芸術家へのインタビューなど、三年間で筒井の「地域」は広がった。他者との繋がりを大切にする姿勢はそのままに、自由に大胆に世界を切り開いてほしい。



dracom 祭典『ソコナイ図』大阪、2015年12月
dracom SAITEN *Sokonai-zu*, in Osaka, December 2015

On Jun Tsutsui's Activities From 2014 to 2016

By Fukiko Okada, Ph.D. candidate of Osaka University, Modern Theatre Studies

Jun Tsutsui's activities during these three years were diverse; yet all of his projects consistently questioned the relationship between communities and the people who live in them.

In his first year as a Senior Fellow, Tsutsui began organizing a platform called *Zaron Saron*, where audience members and artists can freely discuss issues related to the theater scene in the Kansai region, and he shared the contents of each discussion widely through social network systems. Another project known as *Tanjoukai (Short Drama Presentation)*, which staged the short works of three Osaka-based playwrights in 2014 and 2015, helped him build a casual relationship with other theater companies through repertoires. Tsutsui also worked with the prefectural government of Osaka on a project titled *gallery*, which featured selected works from the Osaka Prefecture Contemporary Art Collection. It could be said that these projects were held in pursuit of an attractive setting for creating art in the community of Osaka.

The play *Sokonai-zu*, which was produced in the second year of this grant, made the best of creating work in a particular community. The story of two sisters whose lives perish during the last night of the year was staged in a small gallery that recycled a sixty-year-old wooden apartment in Nishinari, Osaka, from December 30, 2015 to January 3, 2016. It was a site-specific work in which the contents, the location, and the actual running time of the play all coincided with each other. The play was based on an actual incident of two sisters who died alone without being noticed for days, and I was impressed with Tsutsui's gaze as a playwright, which was directed towards the

pitfall of our welfare society where relief measures fail to function sufficiently.

A much larger community became the theme of Tsutsui's work in his final year as a Senior Fellow. *Today's Judgement*, which was coupled with *Sokonai-zu*, was a play inspired by the Olympic games and comically portraits a game from its start till the athletes become deadlocked amid the frenzy of the spectators. The production also cleverly addressed the problems of various structures in today's society through images of war, economics, etc., that were projected in the background. By showing this play with *Sokonai-zu*, *Today's Judgement* became a critical piece that revealed a segment within our contemporary society that cannot be kept under control completely by systems or rules.

In addition to the above projects, the scale of Tsutsui's "community" expanded within these three years through other activities such as his work with a senior citizens' theater company in Takatsuki and by interviewing Asian artists who participated in TPAM (Tokyo Performing Arts Meeting) 2016. I hope Tsutsui will keep on carving out his own niche dynamically while valuing the association with others as he has been doing throughout these years.



dracom祭典『今日の判定』京都、2016年7月

撮影: TAKE nob

dracom SAITEN *Today's Judgement*, in Kyoto, July 2016

Photo: TAKE nob



梅田宏明

(振付家・ダンサー・ビジュアルアーティスト) [舞踊/東京]

Hiroaki Umeda

(choreographer, dancer, visual artist) [dance/Tokyo]

<http://hiroakiumed.com/>

撮影: Shin Yamagata Photo: Shin Yamagata

▶ 継続助成対象期間

2014年度から2016年度まで

▶ 2016年度までの助成金額(単位:円)

2014年度	2015年度	2016年度	合計
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶ 2016年度の助成内容

金額: 3,000,000円(事業、制作人件費、機材に充当)

スタジオ提供: 25日間

▶ 2016年度の主な活動

2016年6月: 『Somatic Field Project』公演 振付

東京(セッションハウス)

ダンサー、メディア・アーティストのワークショップ

香港(West Kowloon Cultural District Authority)

8月: 『Drives』振付(Trafo, Sziget Festival, SIN Culture

CentreとS20の共同制作) ブダペスト(『Sziget Festival』)

9月: 『Drives』振付『Holistic Strata』 ブダペスト(Trafo)

12月: 『Kinetic Force Method』ワークショップ

バンクーバー(Co.ERASGA Dance)

『Holistic Strata』『Somatic Field Project』公演 振付

東京(東京藝術大学球形ホール)

2017年2-3月: 『Kinetic Force Method』ワークショップ

東京(森下スタジオ)

▶ Grant-receiving term

From 2014 to 2016

▶ Amount of continuous grants (in yen)

2014	2015	2016	Total
2,500,000	2,500,000	3,000,000	8,000,000

▶ Details on support during fiscal year 2016

Grant: ¥3,000,000 (used for projects, company management fee, etc)

Studio Rental: 25 days

▶ Major activities during fiscal year 2016

June 2016: Workshop for dancers and media artists, organized by West Kowloon Cultural District Authority, in Hong Kong

August: *Drives*, Choreography for 5 Hungarian dancers, collaboration project with Trafo and Sziget Festival and SIN Culture Centre, at Sziget Festival in Budapest

September: Performance of *Drives* and *Holistic Strata*, at Trafo in Budapest

December: Workshop Kinetic Force Method, organized by Co.ERASGA Dance, in Vancouver

Holistic Strata, at Tokyo University of the Arts in Tokyo

February- March 2017: Workshop at Morishita Studio in Tokyo



『Drives』ブダペスト、2016年8月
Drives, in Budapest, August 2016

梅田宏明の2014年度—2016年度の活動について
越智雄磨(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館招聘研究員)

この3年間で梅田宏明が国内外で発表した幾つかの作品と梅田自身が考案した「Kinetic force method」のワークショップを見ることができた。梅田の活動で特筆すべき点は、作品創造において顕著な成果を出していることと、他者へ伝達可能な振付のメソッドを考案し、実践に移していることにある。

2014年度には、『Intensional Particle』をフランスで創作し、2015年度、2016年度にわたり欧州、北米、アジアなどの複数の国でツアー公演を行った。黒を基調とした舞台の中、無数の白いラインが縦横に疾走する。そのグラフィックは徐々に複雑で過密なものとなり、また、それに同期するように錯綜するノイズとパルスがランダムに観客の聴覚を刺激する。そのようなデジタルな視覚情報と聴覚情報のオーバーフローの中に梅田の身体が拮抗して存在する。梅田のダンスは、情報と人口の過剰な流入によってめまぐるしい価値転換が起こり、歴史的アイデンティティが希薄になりつつある現代に生きる私たちに向けられた、超-歴史的な美を備えた身体表現であるように思われた。

梅田が考案した「Kinetic Force Method」は「特定のダンススタイルに限定されない身体の運動メソッド」と本人によって説明されているように、人が自身の身体に対して持っている先入観や意識のリミッターを解除してニュートラルな身体の状態を作り出し、その上で、重力とそれに対する足の反発力から動きを軸として力のフローを生み出す。梅田の振付は、こうした運動原理を動きの生成規則(generative rule)として共有し、個々のダンサーに実装させることを企図している。梅田は2015年度に、アジア8カ国のダンサーとともにレジデンスを行い、作品を振り付けているが、他者と共有するために考案した振付メソッドを実践に移している点も評価できる。

梅田の作品や振付メソッドが国際的に受け入れられているのは、もはや単一の歴史やアイデンティティを共有することができない人々、つまり建築家レム・コールハースが「ジェネリック・シティ」と呼んだような現代の都市の住人が、共有することができるかもしれない普遍的な美の可能性の探求に足を踏み入れているからではないだろうか。



「Kinetic force method」を使ったSomatic Field Project『5. waves』
神奈川、2015年9月
撮影:塚田洋一

5. waves, Somatic Field Project based on “Kinetic force method”,
in Kanagawa, September 2015
Photo: Yoichi TSUKADA

On Hiroaki Umeda's Activities From 2014 to 2016

By Yuma Ochi, Invited Researcher, The Tsubouchi Memorial Theatre Museum, Waseda University

I had opportunities to see several performances by Hiroaki Umeda that were shown in and outside of Japan, and also observe workshops featuring his Kinetic Force Method. The noteworthy aspects of Umeda's activities are that he has produced remarkable results in his creative work, and devised a choreography method that can be transmitted to others and put it into action.

Umeda produced *Intensional Particle* in France in 2014, which toured countries in Europe, North America, and Asia in 2015 and 2016. It was a dance piece with numerous white lines whirling vertically and horizontally over a stage in black. In sync with the graphics, which gradually became more complex and concentrated, a welter of noise and pulses randomly stimulated the auditory sensation of the audience. Umeda's body was present upon stage as a competitive force against the overflow of visual and audio digital information. His dance seemed like a physical expression combined with a trans-historical aesthetic directed towards us who live in a world where the excessive inflow of information and population keep on changing our values at a dizzying pace and gradually dilute our sense of historical identity.

According to Umeda, his Kinetic Force Method is "a body movement method that does not belong to any certain style of dance". It helps people to free themselves from the perceived notions they have against their bodies, unlock the consciousness that limits their movements, and thus attain a physically neutral condition. Once this condition is achieved, a flow of power is produced by using the movement produced both by gravity and the repulsive force of the feet

against it as an axis. Umeda's choreography aims to share this body movement principle as a generative rule of movements and apply it to each dancer. Umeda used this choreography method at a residency with dancers from eight Asian countries and choreographed a piece with them in fiscal year 2015, and the fact that he actually put this method that he devised to share with others into practice also deserves praise.

Perhaps the reason why Umeda's works and his choreography methods are accepted internationally is that the people who find it impossible to share a unified sense of history or identity anymore, i.e., the inhabitants of today's cities that the architect Rem Koolhaas described as "The Generic City", have stepped forward in search of the possibility of an universal aesthetic that they might be able to share with each other.



『Intensional Particle』クレテイユ、2015年3月
撮影：S20

Intensional Particle in Créteil, March 2015
Photo: S20

1. 現代演劇・舞踊助成——創造環境イノベーション

これまでの創造環境整備を2016年度よりプログラム内容を改編し、それに伴ってプログラム名も創造環境イノベーションと改名した。現代演劇・舞踊界が現在抱えている問題点を明らかにし、その創造的解決を目指した新規事業に対して支援する。予め課題が設定されている「課題解決支援」、および新規事業の立ち上げを支援する「スタートアップ支援」の2つのカテゴリで公募し、「課題解決支援」の2016年度のテーマは「舞台芸術の観客拡大策」とした。2016年度は両カテゴリで9件の事業に対して助成を行った。

「課題解決支援」は2件の事業に対して助成を行った。劇研は京都国際舞台芸術祭実行委員会と共催で「京都の観光産業と劇場および舞台芸術フェスティバルとのネットワークの確立」を実施。年間を通じての観光産業関係者との研究会、宿泊施設と劇場・フェスティバルの予約ホットラインの設置により、舞台芸術が観光資源の一つとして認知されることを目指した。しかしながら予約ホットラインは、宿泊施設側に対応できない事情が判明したことにより実現できなかった。事業内容を見直すこととなったが、3回開催された研究会での、宿泊施設と観光関係者との情報・意見交換を通じて見えてきた課題解決に向けた新たな施策を待ちたい。横浜市芸術文化振興財団は「企業・地域と劇場をつなぐ赤レンガ・ダンスプロジェクト」を実施。地域での創客を目的とし、「ダンスを楽しむ」「劇場を知る」「新たな観客創造」をテーマに、企業・地域と劇場が連携して、ダンス作品を共同制作し、ダンス動画を公開するというもの。同財団は、赤レンガ倉庫1号館のホールにおいて、横浜ダンスコレクションなど数多くのダンス事業を行っているが、地域の住民、地域の企業で働く人々のコンテンポラリーダンスや、ホールに対する認知度はまだまだ低いと感じており、まずはそれらを知ってもらうことから始め、創客につなげようという事業である。2016年度は横浜を拠点とする企業、JVCケンウッドをパートナーとして、珍しいキノコ舞踊団の伊藤千枝が振付を担当し、同社の社員有志がダンサーとして出演するダンス動画が作られた。映像はウェブサイト、YouTube、SNSで公開された。この事業は複数の新聞に取り上げられ、多くの人に知られる機会も得られた。参加した社員の評判もよいようだ。この事業によって赤レンガ倉庫のホールに対して親近感を持った人もいたとのこと。ここからいかに実際に劇場、コンテンポラリーダンスの公演に来てもらうことにつなげるかが次の大きな課題となる。この事業は2017年度も新たなパートナーとともに継続される。

「スタートアップ支援」では新たに2件の事業に対して助成を行った。アートネットワーク・ジャパンと姜侖秀はそれぞれ

東京都立川市と、岡山県真庭市で、行政と連携し、演劇の手法を通じて、コミュニティの活性化に取り組み、地域の人々の芸術への関心を高めようとしている。アートネットワーク・ジャパンによる「立川市南側エリア創客プロジェクト」は、廃校を利用した「たちかわ創造舎」を拠点に、行政、公共ホール、商工会議所、商店街、学校、図書館等が横断的に連携して演劇を通じた事業を実施することで相乗効果を高め、コミュニティの再生という課題解決に寄与すると共に演劇の創客へつなげていこうとしている。成功すれば地方都市のモデルケースになると思われる。立川市や市の文化振興財団と共に行った、12月の立川市内での親子向けの公演は、2016年度の成果を測る事業でもあったが、目標を大きく上回る集客ができた。たちかわ創造舎の活動については新聞からタウン誌まで幅広いメディアで数多く取り上げられており、注目の高さがうかがえる。周辺の市からも「放課後シアター」の上演依頼を受けるなど、立川市にとどまらない演劇の創客も望めそうだ。いくつかの事業には課題が浮上しているようだが、地域の様々な組織とよい関係を続けていくことで、事業がよりよく展開していくものと思われる。姜侖秀は「インターナショナル・シェアハウス『テ(照)ラス』」を実施。姜は真庭市地域おこし協力隊として活動を始め、総務省主催の「ふるさと納税を活用したクラウドファンディング」のモデル事業に選ばれるなどして、シェアハウス事業を開始した。ワーキングホリデー等で来日する外国人などに有償で滞在してもらい、一室をアーティスト1名に無償提供し滞在してもらい。活動してもらい、アーティストはワークショップ等を通じて地域にコミットしながら活動し、収入を得るという仕組みだ。2016年度の活動は多くのメディアにも取り上げられ、入居者と住民との交流が増す中で理解が得られ、活動が発展してきているようだ。2017年度は創作や教育の場を求めている住民とアーティストが共に運営、活動する新たな拠点を作り、より住民とアーティストが密接に関わることで、住民はアーティストの創作活動をサポートし、アーティストは地域の魅力や課題を発見する役割を担っていく。舞台芸術のアーティストの入居者を得て、舞台芸術を通じた地域の活動が展開されることを期待したい。

2年目の助成となったアジア女性舞台芸術会議実行委員会による「第2回アジア女性舞台芸術会議」の事業は主に森下スタジオで開催され、国際共同制作公演を中心に、レクチャー、勉強会、プレゼンテーション、公開会議が実施された。2017年度は関西でも事業が開催されるので、告知にも注力し、アジア女性舞台芸術会議とその活動を広める貴重な機会として活かしてほしい。Explatによる「舞台芸術の

アートマネジメント専門職に向けた人材育成と雇用環境整備のための中間支援組織「Explat」は2015年度からの継続事業に加え、文化庁の委託事業として舞台芸術制作者の労働環境実態調査と全国6都市での「CINARS(カナダ・モントリオールの国際舞台芸術見本市)特別集中講義『カンパニーを国際化するための専門知識とメソッド』」を実施。多くの事業を他組織と連携して実施している。芸術公社による「シーン/アジア-アジアの観客空間をつくる」では、アジアにて複数の事業が、国内では東京で1事業が実施された。2017年秋にミュンヘンで開催されるフェスティバルでキュレーションを任されるなど海外での認知度も高まりつつあるようだ。2017年度は東京で複数のイベントが予定されているので、この機会に国内の観客へのフィードバックにしっかり取り組み、認知度も高めてほしい。

障害者と舞台芸術の関わりをテーマとした2つの事業が助成最終年度となった。クリエイティブ・アート実行委員会による「境界を越えるダンス」では、障害のある人を含む「インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyo」の作品の振付をスズキ拓朗とディディエ・テロンに依頼して作風の異なる2作品を上演し、好評を博した。スズキ拓朗振付作品の創作から上演へのプロセスがNHKの番組で取り上げられるなど、カンパニーの活動への認識、注目が高まっている。活動の継続、発展には障害者のための物理的なアクセシビリティから社会制度まで、多くの問題、課題があることが想像されるが、2020年のパラリンピックを追い風に、彼らの活動がそれらの改善につながることも期待したい。シアター・アクセシビリティ・ネットワークによる「観劇サービス支援事業」は、予定通りに活動を実施し、成果を上げた。特に観劇支援システム構築のための研究委員会によって「10の提言」を作成し、年度末のシンポジウムで発表できたことは大きな成果と言える。シンポジウムでもスピーカーから言及されていたが、2020年度に向けて、提言を1つ1つ実現していくことが今後より重要である。2017年度の第4回シンポジウムは大阪で予定されており、いっそう活動が広がり、観劇支援の必要性への認識が高まり、提言の実現につながることを期待したい。



横浜市芸術文化振興財団「企業・地域と劇場をつなぐ 赤レンガ・ダンスプロジェクト」神奈川、2016年11月 撮影：菅原 康太
 "Akarenga Dance Projects connects Theatre with Company / Community" organized by Yokohama Arts Foundation in Kanagawa, November 2016.
 Photo: Kota Sugawara



アジア女性舞台芸術会議実行委員会「第2回アジア女性舞台芸術会議」での公演 森下スタジオ、2016年12月 撮影：宮川 舞子
 Performance at "The 2nd Conference of the Asian Women Performing Arts Collective" organized by Asian Women Performing Arts Collective at Morishita Studio, December 2016.
 Photo: Maiko Miyagawa



アートネットワーク・ジャパン「放課後シアター」東京、2016年11月
 "Audience Creation Project in Tachikawa City South Area" organized by Arts Network Japan in Tokyo, November 2016.



Explat「CINARS特別集中講義『カンパニーを国際化するための専門知識とメソッド』」東京、2017年2月
 "Seminar by CINARS" organized by Explat in Tokyo, February 2017.

1. Contemporary Theater and Dance : - *Creative Environment Innovation Program*

In 2016, we reformed the content of the Creative Environment Improvement Program and renamed it "Creative Environment Innovation Program." It supports new projects that identifies, and seek creative solutions for issues that the contemporary theater and dance sectors have been confronted with. We invited applications for two categories: "Support for Problem-Solving Projects" for which an issue was already proposed, and "Support for Startup Projects" that helps launch a new project. We chose "Audience Expansion Solutions" as the 2016 theme for "Support for Problem-Solving Projects." We supported nine projects in total over the two categories in 2016.

"Support for Problem-Solving Projects" was given to two projects. **NPO Gekken** aimed "To establish the network between tourism industry, theater and theatrical festival" jointly with the Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee. They tried to make performing arts recognized as a tourism resource by organizing seminars inviting people from the tourism industry and establishing a reservation hotline between accommodations, venues and festivals. However, the reservation hotline was not materialized because it became clear the accommodation sector could not handle this. They have decided to reexamine the plans, and we look forward to hearing about their new strategy for finding solutions to the issue that they have been developing through exchanging information and thoughts with the accommodations and tourism sectors. **Yokohama Arts Foundation** carried out "Akarenga Dance Projects connects Theatre with Company / Community" aiming to create audiences in the region by co-producing dance works and making dance videos public around such themes as "enjoying dance," "learning about venues" and "creating new audiences" in cooperation with corporations, region and venues. The Foundation has organized a number of dance projects including Yokohama Dance Collection using the hall of Yokohama Red Brick Warehouse Number 1, but they still feel that contemporary dance and the hall have not yet been recognized enough among people who live or work in the region. The project is for promoting the recognition of the sector to create audiences. In 2016, with JVC KENWOOD Corporation based in Yokohama as a partner and Chie Ito of Strange Kinoko Dance Company as the choreographer, they created a dance video where volunteer employees of the corporation performed as dancers. The video was shown on their website, YouTube and social networks. The project was featured by newspapers, which improved the visibility. It is reported that the employees who took part in it appreciated the experience and some people felt closer to the hall of Yokohama Red Brick Warehouse. The next issue that they have to tackle is how to draw these people to contemporary dance performances at the venue. The project will continue with new partners in 2017.

"Support for Startup Projects" was given to two projects. **NPO Arts Network Japan (ANJ)** and **Yoonsoo Kang** aim to raise regional residents' awareness about art using methodologies of theater and reactivating the community in cooperation with the administration, the former in Tachikawa City in Tokyo and the latter in Maniwa City in Okayama. "Audience Creation Project in Tachikawa City South Area" by ANJ, based at Tachikawa Culture Factory that was renovated from an abandoned school, organizes theatrical projects in cooperation with the administration, public halls, the chamber of commerce and industry, shopping districts, schools and libraries to gain synergies, find solutions to the task of the region, namely the revitalization of the community, and create new audiences of theater. If they succeed, the project will establish a model for this type of activity in a regional city. A performance for parents and children that they presented in cooperation with Tachikawa City and Tachikawa Community & Culture Foundation in the city in December was considered the barometer of the effect of their activity in 2016, and it drew a much larger number of audience than they aimed. The activity of Tachikawa Culture Factory has been featured by a lot of newspapers and community papers, which speaks for the attention that the project has drawn. Even other cities surrounding Tachikawa have asked for the presentation of their "After School Theater Project," so they might be able to create audiences of theater also in other areas. We hear that some issues have surfaced in some of their programs, but we believe that by continuing their relationship with various organizations in the region will help the project develop better. Yoonsoo Kang conducts "International Sharehouse 'Terasu'." Kang started working as a member of the Community-Reactivating Cooperator Squad for Maniwa City, and his activity was selected as a model of the "cloud funding through the 'benefit-your-locality' tax scheme" promoted by the Ministry of Internal Affairs and Communications, which led to his share house project. People who visit Japan on Working Holiday programs or other opportunities may stay in the shared house for a fee, and an artist may use one room to stay for free. The resident artist will work there, make commitments to the community through workshop and other activities, and receive a reward. The project drew much attention from the media in 2016 and has been gaining understanding through exchange between the occupants of the shared house and regional residents. In 2017, a new base for local residents who need a place for creation and education and artists to work together and managed jointly by themselves, will be established. By having residents and artists get involved with each other more closely, it is expected that the residents will support the creative activities of the artists and the artists play a role in the revitalization of the community by discovering interesting sites and issues in the region. We expect that artists from the fields of performing arts will be one of the occupants and develop regional activities through performing arts.

Asian Women Performing Arts Collective, who received support for the second year, organized “The 2nd Conference of the Asian Women Performing Arts Collective” mainly at Morishita Studio. Lectures, seminars, presentations and open discussions were held around an international collaboration performance. The project will be organized also in the Kansai area in 2017. We expect it to be recognized widely as an opportunity for publicize the activities of the collective. In “‘Explat’ — an intermediate support organization to develop human resources for art management professionals of Performing Arts, and to enhance their working environment,” **Explat** carried out, in addition to their continuing programs since 2015, research on the labor conditions of performing arts managers and symposia in six cities across Japan commissioned by the Agency for Cultural Affairs, as well as an intensive series of lectures titled “Effective Strategies for International Touring” and invited a lecturer from CINARS, the international performing arts market in Montreal. They have been carrying out a lot of projects in cooperation with other organizations. In “Scene/Asia — Toward Active Spectatorship” by **Arts Commons Tokyo**, several programs in Asia and one program in Tokyo were carried out. We hear that they have been commissioned curation for a festival in Munich in 2017; it seems that they have been raising their visibility internationally. In 2017, they plan to hold several events in Tokyo. We expect them to work extensively to give feedback on audiences in Japan and raise awareness in this country too.

Two projects about the issue of disabilities and performing arts completed their grant-receiving term. “Dance beyond borders” by **Creative Art Executive Committee** invited Takuro Suzuki and Didier Théron to choreograph for the Integrated Dance Company Kyo and presented two works in different styles, which were well-received. As NHK featured the process from creation to presentation of the work by Suzuki, the company’s activities have been drawing attention. A lot of issues and tasks ranging from physical accessibility for the disabled to social systems must be involved in the continuation and development in their activities, but we expect that they contribute to the improvement of the situation with the Paralympics in 2020 in favor of them. **NPO Theatre Accessibility network** steadily carried out their plan for “Supporting access on theatre project” and achieved good results. Especially their “Ten Proposals” that were made by a researching committee for the development of theater accessibility systems and presented in a symposium at the end of the year were a very important result. As mentioned by a speaker in the symposium, it is important to materialize each of the ten proposals, one by one, toward 2020. The fourth symposium is planned to be held in Osaka in 2017. We expect that their activities will expand further, raising the awareness of the necessity of accessibility to theater performances and leading to the materialization of the proposals.



姜侖秀「インターナショナル・シェアハウス『テ(照)ラス』」岡山、2016年9月
“International Sharehouse “Terasu”” organized by Yoonsoo Kang in Okayama, September 2016.



クリエイティブ・アート実行委員会「インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響
第4回公演」東京、2017年2月 撮影：青木司
“The 4th Performance”, Integrated Dance Company Kyo, organized
by Creative Art Executive Committee in Tokyo, February 2017.
Photo: Tsukasa Aoki



芸術公社「Scene / Asia - アジアの観客空間をつくる」アニュアル・イベント
2017 香港、2017年3月
Annual Event 2017 of “Scene/Asia - Toward Active Spectatorship”
organized by Arts Commons Tokyo in Hong Kong, March 2017.



シアター・アクセシビリティ・ネットワーク「第3回シンポジウム」森下スタジオ、
2017年3月
“The 3rd Symposium” organized by Theatre Accessibility network
at Morishita Studio, March 2017.

課題解決支援：舞台芸術の観客拡大策

▶特定非営利活動法人劇研

京都の観光産業と劇場および舞台芸術フェスティバルとのネットワークの確立
2016年4月1日～2017年3月31日
京都(アトリエ劇研、KYOTO EXPERIMENT事務局他)
1,350,000円

▶公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

企業・地域と劇場をつなぐ 赤レンガ・ダンスプロジェクト
2016年4月1日～2017年3月31日
神奈川、東京(横浜赤レンガ倉庫1号館・屋外広場、JVCケンウッド本社・横浜事業所他)
1,800,000円

スタートアップ支援

▶アジア女性舞台芸術会議実行委員会

第2回アジア女性舞台芸術会議
2016年12月2日～12月18日
東京(お茶ノ水女子大学、森下スタジオ)
500,000円 スタジオ提供：35日間 ゲストルーム提供：35日間

▶NPO法人アートネットワーク・ジャパン(ANJ)

立川市南側エリア創客プロジェクト
2016年5月1日～2017年3月30日
東京(たちかわ創造舎他)
1,000,000円

▶特定非営利活動法人 Explat

人材育成と労働環境整備のための中間支援組織「Explat」
2016年4月1日～2017年3月31日
東京、京都、北海道、福岡、宮城、愛知(あうるすぽっと、森下スタジオ、アトリエ劇研他)
1,000,000円 スタジオ提供：1日間

▶姜侖秀

インターナショナル・シェアハウス「テ(照)ラス」
2016年4月1日～2017年3月31日
岡山(真庭市)
1,000,000円 スタジオ提供：1日間

▶クリエイティブ・アート実行委員会

境界を越えるダンス
2016年4月29日～2017年2月19日
東京(東京芸術センターホワイトスタジオ、森下スタジオ他)
1,000,000円 スタジオ提供：42日間 ゲストルーム提供：19日間

▶特定非営利活動法人芸術公社

Scene /Asia -アジアの観客空間をつくる
2016年7月26日～2017年3月21日
プノンペン、シェムリアップ、ホーチミン、ハノイ、シンガポール、東京、香港(CCAシンガポール現代美術センター、SHIBAURA HOUSE、香港アートセンター)
500,000円

▶特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

観劇サービス支援事業
2016年4月1日～2017年3月31日
首都圏(森下スタジオ他)
1,000,000円 スタジオ提供：3日間

1. Contemporary Theater and Dance :
- Creative Environment Innovation Program

9 Grantees / Total appropriations: ¥9,150,000

Support for Problem-Solving Projects:
Audience Expansion Solutions

▶ **NPO Gekken**

To establish the network between tourism industry, theatre and theatrical festival in Kyoto.

April 1, 2016 – March 31, 2017

Kyoto (atelier GEKKEN, etc)

¥1,350,000

▶ **Yokohama Arts Foundation**

Akarenga Dance Projects connects Theatre with Company / Community

April 1, 2016 – March 31, 2017

Kanagawa, Tokyo (Yokohama Red Brick Warehouse No.1 and Event Area, JVC KENWOOD Head Office, etc.)

¥1,800,000

Support for Startup Projects

▶ **NPO Arts Network Japan (ANJ)**

Audience Creation Project in Tachikawa City South Area

May 1, 2016 – March 21, 2017

Tokyo (Tachikawa Culture Factory, etc)

¥1,000,000

▶ **Arts Commons Tokyo**

Scene/Asia – Toward Active Spectatorship

July 26, 2016 – March 21, 2017

Phnom Penh, Singapore, Tokyo, Hong Kong, etc (SHIBAURA HOUSE, Hong Kong Arts Centre, etc)

¥500,000

▶ **Asian Women Performing Arts Collective**

The 2nd Conference of the Asian Women Performing Arts Collective

December 2 – December 18, 2016

Tokyo (Ochanomizu University, Morishita Studio)

¥500,000 Studio Rental: 35 days Guestroom Rental: 35 days

▶ **Creative Art Executive Committee**

Dance beyond borders

April 29, 2016 – February 19, 2017

Tokyo (Morishita Studio, Art Center of Tokyo, etc.)

¥1,000,000 Studio Rental: 42 days Guestroom Rental: 19 days

▶ **Explat**

“Explat” - an intermediate support organization to develop human resources for art management professionals of Performing Arts, and to enhance their working environment.

April 1, 2016 – March 31, 2017

Tokyo, Kyoto, Hokkaido, Fukuoka, Miyagi, Aichi (OWL SPOT, Morishita Studio, etc.)

¥1,000,000 Studio Rental: 1 day

▶ **Yoonsoo Kang**

International Sharehouse “Terasu”

April 1, 2016 – March 31, 2017

Okayama (Maniwa City)

¥1,000,000 Studio Rental: 1 day

▶ **NPO Theatre Accessibility network**

Supporting access on theatre project

April 1, 2016 – March 31, 2017

Tokyo, etc. (Morishita Studio etc.)

¥1,000,000 Studio Rental: 3 days

2. 現代演劇・舞踊助成——国際プロジェクト支援

日本と海外双方のアーティスト／カンパニーが協働し、計画性をもって複数年継続して作業が進展する国際プロジェクトに対して支援する。最長で3年にわたって助成金、および希望者には森下スタジオ、ゲストルームの使用優先権が付与される。2016年度は、新規4件、2015年度からの継続が6件採択されたうち、9件の事業が実施された。

今年度より採択した事業のうち、**マームとジプシー**は、初めての海外公演だった2013年フィレンツェ公演以降、イタリア各地で100人を超える参加者とワークショップを行ってきた。主宰する藤田貴大が日本ではできない試みとして、小さいながらも丁寧に関係を築いてきた事業が実り、時間をかけた今までにない創作プロセスを確立できたようだ。あらかじめ藤田が台本を用意する従来の方式ではなく、参加者へのインタビューを創作に反映させていく方法で、今後も海外との協働創作へ意欲が高まっている。イタリアでの滞在制作で作品を完成させる予定であったが、今年度はイタリア側の資金難により、やむなく日本のみで滞在制作を行った。日本での発表を経て、今後イタリアでの上演の機会を待っている。二つ目は**Organ Works**とスペインのダンスカンパニーProvisional Danzaとの協働制作企画Time of Conversationである。2002年よりワークショップや、共に創作をしたり関係を築いてきた平原慎太郎とカルメン・ワーナーが、これまでの活動の集大成として実施する事業。タイトル通り、ワーナーとの対話をコンセプトに創作。また平原はカンパニーの強化も視野に入れて、メンバーを積極的にプロジェクトに関わらせることで、制作能力やコラボレーションにおける進め方など育成にも力を入れている。これまでのワークショップのゲスト講師としての関係ではなく、今回のようなアーティスト同志対等な国際共同製作においては、創作過程におけるコミュニケーション(言語だけでなく、手順や、日本側内部での意思疎通)向上の必要性に直面している。今年度は来日時以外にも、1年を通して定期的に稽古の時間を設け、動画の交換をしながら創作を進め、2017年6月に公演を行った。**PortB**／高山明とドイツのムーゾントゥルム劇場をパートナーにした3年にわたる事業も今年度より採択している。建築家セドリック・プライスが1964年に提唱した都市計画「ポタリズ・シンクベルト」に想を得て、期間限定の「大学」をフランクフルト市内にある実際のマクドナルド店舗で展開し、観客は講義を受講する。講義は、「先生」であるドイツに難民としてたどり着いたそれぞれの人々の、職業や体験を

インタビューした内容を基に、高山が創作したテキストで、哲学、都市論、文学、会計学といった科目を選択する。その第一段階を、2017年3月に2週間にわたって開講した。また観客は、ムーゾントゥルム劇場でも聴講や展示を体験することができる。創作・事業が深化する一方で、芸術への理解を示していたはずの知識層・観客層の一部が、例えば会場となっている店舗(企業)への抵抗感を理由に、そもそも参加しようとする現実にも直面した。今後、ドイツから出発した「大学」は、難民の移動経路(バルカンルート)を辿るように各地で展開していく予定。

オフ・ニプロールによるダンス・イン・アジアは、継続したテーマと中心メンバーで複数年実施している事業のうち2年の支援を終了した。一つの作品を発表することを着地点とする事業とは異なり、個人ではなく、これまで実現が難しかった、カンパニー同志が協働制作をするモデルを作りだすために開始した。初年度は、アジア各地から参加したカンパニーの作品を数多くショーケース上演することができた一方、上演することが優先され、それ以外の交流が十分にできなかった。支援2年度目も運営する人手不足と、参加者都合による大幅な変更に対処する負担が大きかったようだが、今回は、作品の上演と並行して、参加カンパニーやアジア各国からゲストを招き、それぞれの創作環境や芸術と社会の状況を実際に会って共有、議論する時間を設けることができた。また大学との連携など、より大きなプロジェクトへの話が具体化し始めていることは進展である。

2014年より3年継続した支援を終了した事業は、2件。その内、作家としてキャリアを重ね経験豊富な川村毅(**ティーフクトリー**)とジョン・ジェスランによる『往復書簡』は、「戯曲」を交互に書き連ねていく試みである。15分程の戯曲をそれぞれに創作し、両者の戯曲を1本のリーディングとして上演する作業を3回繰り返し第三章まで完成した。どこからどこまでが、どちらの戯曲なのかわかりにくいほどシームレスに繋がり、どちらの作家性とも言い切れない独特の世界観をかもしだす場面もあった。全三章を通して関わったメンバーも多く、翻訳作業の蓄積も活かされていた。一方で専門家、特に英米文学の研究者や翻訳家などへの周知が行き届かなかった部分もあり、若手層を含めたネットワークの更新が急がれる。ニューヨークでの英語版リーディング公演後、川村とジェスランの往復書簡は、新たなアーティスト等を迎えながら本公演に向けて動き出していく。

近年、国際交流を巡る支援の方法が多様化するなか、プロジェクトの進め方も作品創作のためのリサーチから始めるもの、レジデンス、プラットフォームづくり、ツアー(巡回公演)など様々である。プロジェクトの性格、目的にあわせて準備段階から申請でき、自由度の高いこのプログラムを最大限活かされる事業をこれからも支援していきたい。



ARTizan「国際ダンス交流プロジェクト《Odori- Dawns- Dance》」岩手、2016年12月
International Dance Dialogue Project 'Odori-Dawns-Dance'
organized by ARTizan in Iwate, December 2016



オフ・ニブロール「ダンス・イン・アジアーアジアのダンスカンパニーは何かができるか?」での公演 森下スタジオ、2017年2月 撮影:Anna
Performance at "DANCE IN ASIA "What can Asian Dance Company do?" organized by off-nibroll, February 2017 Photo: Anna



Organ Works - Provisional Danza 協働制作企画 『Time of Conversation』森下スタジオ、2016年12月
Organ Works-Provisional Danza Co-production *Time of Conversation* at Morishita Studio, December 2016.

2. Contemporary Theater and Dance:

- *International Projects Support Program*

This program awards grants for up to three years to multi-year international projects in which Japanese and foreign companies or artists cooperate with each other. Priority use of Morishita Studio and its guest rooms are also awarded upon request. In 2016, four projects were newly chosen as grantees in addition to the six ongoing projects since the previous year, and nine of them were carried out.

Among the newly chosen projects, firstly, **mum & gypsy** have carried out workshops for more than 100 participants across Italy since their tour in Florence in 2013, which was their first tour abroad. Although the scale of the project was small, the leader Takahiro Fujita established close relationships there, and that led to a totally new, long-term creation process, where Fujita does not prepare a script as he used to do but incorporates the results of the interviews with the participants into his work. They are willing to continue to create abroad. They planned to complete the work during a residency in Italy, but this year, due to financial difficulties of the Italian team, they had to work with the Italian team only in Japan. After a presentation in Japan, they will look for an opportunity to present it in Italy. Secondly, **Organ Works** and the Spanish dance company Provisional Danza worked on their co-production *Time of Conversation*. Following their workshops and collaboration activities since 2002, Shintaro Hirahara and Carmen Werner carried out this project as the pinnacle of their exchange. As the title suggests, the concept of the creation is based on his conversations with Werner. Hirahara also intended to train his company through this work, having the members actively involve themselves in the project and also learn about management skills and collaboration procedures. In a relationship as equal artists in an international collaboration, which is different from being invited as a guest mentor of a workshop as in the past, it becomes necessary to improve communication during the creative process (not only in language, but also regarding procedures as well as understanding among his own team). He regularly rehearsed the piece not only when Werner was in Japan but throughout this year, proceeded with the creation by exchanging video clips with her, and presented a performance in June 2017. We have also selected a three-year project between **Port B** / Akira Takayama and Mousonturm Kunstlerhaus in Germany. Inspired by “Potteries Thinkbelt,” an urban project conceived by the architect Cedric Price in 1964, they opened temporary “universities” in various McDonald’s restaurants in the city of Frankfurt, where audience members attended the “classes”. The lectures are written by Takayama based on interviews with people who, as refugees, have arrived in

Germany as “teachers” about their former occupations and experiences, and are classified into subjects such as philosophy, urban theory, literature or accounting. The first course was for two weeks in March 2017. The classes and an exhibition were also available at Mousonturm Kunstlerhaus. One of the problems they faced while the creation and the project developed was that a part of intellectuals and audience members who were supposed to be supportive of art rejected the project because of their aversion to the restaurants (corporation) that were chosen as the venues. The “universities” that have started in Germany will open in other places following the route of refugees (known as the Balkan Route).

off-nibroll completed the two-year grant-receiving term in their multi-year project “DANCE IN ASIA” with a consistent theme and core members. They started the project not necessarily with the presentation of a creation as the goal but in order to establish a model where companies would create together, which had been more difficult than having individuals collaborate with each other. In the first year, they successfully showcased many works by Asian companies that participated in the project. Because of the priority given to performances, however, exchange between the companies could not be promoted as much as they planned to. In the second year, while still suffering from a shortage of labor and drastic changes in the plan caused by the participants, they did not only present performances but also invited guests from the participating companies and Asian countries and had meetings with them to share and discuss their environments for creating art and the situations of art and society in their places. We see it as a progress that their activity has started to grow into a larger project involving such aspects as cooperation with universities.

Among the two projects that completed their three-year grant-receiving term since 2014, **T Factory’s** “John Jesurun & Takeshi Kawamura Collaboration Project,” an epistolary playwriting project by the two experienced artists, had three reading performances. Each of the readings consisted of two 15-minute plays read as one consistent play, which became the three chapters of their play. The plays were connected so seamlessly that one could not really tell which part was written by whom, and sometimes brought out a unique style that did not completely belong to either artist. While many members were involved throughout the creation of the three chapters and the accumulation of their translation work contributed to the project’s improvement, the project was not disseminated enough to experts, especially scholars and translators of

English literature. We expect them to renew their network including that with young people. After presenting a reading event in English in New York, the next stage of the play created from the correspondence between Kawamura and Jesurun will be a full production inviting new artists.

Methodologies of supporting international exchange have become diverse in recent years, and projects have also been carried out in many different ways: one starts from research for a new creation, while others take place as residencies, platform building or touring projects. This program invites applications of projects that are in their preparation stage in accordance with their nature and goals. We will continue to support projects that make use of the flexibility of this program to the maximum.



Port B「ヨーロッパ・ポタリーズ・シンクベルト」フランクフルト、2017年3月
撮影：運沼昌宏

“European Potteries Thinkbelt” organized by Port B in Frankfurt, March 2017

Photo: Masahiro Hasunuma



マームとジプシー『IL MIO TEMPO - 私の時間 -』埼玉、2016年10月
撮影：三田村亮

IL MIO TEMPO - My time -, mum & gypsy in Saitama, October 2016.

Photo: Ryo Mitamura



余越保子『ZERO ONE』神奈川、2017年2月

撮影：前澤秀登

ZERO ONE, Yasuko Yokoshi in Kanagawa, February 2017.

Photo: Hideto Maezawa

▶ARTizan

国際ダンス交流プロジェクト《Odori- Dawns- Dance》

2016年8月1日-2017年3月13日

岩手、東京、シドニー、ノッティングハム(陸前高田、森下スタジオ、中央区立月島社会教育会館ホール、Drill Hall、Dance4)

1,500,000円

スタジオ提供：14日間 ゲストルーム提供：36日間

2016年度までの助成金額(単位：円)

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,500,000	2,500,000

▶オフ・ニブロール

ダンス・イン・アジア —アジアのダンスカンパニーは何ができるか？

2016年5月1日-2017年2月27日

台湾、東京(水源劇場、森下スタジオ)

1,000,000円

スタジオ提供：16日間 ゲストルーム提供：10日間

2016年度までの助成金額(単位：円)

2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶Organ Works

OrganWorks – Provisional Danza 協働制作企画

『Time of Conversation』

2016年10月1日-12月27日

東京(森下スタジオ)

750,000円

スタジオ提供：16日間 ゲストルーム提供：11日間

▶一般社団法人 Port B

ヨーロッパ・ポタリーズ・シンクベルト

(作品名『ポタリーズ・シンクベルト：マクドナルド放送大学』)

2016年4月11日 -2017年3月26日

フランクフルト(ムーゾントゥルム劇場、市内7か所の「マクドナルド」店舗)

1,300,000円

▶合同会社 マームとジプシー

マームとジプシー 『IL MIO TEMPO – 私の時間 –』

2016年9月22日-10月14日

埼玉(彩の国さいたま芸術劇場)

1,400,000円

▶株式会社 ティーファクトリー

東京／ニューヨーク 往復書簡 2014-2016 第三章

『わたしは黄金の破片の上を往く』

2017年3月3日-3月13日(および2017年11月)

東京、ニューヨーク(森下スタジオ、La MaMa Galleria)

1,200,000円

スタジオ提供：9日間 ゲストルーム提供：12日間

2016年度までの助成金額(単位：円)

2014年度	2015年度	2016年度	合計
800,000	1,000,000	1,200,000	3,000,000

▶DOMINO

Balkan-US-Japan Research and development: residencies, dance, music and visual arts on social issues (Identity and Economics of Identity) and audience communication

2016年6月5日-2017年3月9日

ザグレブ、リエカ、東京(Zagreb Student Center、森下スタジオ、「TPAM」他)

1,500,000円

スタジオ提供：7日間 ゲストルーム提供：22日間

2016年度までの助成金額(単位：円)

2015年度	2016年度	合計
1,500,000	1,500,000	3,000,000

▶燐光群／有限会社グッドフェローズ

アジア共同プロジェクト

2016年8月8日-12月26日

チェンマイ、バンコク、マニラ、セブ、東京(各国市内、芸能花伝舎、森下スタジオ)

1,000,000円

スタジオ提供：9日間 ゲストルーム提供：12日間

2016年度までの助成金額(単位：円)

2015年度	2016年度	合計
800,000	1,000,000	1,800,000

▶余越保子

『ZERO ONE』

2016年10月10日-2017年2月19日

京都、兵庫、福岡、神奈川(京都芸術センター、城崎国際アートセンター、イムズホール、「TPAM」)

1,700,000円

2016年度までの助成金額(単位：円)

2014年度	2015年度	2016年度	合計
1,000,000	1,000,000	1,700,000	3,700,000

2. Contemporary Theater and Dance:
- International Projects Support Program

9 Grantees / Total appropriations: ¥11,350,000

▶ **ARTizan**

International Dance Dialogue Project
'Odori-Dawns-Dance'
August 1, 2016 – March 13, 2017
Iwate, Tokyo, Sydney, Nottingham (Rikuzentakata and Sumita town, Morishita Studio, Chuo-ku Syakai Kyouiku Kaikan Hall, The Drill Hall, Dance4)
¥1,500,000

Studio Rental: 14 days Guest Room Rental: 36 days
Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
1,000,000	1,500,000	2,500,000

▶ **off-nibroll**

DANCE IN ASIA "What can an Asian Dance Company do?"
May 1, 2016 – February 27, 2017
Taiwan, Tokyo (wellspring theater, Morishita Studio)
¥1,000,000

Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	2,000,000

▶ **Organ Works**

Organ Works-Provisional Danza Co-production *Time of Conversation*
October 1 – December 27, 2016
Tokyo (Morishita Studio)
¥750,000
Studio Rental: 16 days Guest Room Rental: 11 days

▶ **Port B**

European Potteries Thinkbelt
April 11, 2016 – March 26, 2017
Frankfurt (Mousonturm Kunstlerhaus, seven McDonald's restaurants within the city)
¥1,300,000

▶ **mum & gypsy**

mum & gypsy *Il MIO TEMPO – My time–*
September 22 – October 14, 2016
Saitama (SAINOKUNI Saitama Arts Theater)
¥1,400,000

▶ **T Factory**

John Jesurun & Takeshi Kawamura Collaboration Project
Tokyo/ New York Correspondence Chapter 3 - *I walk on Golden Splinters*
March 3 – 13 and November 2017
New York, Tokyo (Morishita Studio, La MaMa Galleria)
¥1,200,000

Studio Rental: 9 days Guest Room Rental: 12 days
Amount of continuous grants (in yen)

2014	2015	2016	Total
800,000	1,000,000	1,200,000	3,000,000

▶ **DOMINO**

Balkan-US-Japan Research and development: residencies, dance, music and visual arts on social issues (Identity and Economics of Identity) and audience communication
June 5, 2016 – March 9, 2017
Zagreb, Rijeka, Tokyo (Zagreb Student Center, Morishita Studio "TPAM" etc)
¥1,500,000

Studio Rental: 7 days Guest Room Rental: 22 days

2015	2016	Total
1,500,000	1,500,000	3,000,000

▶ **Theater Company Rinko-gun/Good Fellows. Inc.**

Asia Collaborative Project
August 8 – December 26, 2016
Chiang Mai, Bangkok, Manila, Cebu, Tokyo (Chiang Mai, Bangkok, Manila, Cebu, Geino Kadensha, Morishita Studio)
¥1,000,000

Studio Rental: 9 days Guest Room Rental: 12 days
Amount of continuous grants (in yen)

2015	2016	Total
800,000	1,000,000	1,800,000

▶ **Yasuko Yokoshi**

ZERO ONE
October 10, 2016 – February 19, 2017
Kyoto, Hyogo, Fukuoka, Kanagawa (Kinosaki International Arts Center, IMS Hall, "TPAM")
¥1,700,000

Amount of continuous grants (in yen)

2014	2015	2016	Total
1,000,000	1,000,000	1,700,000	3,700,000

現代演劇・舞踊助成 ―― 芸術交流活動【非公募】

助成対象1件／助成総額6,000,000円

海外の非営利団体との継続的パートナーシップに基づく本プログラムでは、人物交流事業や日本文化紹介事業に対して助成を行っている。

本年は、1989年より支援しており、ニューヨークに本部を置く**アジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)**が日米の芸術家、学者、専門家、機関を対象に行っている相互的フェロウシッププログラムに対して助成。2017年度以降アメリカ/日本へ渡航・滞在する対象者に支給される。

〈ACC Saison Foundation Fellow〉

●岩城京子(演劇研究)

6ヶ月／米国における演劇において、どのように「他者」の声表象されてきたのかを調査。

●ジェシカ・グラインドスタッフ(演劇)

9週間／舞踏や文楽の調査。また、福島において視覚的・聴覚的調査を行い、人々から話の聞き取りを実施。新作制作のための調査。

●ボニー・マランカ(芸術批評)

1ヶ月／東京の草月アートセンターに所蔵されるフルクサスのアーティストで英国の作曲家ディック・ヒギンズの「グラフィス」スコアの調査。

●橋本麻里(美術品修復)

6ヶ月／米国ハワイ州ホノルルのPace Art Conservationにて、美術品修復の研修。

●鎌田友介(美術)

6ヶ月／文化、芸術、政治的観点から、米国に建てられた日本家屋に関する調査。

●北出智恵子(キュレーション)

3ヶ月／米国における時間芸術(タイムベースト・メディア)およびパフォーマンスアートの調査。

●竹内公太(美術)

6ヶ月／米国にて第二次世界大戦および原子力産業の現地調査。

●アビゲイル・チャイルド(映像写真)

1ヶ月／三鷹天命反転住宅での滞在大およびアーティストや批評家との交流、新作制作のための調査。

●ハエユン・パク(美術史)

6ヶ月／1970年代から90年代における環太平洋地域におけるビデオアートの発展についての調査。

▶アジア・カルチュラル・カウンシル

日米芸術交流プログラム(2017年度の活動に充当)

2017年1月1日-12月31日

アメリカ、日本

6,000,000円

ゲストルーム提供:30日間

Contemporary Theater and Dance:
 - *Artistic Exchange Project Program*
 (designated fund program)

This program, which is based on continuing partnerships with non-profit organizations outside of Japan, supports projects for personnel exchange and promotion of Japanese culture.

Since 1989, The Saison Foundation has given support each year to the Japan-United States Arts Program, an interactive fellowship program of the New York-based **Asian Cultural Council (ACC)** for U.S. and Japanese artists, scholars, specialists and organizations. The grant will be awarded to those who will visit or stay in the U.S. or Japan as ACC Saison Foundation Fellows in 2017.

**Japan-United States Arts Program /
 ACC Saison Foundation Fellow**

● **Kyoko Iwaki** (Theater)

A 6-month month fellowship to conduct research on how non-dominant voices are represented in theater in the U.S.

● **Jessica Grindstaff** (Theater)

A 9- week fellowship to study with Butoh and Bunraku artists in Japan and to visit the Fukushima region to capture visual, aural, and personal stories, informing a new theater work.

● **Bonnie Marranca** (Art criticism)

A 1-month grant to research Fluxus artist Dick Higgins's unique Graphis scores in the archives of the Sogetsu Art Center in Tokyo.

● **Mari Hashimoto** (Conservation)

A 6-month fellowship to conduct conservation research at Pace Art Conservation in Honolulu, Hawaii.

● **Yusuke Kamata** (Visual Art)

A 6-month fellowship to research Japanese-style architecture in the U.S. as a lens into culture, art, and politics.

● **Chieko Kitade** (Curation)

A 3-month fellowship to conduct research on time-based media and performance art in the U.S.

1 Grantee / Total appropriations: ¥6,000,000

● **Kota Takeuchi** (Visual Art)

A 6-month fellowship to conduct research on World War II and nuclear industrial sites in the U.S.

● **Abigail Child** (Filmography acts)

A month-long residency at Reversible Destiny Lofts in Tokyo to meet with artists and critics and to conduct research for a new film.

● **Haeyun Park** (Art History)

A dissertation fellowship to conduct research in Japan on the trans-Pacific development of video art from the 1970s to the 1990s.

▶ **Asian Cultural Council**

ACC Japan-United States Arts Program Fellowships
 (for activities taking place in 2017)

January 1 – December 31, 2017

U.S., Japan

¥6,000,000

Guest Room Rental: 30 days

海外から公演、アーティスト・イン・レジデンス、コンペティション、ワークショップ、会議参加などへ招聘を受けた芸術家、制作者に対して国外への渡航費を支援。招聘されたにもかかわらず、海外と日本の会計年度の違いなどにより渡航費の手配が間に合わなかったという理由で、貴重な機会を逸することを避けるため、渡航目的の重要性、緊急性を鑑みて助成する。



日置あつし『パベッツ』フランクフルト 2016年7月 撮影: Jörg Baumann
PUPPETS, Atsushi Heki, in Frankfurt, July 2016 Photo: Jörg Baumann



黒須育海「シビウ国際演劇祭」での公演 シビウ 2016年6月 撮影: FITS
Performance at "Sibiu International Theatre Festival",
Ikumi Kurosu, in Sibiu, June 2016 Photo: FITS



溝端俊夫「大野慶人舞踏『花と鳥』公演北京・天津ツアー」北京 2016年7月
撮影: 孫志誠
Yoshito Ohno's Dance Performance *Flower and Bird* Tour
in Beijing and Tianjin, Toshio Mizohata, in Beijing, July 2016
Photo: Sun Zhicheng

助成対象9件／助成総額:764,948円

- ▶ **日置あつし**
パベッツ(フランクフルトの振付家、Paula Rosolenの新作への参加)
2016年5月13日-7月13日
フランクフルト(ムーゾントゥルム劇場)
112,730円
- ▶ **黒須育海**
シビウ国際演劇祭
2016年6月12日
シビウ(「シビウ国際演劇祭」)
103,100円
- ▶ **溝端俊夫**
大野慶人舞踏『花と鳥』公演北京・天津ツアー
2016年7月22日-7月31日
北京、天津(蓬蒿劇場、北京劇目排練中心、天津大劇院)
68,070円
- ▶ **川口隆夫**
第8回アーツサミット・インドネシア2016
2016年8月15日-8月18日
ジャカルタ、ジョグジャカルタ(「第8回アーツサミット・インドネシア2016」)
60,210円
- ▶ **乗松薫**
body talk 《Atom Heart Mother》
2016年10月2日-26日
ライブツイヒ、ミュンスター
76,610円
- ▶ **川本裕子**
『Kantor_Traces: COLLAGE』ポーランドツアー、
『Memory of Water』作品制作、公演
2016年10月4日-11月18日
グダニスク、ポズナン、クラクフ(KULB ZAC、Teate8 Dnia、
Nowohuckie Centrum Kultury)
92,232円
- ▶ **秋山はるか**
Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA 「SEMEGIAI
Random02」
2016年12月7日-14日
ジャカルタ(「Jakarta Theater Festival」)
68,580円
- ▶ **QUICK**
Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA 「SEMEGIAI
Random02」
2016年12月7日-14日
ジャカルタ(「Jakarta Theater Festival」)
68,580円
- ▶ **藤井光**
『ピレウス/ヘテロクロニア』
2017年1月14日-1月19日
アテネ(ジャネイロ・カフェ:ヘラス・リパティエー美術館)
114,836円

We offered airfare to artists and managers who were invited to perform, or to take part in artist-in-residencies, competitions, workshops and conferences in foreign countries. The grant is offered in accordance with the importance of the trips and how urgent they may be in order to prevent opportunities being lost due to difficulties in covering flight costs caused by the differences in fiscal years between Japan and other countries.



乗松薫「body talk 《Atom Heart Mother》」ポズナン 2016年10月
 撮影:TANZweb.org_Klaus Dilgeer
 body talk *Atom Heart Mother*, Kaoru Norimatsu, in Poznan,
 October 2016 Photo: TANZweb.org_Klaus Dilgeer



川本裕子『Kantor_Traces: COLLAGE』ポズナン 2016年11月
 Kantor_Traces: COLLAGE, Yuko Kawamoto, in Poznan, November 2016



秋山はるか、QUICK「Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA
 『SEMEGIAI Random02』」ジャカルタ 2016年12月
 Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA *SEMEGIAI Random02*,
 Haruka Akiyama and QUICK, in Düsseldorf, December 2016

9 Grantees/Total appropriations: ¥764,948

- ▶ **Atsushi Heki**
PUPPETS (Choreographed by Paula Rosolen)
 May 13 – July 13, 2016
 Frankfurt (Künstlerhaus Mousonturm Frankfurt)
 ¥112,730
- ▶ **Ikumi Kurosu**
 Sibiu International Theatre Festival
 June 12, 2016
 Sibiu (“Sibiu International Theatre Festival”)
 ¥103,100
- ▶ **Toshio Mizohata**
 Yoshito Ohno’s Dance Performance *Flower and Bird* Tour
 in Beijing and Tianjin
 July 22 – July 31, 2016
 Beijing, Tianjin (Peng Hao Theater, Beijing Drama
 Rehearsal Center, Tianjin Grand Theater)
 ¥68,070
- ▶ **Takao Kawaguchi**
 The 8th Arts Summit Indonesia 2016
 August 15 – August 18, 2016
 Jakarta, Yogyakarta (“The 8th Arts Summit Indonesia
 2016”)
 ¥60,210
- ▶ **Kaoru Norimatsu**
 body talk *Atom Heart Mother*
 October 2 – 26, 2016
 Leipzig, Munster
 ¥76,610
- ▶ **Yuko Kawamoto**
Kantor_Traces: COLLAGE Tour in Poland,
Memory of Water Creation, Premier
 October 4 – November 18, 2016
 Gdansk, Poznan, Krakow (KULB ZAC, Teate8 Dnia,
 Nowohuckie Centrum Kultury)
 ¥92,232
- ▶ **Haruka Akiyama**
 Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA
SEMEGIAI Random02
 December 7 – 14, 2016
 Jakarta (“Jakarta Theater Festival”)
 ¥68,580
- ▶ **QUICK**
 Jakarta Theater Festival (FTJ) MuDA
SEMEGIAI Random02
 December 7 – 14, 2016
 Jakarta (“Jakarta Theater Festival”)
 ¥68,580
- ▶ **Hikaru Fujii**
Piraeus / Heterochironia
 January 14 – 19, 2017
 Athens (Janeiro Cafeteria, Floating Museum “Hellas
 Liberty”)
 ¥114,836

森下スタジオのその他の利用者
(2016年4月1日-2017年3月31日)

Other users of Morishita Studio
(April 1, 2016 - March 31, 2017)

日本語表記 五十音順

〈スタジオ／Studio〉 ()利用日数／number of days

アジアン・カルチュラル・カウンシル(5)
Asian Cultural Council

イクイメ／エッチビイ株式会社(14)
Ikiume / HB inc.

池内美奈子(23)
Ikeuchi Minako

AbsT(8)

一般社団法人 大橋可也&ダンサーズ(28)
Kakuya Ohashi and Dancers

Office A / LB(11)

Organ Works(10)

川口隆夫(12)
Takao Kawaguchi

カンパニーデラシネラ(114)
Company Derashinera

劇団、本谷有希子(7)
Gekidan, Motoya Yukiko

GERO(35)

小池博史ブリッジプロジェクト(15)
Hiroshi Koike Bridge Project

一般社団法人 Co.山田うん(82)
Co.Yamada Un

コンタクト・インプロビゼーショングループ C.I.co.(3)
Contact Improvisation Group C.I.co.

サンプル(9)
Sample

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(24)
Japan Contemporary Dance Network

公益財団法人助成財団センター(1)
The Japan Foundation Center

鈴木ユキオプロジェクト(26)
YUKIO SUZUKI Projects

〈ゲストルーム／Guest Room〉

Dance Theatre LUDENS(29)

一般社団法人 Co.山田うん(20)

Co.Yamada Un

tant-tantz(5)

コンタクト・インプロビゼーショングループ C.I.co.(3)

Contact Improvisation Group C.I.co.

チェルフィッチュ(1)

Chelfitsch

Dance Theatre LUDENS(12)

NPO法人days(2)

days

Trajal Harrell(14)

デュ社(2)

富士山アネット(18)

Duex Shrine

FujiyamaAnnette

俳優指導者アソシエーション(3)

Max-Philip Aschenbrenner(14)

Association for the Study of Actor Training and

Pedagogy

BATIK(25)

NPO法人舞台芸術制作者オープンネットワーク(1)

Open Network for Performing Arts Management

富士山アネット(52)

FujiyamaAnnette



自主製作事業・共催事業等

SPONSORSHIP,
CO-SPONSORSHIP
AND OTHER PROGRAMS

1.セゾン・アーティスト・イン・レジデンス
 ヴィジティング・フェロー(リサーチ・プログラム)



平成28年度文化庁「アーティスト・イン・レジデンス
 活動支援を通じた国際文化交流促進事業」

現代演劇・舞踊の海外ネットワークの拡大、相互理解の促進のため、重要な役割を担うことが期待される海外のアーティストやアーツ・マネジャー(プロデューサー、プログラム・ディレクター、プレゼンター、キュレーター等)を招聘し、森下スタジオのゲストルームを拠点とする滞在機会を提供。日本の現代演劇・舞踊の状況、背景、魅力を発見、理解してもらうために、日本との継続的な協働事業を視野に入れた日本の現代演劇・舞踊分野のリサーチを支援した。

1.Saison Artist in Residence
 Visiting Fellow (research program)

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, in the fiscal 2016

We invited arts managers (producers, program directors, presenters, curators, etc.) from overseas who are expected to play important roles in expanding the international network of contemporary theater and dance and in enhancing mutual understanding and offered them residence opportunities with the guest rooms at Morishita Studio as their base. To help those considering cooperative projects with Japan on a continuing basis discover and learn about the situation, background and attraction of Japanese contemporary theater and dance, we supported their research projects in these fields.



ルイス・ガレー

コロンビア
 パフォーミング・アーティスト、
 ダンス・メーカー
 滞在期間: 2016年7月21日-9月11日
 撮影: Joaquin Burgariotti

Luis Garay

Performing Artist / Dance Maker, Colombia
 Residency period: July 21 – September 11, 2016
 Photo: Joaquin Burgariotti

ルイス・ガレーはコロンビア出身で、ブエノスアイレスを拠点に活動する。2015年、世界有数のダンス・フェスティバル、「モンペリエ・ダンス・フェスティバル」で、ダンサーの身体をインスタレーションとして提示した『Cocooning』を発表。また、同年のウィーン芸術週間では、アルゼンチン出身の美術家、ディエゴ・ビアンキとともに新しい身体 の概念を提示する作品『Under de Si』を発表した。

今回の滞在では、「ゾンビと仏陀」という研究テーマで、存在、不在、身体をキーワードに日本の伝統や現代文化をリサーチし、新作『El lugar imposible (不可能な場所)』を創作。2016年10月、Kyoto Experimentで同作品を発表した。滞在中、ワークショップ・オーディションを企画し、日本のダンサーやパフォーマーと交流を図ったほか、国内のアーティストや関係者と面会して日本のサブカルチャーやデジタル時代の言語とイメージのアイデアについて意見交換を行った。

パブリック・トークでは、「OPEN SEE」というタイトルで、過去の代表的な作品のアイデアやイメージ、レジデンスのリサーチのコンセプトや活動内容を紹介し、新作の構想を語るトークを行った。

Luis Garay is from Colombia and is based in Buenos Aires. He presented dancers' bodies as an installation in *Cocooning* for Montpellier Danse, one of the most influential dance festivals in the world, in 2015. In the same year at Wiener Festwochen, he presented *Under de Si* that proposed a new concept of the body in collaboration with Argentine artist Diego Bianchi.

His theme for this residency was "Zombies and Buddhas." He did a research on Japanese traditions and contemporary culture with "presence, absence and body" as the keywords to create his new work *El lugar imposible* (The Impossible Place). The piece was presented at Kyoto Experiment in October 2016. He also conducted workshops and auditions during his stay in Japan with Japanese dancers and performers and had meetings with Japanese artists and art practitioners to discuss Japanese subcultures and ideas of language and images in the age of digital technology.

In his public talk titled "OPEN SEE," he introduced the ideas and images of his signature works in the past, the concept and contents of his research during this residency, and the concept of his new work.



JK・アニコチェ

フィリピン
シパット・ラウィン・アンサンブル、
アーティストック・ディレクター
滞在期間: 2016年10月8日-10月28日

JK・アニコチェはフィリピン出身で、「シパット・ラウィン・アンサンブル」のアーティストック・ディレクターとして活動するほか、「カルナバル・フェスティバル」のフェスティバル・ディレクター、演劇や映画、テレビ等の俳優、演出家として多方面で活躍している。

今回の滞在では、「Touch Play」という研究テーマで、マンツーマンの親密な関係性を有するパフォーマンスの可能性を探究するために、野口整体についてリサーチを行った。滞在中、野口整体や均整法整体の実践者を訪問し、多岐にわたる整体の思想や方法論の理解を深めた。

パブリック・トークでは、「Touch Play」というタイトルで、滞在中のリサーチの成果をもとにワークインプログレスを発表。パフォーマンス後、過去の作品のアイデアや創作プロセスを解説し、2017年2月に発表の新作の構想を語るトークを行った。

JK Anicoche

Artistic Director, Sipat Lawin Ensemble, the Philippines
Residency period: October 8 – 28, 2016

JK Anicoche from the Philippines is the artistic director of Sipat Lawin Ensemble and the director of Karnabal Festival. He has also been active as a performer and director in the fields of theater, film and television.

His theme for this residency was “Touch Play.” To explore the possibility of one-on-one intimate performance, he carried out a research on the Noguchi chiropractic Seitai and Kinsei medical treatment by visiting their practitioners and studying their diverse philosophies and methodologies.

In his public talk entitled “Touch Play,” he presented a work-in-progress based on the outcomes of his research. He also explained the ideas and creation processes of his works in the past and talked about his new work that would be presented in February 2017.



ピチェ・クランチェン

タイ
振付家・ダンサー
滞在期間: 2017年3月9日-3月29日

ピチェ・クランチェンはタイ出身で、タイの古典舞踊を基礎とし、伝統と現代の感性をつなぐ独自の身体表現を探究する作品を展開している。日本では、ピチェ・クランチェン・カンパニーとして、2016年、『Dancing with Death』(TPAM in 横浜)を初演したほか、2015年に『Black & White』(TPAM in 横浜)、2010年に『About Khon』(Kyoto Experiment)などを発表した。

今回の滞在では、フェスティバル/トーキョーで今秋に日本で発表予定の新作のリサーチとして、「The Walk」という研究テーマから東京で日常を過ごす人たちの歩行を観察するフィールドワークを行った。滞在中、渋谷、新宿、池袋、上野、浅草、新橋を中心に、歩くリズムやパターン、スタイル等に着目し、歩行という視点から社会やコミュニティと身体の関係性を考察した。

パブリック・トークでは、「The Walk」というタイトルで、レジデンスのリサーチのコンセプトや活動内容、成果を紹介し、新作の構想を語るトークを行った。

Pichet Klunchun

Choreographer / Dancer, Thailand
Residency period: March 9 – 29, 2017

Pichet Klunchun from Thailand has developed works that explore unique physical expression based on Thai classical dance that connects traditional and contemporary sensitivities. His company world-premiered *Dancing with Death* in TPAM in Yokohama in 2016 and presented *Black & White* in 2015 (TPAM in Yokohama) and *About Khon* in 2010 (Kyoto Experiment).

His theme for this residency was “The Walk.” As a research for his new work that is planned to be presented at Festival/Tokyo in the fall of 2017, he conducted a fieldwork where he studied the ways people in Tokyo walk. Mainly in Shibuya, Shinjuku, Ikebukuro, Ueno, Asakusa and Shinbashi, he focused on the rhythms, patterns and styles to reflect on the relationship between society, community and the body with “walking” as the viewpoint.

In his public talk titled “The Walk,” he introduced the concept, contents and outcomes of the research and talked about the ideas of his new work.



ヤナ・トネス

ドイツ

演出家、THE AGENCY主宰

滞在期間：2017年3月17日-3月31日

ヤナ・トネスはドイツ出身で、パフォーマンス・グループ「THE AGENCY」を主宰し、ドイツの若手の演出家として注目されている。YouTubeで話題となったASMR(視覚や聴覚の刺激から心地よさを感じる現象)をライブ・パフォーマンス化した作品『ASMR Yourself』を2015年にHAU(ベルリン)やPACTツォルフエアライン、2016年にミュンヘン・カンマーシュピーレで発表した。

今回の滞在では、「Love Fiction(SFと恋愛関係の造語)」を研究テーマに、日本における現代の恋愛事情や性的関係、草食男子についてリサーチを行った。滞在中、「草食男子」を名づけたコラムニストや研究者等と面会したほか、国内のアーティストと面会してリサーチのテーマについて意見交換を行った。

パブリック・トークでは、「Post Flesh Intimacy, THE AGENCY meets Tokyo」というタイトルで、過去の代表的な作品を紹介するとともに、レジデンスのリサーチのコンセプトや活動内容、今後の創作のアプローチを語るトークを行った。

Yana Thönnies

Director, THE AGENCY, Germany

Residency period: March 17 – 31, 2017

Yana Thönnies is a young director from Germany who has been gaining attention as a member of the performance group THE AGENCY. She presented *ASMR Yourself*, a live performance using ASMR (Autonomous Sensory Meridian Response, the phenomena where visual or sonic stimulations produce comfort that became popular on YouTube) at HAU Berlin and PACT Zollverein in 2015 and at Münchner Kammerspiele in 2016.

Her theme for this residency was “Love Fiction.” She carried out research on contemporary forms of love affairs, sexual relationships and “herbivore men” in Japan by meeting the columnist who created the term “herbivore men” and scholars, as well as Japanese artists to discuss the theme of her research.

In her public talks titled “Post Flesh Intimacy, THE AGENCY meets Tokyo,” she introduced her main works in the past and talked about the concept and contents of her research as well as her approaches to her future work.



カティア・アルファラ

ギリシャ

オナシス文化センター 演劇・舞踊部門

芸術監督

滞在期間：2016年6月6日-7月3日

撮影：STAVROS PETROPOULOS

カティア・アルファラはギリシャ出身で、アテネのオナシス文化センターの演劇・舞踊部門芸術監督およびオナシス文化センターが主催する「Fast Forward Festival」のディレクターを務めている。

今回の滞在では、「The Home Project: アテネと東京の不安定な居住環境の調査」を研究テーマに、2015年にアテネで発表した、演出家の高山明との作品を発展させるリサーチを行った。滞在中、高山明の創作プロセスの理解を深めるリサーチを行ったほか、若手から中堅を中心に数多くの劇作家や演出家、美術家、キュレーター、研究者等と面会し、芸術の社会的関与という視点から日本の現代演劇やコンテンポラリーダンス、現代アートの状況の理解を深めた。

パブリック・トークでは、「現代の舞台芸術における空間的実践と社会的関与」というテーマで、「Fast Forward Festival」の芸術的影響や、社会的、文化的、政治的影響について解説するトークを行った。

Katia Arfara

Artistic Director, Theater and Dance, Onassis Culture Center, Greece

Residency period: June 6 – July 3, 2016

Photo: STAVROS PETROPOULOS

Katia Arfara from Greece is the artistic director of the department of theater and dance at Onassis Culture Center in Athens and the director of the Fast Forward Festival organized by the Center.

Her theme for this residency was “The Home Project: Exploring precarious living conditions in Athens and Tokyo.” She carried out research in Japan within the context of a project with director Akira Takayama that was presented in Athens in 2015, and to improve her understanding of Takayama’s creation process and met a number of playwrights, artists, curators and scholars. She deepened her understanding of the situation of Japanese contemporary theater, dance, visual art, and the participation of art in society.

In her public talk titled “Spatial practices and social engagement in contemporary performing arts,” she explained the artistic, social, cultural and political impact of the Fast Forward Festival.

2. ニュースレター『viewpoint』の刊行

セゾン文化財団のニュースレター『viewpoint』では、セゾン・フェロー、舞台芸術界におけるインフラストラクチャーの改善、国際的な共同制作・公演事業、サバティカル(海外での休暇・充電)などの活動の成果を中心に、当財団の助成・共催事業に関連するテーマに基づいた論考、レポートを幅広く掲載している。毎号印刷版1,140部以上を芸術団体、自治体、助成財団、マスコミ、大学、シンクタンク、研究者などに無料配布するほか、ウェブサイトでも公開し、メーリングリスト登録者1,330名以上に告知している。(以下執筆者の所属、肩書等は掲載当時のもの。)

第75号(2016年7月発行) 特集:文化+まちづくり-社会デザインにおける「関係性」の物語-

- ・パフォーマーが地域おこしに関わる私的な例
姜 侖秀[CakeTree Theatre芸術監督、演出家、岡山県真庭市地域おこし協力隊員]
- ・立川市モデルの確立を目指して～たちかわ創造舎の挑戦～
倉迫康史[舞台演出家、Theatre Ort主宰、たちかわ創造舎チーフ・ディレクター]
- ・文化と社会デザイン、コミュニティデザイン-関係性を活かすワーク、編み直すワーク
中村陽一[立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長・教授、社会デザイン研究所所長]

第76号(2016年9月発行) 特集:舞台芸術におけるプロフェッショナルリズムとは?

- ・舞台芸術とプロフェッショナルリズム
佐藤 信[劇作家・演出家、座・高円寺芸術監督、個人劇団鴉座主宰]
- ・プロフェッショナルとアマチュアの違い
前川知大[劇作家・演出家、イキウメ主宰]
- ・日本的なプロフェッショナル
梅田宏明[振付家、ダンサー、ビジュアル・アーティスト]

第77号(2016年12月発行) 特集:不在/亡霊の演劇

- ・亡霊の話法-能と現代演劇における「語り」
横山太郎[跡見学園女子大学文学部准教授(能楽研究、身体文化史、表象文化論)]
- ・幽霊の生は大事な問題だ
岡田利規[演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰]
- ・不在について
村川拓也[演出家、映像作家]

第78号(2017年3月発行) 特集:インクルーシブ/インテグレイテッドダンスの可能性と課題

- ・インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyo 境界を越えるダンス-障害を持つ人達の身体性を生かした新しい舞踊表現の可能性を探る
伊地知裕子[インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyoプロデューサー、クリエイティブ・アート実行委員会事務局長、ミューズ・カンパニー代表]
- ・インクルーシブダンスの可能性-「響」での活動を通して
岩淵多喜子[振付家、ダンサー、Dance Theatre LUDENS主宰、インテグレイテッドダンス・カンパニー響-Kyo芸術監督]
- ・エクスクルーシブな時代に、「インクルーシブであること」を巡って思うこと
石井達朗[舞踊評論家/セゾン文化財団評議員]

2. Publishing of *viewpoint*

The Saison Foundation's newsletter *viewpoint* carries a wide range of reports and essays on issues that are more or less related to the activities supported by the Foundation, such as our Saison Fellows program, projects aimed to improve the infrastructure within the performing arts sector in Japan, international collaboration projects, reports from our Sabbatical program grantees, etc. 1,140 copies are published for each issue of the print version, which are circulated free of charge to art organizations, local and national government offices, foundations, the press, universities, think tanks, researchers, etc. Additionally, more than 1,330 people registered on our mailing list are notified whenever the digital version of each issue is also uploaded to the Foundation's website. (The following titles and organizations of the writers are of those at the time of publication.)

Issue No. 75 (July 2016) Feature: Culture + Community Development – Stories on how “relationships” play an important role in social design

- A Personal Example of How a Performer Became Involved in Regional Community Development
by Yoonsoo Kang, Artistic Director of CakeTree Theatre, Director, Maniwa City Regional Development Team Member
- How We Are Aiming to Establish a Tachikawa City Model – The challenges of Tachikawa Culture Factory
by Koji Kurasako, Stage Director, Director of Theatre Ort, Chief Director of Tachikawa Culture Factory
- Culture and Social Design/Community Design – On projects that make use of relationships, and projects that reknit communities
by Yoichi Nakamura, Professor and Dean, Graduate School of Social Design Studies, Rikkyo University

Issue No. 76 (September 2016) Feature: Professionalism in the Performing Arts

- Performing Arts and Professionalism
by Makoto Satoh, Playwright, Director, Artistic Director of Za-Koeji Public Theatre, Director of Kamome-Za
- The Difference Between a Professional and an Amateur
by Tomohiro Maekawa, Playwright, Director, Director of Ikiume
- A Japanese Style Professional
by Hirokaki Umeda, Choreographer, Dancer, Visual Artist

Issue No. 77 (December 2016) Feature: Absence / Ghost in Theater

- How Ghosts Speak – The issue of “narratives” in Noh and Contemporary Theater
by Taro Yokoyama, Associate Professor, Faculty of Letters, Atomi University
- The Lives of Ghosts Are an Important Matter
by Toshiki Okada, Playwright, Director, Novelist
- On Absence
by Takuya Murakawa, Theater Director, Filmmaker

Issue No. 78 (March 2017) Feature: The Potential of and Issues in Inclusive / Integrated Dance

- Integrated Dance Company Kyo: Dance That Transcends Borders – Seeking the potential of a new expression of dance through the physicality of people with disabilities
by Yuko Ijichi, Producer of Integrated Dance Company Kyo, Secretariat of Creative Art Executive Committee, Director of MUSE Company
- The Potential of Inclusive Dance – My work with Kyo
by Takiko Iwabuchi, Director of Dance Theatre LUDENS, Artistic Director of Integrated Dance Company Kyo
- Thoughts on “Being Inclusive” in an Exclusive Age
by Tatsuro Ishii, Dance Critic, Trustee of The Saison Foundation

1. 共催事業

リアル・アーティストカンパセーション・ワークショップ(RAC)

共催:ブリティッシュ・カウンシル

会期:2016年5月25日-7月20日

会場:森下スタジオ

アーティスト(および制作者)を対象とした英語ワークショップ。ブリティッシュ・カウンシルの講師派遣による協力のもと、週一回約2か月間実施した。セゾン・フェローなど助成対象者を中心に計13名が参加した。様々な状況を設定して練習を重ね、英語で自己紹介をしたり、自身の芸術活動によって実現させたいことを説明したりした。また舞台芸術界でも会う機会のない参加者同志の交流の場としても機能している。



フェスティバル/トーキョー16「アジアシリーズ vol.3 マレーシア特集」公演編 森下スタジオ 2016年11月
撮影:青木司
Performance at "Festival/Tokyo 2016 "Asia Series Vol.3: Malaysia"
at Morishita Studio, November 2016
Photo: Tsukasa Aoki

2. 協力事業

助成財団深堀りセミナー 「改めて、助成／財団を考える

—『セゾン文化財団の挑戦』より

主催:公益財団法人助成財団センター

会期:2016年6月30日

会場:森下スタジオ

助成財団センターが新たに開始した「深堀り」セミナーの第一回目として、森下スタジオを会場に、常務理事片山が登壇、著書『セゾン文化財団の挑戦』を切り口に助成事業の在り方について考察した。

フェスティバル/トーキョー16「アジアシリーズ vol.3

マレーシア特集」

主催:フェスティバル/トーキョー実行委員会

会期:2016年11月1日-11月13日

会場:森下スタジオ

フェスティバル/トーキョー16のプログラム「アジアシリーズ vol.3 マレーシア特集」開催にあたり、森下スタジオ全館を会場提供して協力した。レクチャー編としてASWARA - マレーシア国立芸術文化遺産大学『BONDINGS』、『POLITIKO』、公演編として『B.E.D.(Episode 5)』を実施。森下スタジオを46日間、ゲストルームを42日間提供した。

1. Co-Sponsorship Program

Real Artist Conversations Workshop

Co-organizer: British Council

Period: May 25 – July 20, 2016

Venue: Morishita Studio

English conversation workshop for artists and managers. The British Council offered cooperation by dispatching an instructor. This year we had a weekly class for two months, in which 13 people, mainly our grantees including Saison Fellows, participated. Assuming various situations, they practiced introducing themselves and explaining what they would like to achieve in their artistic activities in English. It has also been a place for exchange for performing arts practitioners who live in distant areas.

2. Cooperative Programs

Seminar for Digging Deep into Grant-Making Foundations: Rethinking Grants / Foundations — Referring to *The Challenge of the Saison Foundation*

Organizer: The Japan Foundation Center

Date: June 30, 2016

Venue: Morishita Studio

As the first seminar for “digging deep” into issues shared among grant-making foundations in Japan that The Japan Foundation Center has launched, at Morishita Studio, our managing director Masao Katayama spoke about his philosophy on grant-making in reference to his book *The Challenge of The Saison Foundation*.

Festival / Tokyo 16 “Asia Series Vol.3: Malaysia”

Organizer: Festival / Tokyo Executive Committee

Period: November 1 – 13, 2016

Venue: Morishita Studio

We offered the whole facilities at Morishita Studio for the program “Asia Series Vol.3: Malaysia” of Festival/Tokyo 16. “BONDINGS” and “POLITIKO” with ASWARA — National Academy of Arts, Culture and Heritage in the lecture section of the program, and *B.E.D. (Episode 5)* in its performance section.

Studio Rental: 46 days Guest Room Rental: 42 days



事業日誌

会計報告

評議員・理事・監事・顧問名簿

REVIEW OF ACTIVITIES

FINANCIAL REPORT

TRUSTEES, DIRECTORS,
AUDITORS AND ADVISER

2016年4月－2017年3月

- 2016年
- 5月23日 第23回理事会開催(2015年度事業報告、財務諸表および同附属明細書並びに財産目録報告、事業執行および法人管理の状況報告)
- 6月21日 第8回評議員会開催(2015年度事業報告、財務諸表および同附属明細書並びに財産目録報告、事業執行および法人管理の状況報告)
第24回理事会開催(理事長・副理事長・常務理事選出、顧問選任)
- 6月29日 2015年度事業報告等を内閣府に提出
- 8月1日 2017年度《現代演劇・舞踊公募プログラム》募集開始
- 9月28日 2017年度《現代演劇・舞踊公募プログラム》シーズン・フェロー申請締切
- 10月20日 2017年度《現代演劇・舞踊公募プログラム》サバティカル／パートナーシップ・プログラム／ヴィジティング・フェロー申請締切
- 10月21日 第25回理事会開催(アドバイザー委員選出の件)
- 12月21日 2017年度アドバイザー・ミーティング開催
- 2017年
- 1月26日 第26回理事会開催(2017年度事業計画及び収支予算、事業執行および法人管理の状況報告)
2017年度助成等決定発表
- 2月1日 2016年度助成対象者懇親会を森下スタジオ新館にて開催
- 2月22日 2017年度事業計画・予算を内閣府に提出

April 2016 - March 2017

- 2016
- May 23 The 23rd Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: report on activities and management, settlement of accounts for fiscal year 2015; report on the current state of activities and management of the foundation)
- June 21 The 8th Board of Trustees Meeting in Tokyo (Agenda: report on activities and management, settlement of accounts for fiscal year 2015; selection of Trustees, Directors, and Auditors)
- The 24th Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: Election of President, Vice President, Managing Director and appointment of Adviser)
- June 29 Submit annual report 2015 to the Cabinet Office
- August 1 Application period for the 2017 Contemporary Theater and Dance Grant and Studio/Guestroom Awards and Visiting Fellows Program begins
- September 28 Application deadline for the 2017 Contemporary Theater and Dance Grants and Studio Awards: Saison Fellows
- October 20 Application deadline for the 2017 Contemporary Theater and Dance Grants and Studio/Guestroom Awards: Sabbatical/ Partnership / Visiting Fellows Programs
- October 21 The 25th Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: Selection of members of the Advisory Meeting)
- December 21 Advisory meeting for the 2017 Contemporary Theater Grant and Studio/Guestroom Awards and Visiting Fellows Program held in Tokyo
- 2017
- January 26 The 26th Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: proposal of plans and budget for fiscal year 2016; report on the current state of activities and management of the foundation)
Announcement of 2017 Contemporary Theater and Dance Grant and Studio/Guestroom Awards and Visiting Fellows Program
- February 1 Party for 2016 Grantees at Morishita Studio
- February 22 Submit annual plan for 2017 to the Cabinet Office

正味財産増減計算書
2016年4月1日-2017年3月31日

NET ASSETS VARIATION STATEMENT
from April 1, 2016 to March 31, 2017

単位:円/in yen

I 経常収益の部		Ordinary Revenue
1. 基本財産運用収入	Investment income from endowment fund	178,181,301
2. 特定資産運用収入	Investment income from designated fund	7,781,013
3. 賃貸収入	Income from lease	16,171,534
4. その他の収入	Other income	6,293,123
経常収益期計	Total Ordinary Revenue	208,426,971
II 経常費用の部		Ordinary Expenses
1. 事業費	Program services	188,323,774
(うち助成金)	Grant	63,596,259)
2. 管理費	Management and general	55,536,199
経常費用計	Total Ordinary Expenses	243,859,973
評価損益等計	Total of Profit and Loss on Appraisal	184,390,566
当期経常増減額	Current Change in Ordinary Profit	148,957,504
当期経常外増減額	Current Change in Extraordinary Profit	0
当期正味財産増減額	Current Change in Net Assets	148,837,564

貸借対照表
2017年3月31日現在

BALANCE SHEET
as of March 31, 2017

単位:円/in yen

I 資産の部		ASSETS
1. 流動資産	Current assets	
現金預金	Cash	267,199,003
未収収益等	Accrued revenue	811,093
流動資産合計	Total current assets	268,010,096
2. 固定資産	Fixed assets	
基本財産	Endowment	
土地	Land	2,556,129,607
有価証券	Securities	6,160,402,924
基本財産合計	Total endowment fund	8,716,532,531
特定資産	Designated fund	481,445,732
その他の固定資産	Other fixed assets	357,286,613
固定資産合計	Total fixed assets	9,555,264,876
資産合計	TOTAL ASSETS	9,823,274,972
II 負債の部		LIABILITIES
負債合計	TOTAL LIABILITIES	44,893,984
III 正味財産の部		NET ASSETS
正味財産	Net assets	9,778,380,988
(うち当期正味財産増加額)	Increase of assets	148,837,564)
負債および正味財産合計	TOTAL LIABILITIES AND NET ASSETS	9,823,274,972

資金助成の概況

Summary of Grants 1987 - 2016

分野 category	年度 year	申請件数 number of applications	助成件数 number of grants	助成金額(円) grants in yen
現代演劇・舞踊助成 Contemporary Theater and Dance Program Grants	1987-2012	4,003	972	2,155,518,866
	2013	151	45	53,900,000
	2014	206	54	52,134,519
	2015	194	53	57,016,917
	2016	209	50	57,596,259
	累計 total	4,763	1,174	2,376,166,561
非公募助成 Designated Fund Program Grants	1987-2012		221	758,253,449
	2013		2	6,500,000
	2014		3	7,621,503
	2015		2	6,500,000
	2016		1	6,000,000
	累計 total		229	784,874,952
合計 grand total			1,403	3,161,041,513

2016年度《現代演劇・舞踊公募プログラム》の申請・採択状況

Data on Contemporary Theater and Dance Programs in 2016

プログラム programs	芸術家への直接支援 Direct Support to Artists			パートナーシップ・プログラム Partnership Programs		フライト・ グラント Flight Grant	合計 Total	ヴィジティング・ フェロー Visiting Fellows
	セゾン・フェロー Saison Fellows		サバティカル (休暇・充電) Sabbatical Program	創造環境 イノベーション Creative Environment Innovation Program	国際 プロジェクト 支援 International Projects Support Program			
	ジュニア・ フェロー Junior Fellows	シニア・ フェロー Senior Fellows						
申請件数 number of applications	74* [49/23/2]**	28* [19/8/1]**	0	20	32*	55	209	68
助成件数 number of awards	15* [11/4/0]**	8* [4/3/1]**	0	9	9*	9	50	5
助成金額(円) grants in yen	14,831,311	21,500,000	0	9,150,000	11,350,000	764,948	57,596,259	-

* 継続を含む Including extended grants

** (演劇/舞踊/パフォーマンス) (theater/dance/performance)

2016年度 森下スタジオ 稼働状況(収益事業を含む)

Morishita Studio Occupancy Report for FY2016/17 (including days used for profit-making business)

2016年度 FY2016/17	4月 April	5月 May	6月 June	7月 July	8月 August	9月 September	10月 October	11月 November	12月 December	1月 January	2月 February	3月 March	年間合計 Total	年間 稼働率(%) Annual occupancy rates (%)
開館日数 Days open	27	31	30	31	31	30	31	30	28	28	28	31	356	
休館日数 Days closed	3	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	9	
利用可能延べ日数(開館日数×4スタジオ) Total of available studio days (Days open x 4 Studios)	108	124	120	124	124	120	124	120	112	112	112	124	1,424	
各スタジオ 利用実績日数 Number of days used per studio	Aスタジオ(中/109.35㎡) Studio A (Medium/109.35 sq.m) 本館1階 1F, Main Bldg.	26	31	29	30	31	29	31	30	28	28	29	350	98.3
	Bスタジオ(中/109.35㎡) Studio B (Medium/109.35 sq.m) 本館2階 2F, Main Bldg.	27	31	30	31	31	30	30	29	28	28	31	354	99.4
	Cスタジオ(大/238.56㎡) Studio C (Large/238.56 sq.m) 本館1階 1F, Main Bldg.	26	29	30	25	31	30	30	21	28	28	30	336	94.4
	Sスタジオ(小/77.97㎡) Studio S (Small/77.97 sq.m) 新館1階 1F, Annex	27	30	29	30	31	30	31	27	28	28	27	349	98.0
利用実績延べ日数 Total of used studio days	106	121	118	116	124	119	122	107	112	112	111	121	1,389	97.5
月別稼働率(%) Monthly occupancy rates (%)	98.1	97.6	98.3	93.5	100.0	99.2	98.4	89.2	100.0	100.0	99.1	97.6		

【ゲストルームについて】 森下スタジオ新館2階にある3つのゲストルームを、2016年度中に延べ25組が537日間利用した。

[Guest Rooms] 25 users used 3 Guest Rooms for 537 days in total.



オフ・ニブロール「ダンス・イン・アジアーアジアのダンスカンパニーは何ができるか?」での公演 森下スタジオ、2017年2月 撮影:Anna
Performance at "DANCE IN ASIA "What can Asian Dance Company do?" organized by off-nibroll at Morishita Studio, February 2017
Photo: Anna



ARTizan「国際ダンス交流プロジェクト《Odori-Dawns-Dance》」プレゼンテーション 森下スタジオ、2017年1月
Presentation of International Dance Dialogue Project 'Odori-Dawns-Dance' organized by ARTizan at Morishita Studio, January 2017



Explat「Explat設立1周年記念イベント+交流会」森下スタジオ、2016年6月
"First year Anniversary event + party" of Explat at Morishita Studio, June 2016.

(2017年6月末現在／五十音順)

▶評議員

- 石井 達朗 舞踊評論家
一柳 慧 作曲家／ピアニスト／公益財団法人神奈川芸術文化財団
芸術総監督
植木 浩 一般社団法人現代舞踊協会 会長
内野 儀 学習院女子大学国際文化交流学部 教授
小池 一子 武蔵野美術大学 名誉教授／十和田市現代美術館 館長
佐藤 俊一 パイオニア株式会社 取締役／一般財団法人Marching J
財団 代表理事
堤 たか雄 一般財団法人セゾン現代美術館 代表理事
沼野 充義 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
松岡 和子 演劇評論家／翻訳家
水落 潔 演劇評論家
山崎 正和 評論家／劇作家
林野 宏 株式会社クレディセゾン 代表取締役社長

▶理事・監事

▷理事長

- 伊東 勇* 元・株式会社パルコ 取締役兼代表執行役会長

▷副理事長

- 堤 麻子 一般財団法人セゾン現代美術館 評議員

▷常務理事

- 片山 正夫*

▷理事

- 鍵岡 正謹 岡山県立美術館 顧問
堤 康二 株式会社パルコ エンタテインメント事業部 制作顧問
中野 晴啓 セゾン投信株式会社 代表取締役社長
北條 慎治 元・株式会社クレディセゾン 常務取締役
渡邊 紀征 元・株式会社西友 取締役会議長・代表執行役

▷監事

- 伊藤 醇 公認会計士
三宅 弘 弁護士／獨協大学特任教授

▶顧問

- 堤 猶二 株式会社横浜グランドインターコンチネンタルホテル
代表取締役会長

*常勤

(as of June 2017 / in alphabetical order)

▶TRUSTEES

- Toshi Ichiyonagi Composer and Pianist; General Artistic Director,
Kanagawa Arts Foundation
Tatsuro Ishii Dance Critic
Kazuko Koike Professor Emeritus, Musashino Art University ;
Director, Towada Art Center
Kazuko Matsuoka Theater Critic and Translator
Kiyoshi Mizoochi Theater Critic
Mitsuyoshi Numano Professor, Graduate School of Humanities and
Sociology, The University of Tokyo
Hiroshi Rinno President and Chief Executive Officer, Credit
Saison Co., Ltd.
Shunichi Sato Director, Pioneer Corporation; President,
Marching J Incorporated Foundation
Takao Tsutsumi President , Sezon Museum of Modern Art
Tadashi Uchino Professor, Faculty of Intercultural Studies,
Gakushuin Women's College
Hiroshi Ueki President ,Contemporary Dance Association of
Japan
Masakazu Yamazaki Critic and Playwright

▶DIRECTORS AND AUDITORS

▷PRESIDENT

- Isamu Ito* Former Member of the Board and Representative
Executive Officer, Parco Co., Ltd.

▷VICE PRESIDENT

- Asako Tsutsumi Trustee, Sezon Museum of Modern Art

▷MANAGING DIRECTOR

- Masao Katayama*

▷DIRECTORS

- Shinji Houjyou Former Managing Director, Credit Saison Co., Ltd.
Masanori Kagioka Adviser, Okayama Prefectural Museum of Art
Haruhiro Nakano President and Chief Executive Officer, Saison
Asset Management Co., Ltd
Koji Tsutsumi Production Adviser, Entertainment Department,
Parco Co., Ltd.
Noriyuki Watanabe Former Chairman of the Board and Representative
Executive Officer, Seiyu GK

▷AUDITORS

- Jun Ito Certified Public Accountant
Hiroshi Miyake Attorney at Law; Professor, Dokkyo University

▶ADVISER

- Yuji Tsutsumi Chairman & CEO, Yokohama Grand Inter
Continental Hotel Co., Ltd

*full-time

公益財団法人セゾン文化財団

設立年月日 1987年7月13日
正味財産 9,778,380,988円(2017年3月31日現在)

常務理事 片山正夫

事務局長／事業部長 久野敦子

事業部 岡本純子 プログラム・オフィサー
堤 治菜 プログラム・オフィサー
稲村太郎 プログラム・オフィサー

管理部 福富達夫 管理部長／森下スタジオ ジェネラル・マネジャー
橋本美那子 アドミニストレーター

斉藤邦彦 森下スタジオ マネジャー
前川裕美 森下スタジオ マネジャー
上田 亘 森下スタジオ マネジャー
橋本真也 森下スタジオ アシスタント・マネジャー

2016年度 事業報告書

2017年10月発行

公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階
TEL: 03(3535)5566 FAX: 03(3535)5565
foundation@saizon.or.jp
http://www.saizon.or.jp

翻訳 新井知行(P.77, 79, 81:福富達夫)

デザイン 太田博久／ゴルフポッチ

THE SAISON FOUNDATION

Date of Establishment July 13, 1987
Net assets ¥9,778,380,988 (as of March 31, 2017)

Managing Director Masao Katayama

General Manager / Program Director Atsuko Hisano

Program Junko Okamoto *Program Officer*
Haruna Tsutsumi *Program Officer*
Taro Inamura *Program Officer*

Administration Tatsuo Fukutomi *Administrative Manager /*
General Manager, Morishita Studio
Minako Hashimoto *Administrator*

Kunihiko Saito *Manager, Morishita Studio*
Hiromi Maekawa *Manager, Morishita Studio*
Wataru Ueda *Manager, Morishita Studio*
Shinya Hashimoto *Assistant Manager, Morishita Studio*

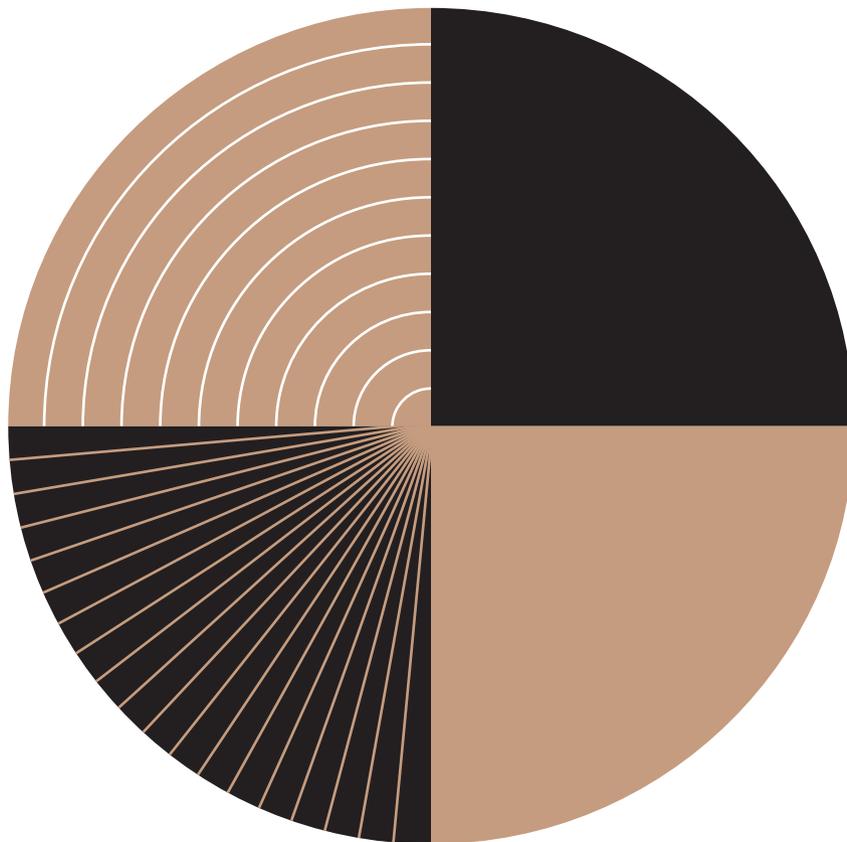
ANNUAL REPORT 2016

Published: October 2017

THE SAISON FOUNDATION
Kyobashi Yamamoto Bldg. 4F, 3-12-7 Kyobashi, Chuo-ku,
Tokyo 104-0031, Japan
TEL: +81 3 (3535) 5566 FAX: +81 3 (3535) 5565
foundation@saizon.or.jp
http://www.saizon.or.jp/english

Translated by Tomoyuki Arai (P.77, 79, 81: Tatsuo Fukutomi)

Designed by OTA Hirohisa / golzopocci



THE SAISON FOUNDATION

公益財団法人セゾン文化財団

2016年度 事業報告書 2016年4月-2017年3月